

---

# 僕たちにはヒーローがいる ~仮面ライダー吹雪鬼~

御堂志生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕たちにはヒーローがいる 〈仮面ライダー吹雪鬼〉

### 【Nコード】

N3806I

### 【作者名】

御堂志生

### 【あらすじ】

はじめまして、猛士関東支部所属・吹雪鬼こと藤倉双葉です！文字通り、属性は雪と氷。とくに雪山は専門なので冬場はフル稼働しています。ここ最近、魔化魍の出現数が増えており、今年からはお休みまで減りそうです。25歳のうら若き乙女としましては、出会いが減ると更に婚期が遅れそうです……冗談ですってば。ちなみに、右手に付けた『金剛』という鈴で鬼に変身して、専用の音撃武器で戦います。この鈴が数百年前から伝わるもので、特殊な力を色々秘めています。鈴が鬼を選ぶ、と言われてまして、私が選ばれてしま

いました。だから、猛士の皆さんからは『鈴の鬼』と呼ばれること  
もあります。人知れず、山の中や海岸でコソコソと戦ってる私達  
ですが、応援して貰えたらありがたいです。(by Fubuki)

**前説（注意書き&ファンの愚痴）（前書き）**

本作を故神戸みゆきさんに捧げます。

## 前説（注意書き&ファンの愚痴）

御堂志生と申します。お越し頂き、ありがとうございます。  
さて、本作は2005年に放送された「仮面ライダーヒビキ」が原作です。

テレビ放送のストーリーをなぞる形でお話は進み、30分番組1話を3〜4に分割して、全50話（小説では150話超）連載予定です。

が！ 主役のヒビキは出て来ません！！ というか、存在してません。

関東支部は10鬼となり、ヒビキのポジションに丸々女性ライダーのフブキが入るとお考え下さい。

放送当時、HP等を調べまして、各鬼や猛士の設定はそのまま引用しています。

もちろん、うっかりの抜けはあるかも知れませんが、都合により変更した部分もあります。

とくに、フブキは本名をはじめ属性や武器も正式なデータはありませんので、私の独断により決定しております（笑）

（某巨大掲示板で流れていた、フブキ情報は丸つきり無視しております）

〜〜以下、ファンの愚痴になります〜〜

29話の「輝く少年」 あそこまででしたねえ（苦笑）

すみません、私はどっちかと言えば、前半ヒビキのファンでした。

（あ、でも「555」も好きなので脚本家やPがどうとかは言いま

せん)

おそらく、ココをご覧になるのはファンの方でしょうから、30話以降のドタバタもご存知のことでしょう。

でも基本的に、音撃ってやっぱ無理があると思います……アレでカツコよくしろってほうが(苦笑)

と、いうことで、あのエンディングにかなりフラストレーションが残りました。

結果、フブキのキャラを創り上げ、なんと1話から50話までのプロットを書き上げるという……我ながらイタイことをやってしまいました(苦笑)

何年も放置してたんですが、明日夢に(最初に)弟子になって欲しかったな、とか。あきらにもっと活躍して欲しかったな、とか。イブキのお兄さんは何処に行った!?!とか。色々思いの詰まったストーリーでして……今回思い切って連載することにしました。

サブタイトルはなるべく原作から取ってます。展開も、とくに前半はかなり頂いております。

でも、原作で意味不明だった設定は変更しました。

ちなみに、ヒビキで書かなかったのはイメージ(とくに俳優さん)が強すぎて、気持ちが入り込めなかつたので止めました。(だからヒビキで書けとは言わないで下さい)

「仮面ライダーじゃない!」と散々言われた鬼や魔化魍の世界に、もう一度入ってみたいと思われた奇特な(?)方 N E X T をクリックして下さい。

「仮面ライダーフブキの世界へようこそ」『僕たちにはヒーローが

いる』

くくくくくくくく

フブキの初期設定です。(飛ばしてくれてOKです)

鬼名「吹雪鬼」

変身鬼鈴・金剛

音撃弦：氷輪

音撃震：銃弓

音撃斬：破邪鳴弦

本名 藤倉双葉

年齢 25歳

関東支部10鬼中唯一の女性。変身鬼鈴・金剛の音色で変身。音撃弦・氷輪は剣撃モードでは氷刃に、守備モードでは氷壁に変えられる。

音撃時には銃弓をセットして弦打ちのように弾いて音撃する。また、遠方の敵には鬼石が付いた矢玉を氷輪で射て、その後銃弓をセットし音撃する。遠近両用。

師匠は斬鬼。6年前に独り立ちする。その為、音撃弦・烈雷を使つての音撃や鬼闘術・雷撃拳も使える。

強力(腕力)：400人力(4トンのものが持ち上げられる)

打撃力（パンチ力）：最大時3200貫（約12トン）  
身の丈：6尺4寸（約2m）  
目方：31貫（116kg）  
遠掛け（持久力）：1日17里（約68km）  
飛跳力（ジャンプ力）：最大でひと跳び約40間（73m）  
早がけ（平地で走る速さ）：100m約2.5秒  
蹴力（キック力）：9333貫（約35トン）

## 装備

変身鬼鈴・金剛：フブキが吹雪鬼に変身する際に使用。右手首に付けられ軽く手首を振って特殊な音波で変身する。DAの起動にも使用。ただ、数百年前から伝わる鈴なのでDAの再生は不可。

変身鬼弦・音伽：修行時代より左手首に装着。現在はDAの再生にのみ使用する。DAの起動は可能だか変身は出来ない。

音撃弦・氷輪：吹雪鬼のために開発された弓型の音撃武器。気を込めて氷刃を出すと剣として使え、氷壁を出すと防御に使え。装備帯のバックルにある音撃震・銃弓を組み込んだ音撃は、近距離戦では氷刃を直接突き刺し、遠距離戦では鬼石が付いた矢玉を氷輪で射て音撃する。音撃斬・破邪鳴弦が必殺技。

音撃震・銃弓：装備帯のバックル。氷輪を音撃モードにする際に使用される。

猛士正式車両・吹雪鬼専用車「雪花」<sup>せっか</sup>：フブキに支給されている専用車。シルバーマタリック。



猛士正式車両・吹雪鬼専用二輪車「銀」しろがね…傀儡を追う際の単独行動や別の鬼との共闘で移動が激しい為、フブキに支給されている。軽量で250ccと排気量も小さい。山野を走れるようにオフロード仕様。シルバーカラー。

ディスクアニマル：アカネタカ・ハシヨクヒヨウ・セイジガエル・ルリオオカミ・リヨクオオザル・アサギワシ・キアカシシ

サポーター…立花香須実（23歳）専属ではなく、ベースキャンブを設置する場合にのみ同行する。

以上、HPを参考に考えたものです。

一之巻「吹雪く鬼」(一)(前書き)

ここから本編が始まります。出来れば前説で内容をご確認の上、読んで頂いたほうが無難かも知れませんが(苦笑)もう一度書きますが、ヒビキさんは出てきませんので、よろしくお願い致しますm(

m

## 一之巻「吹雪く鬼」(一)

中学最後の冬休み 大事な受験に向けてみんなが追い込みの短期講習を受ける中、なんと、安達明日夢あたち あすむは万座温泉にいた。

明日夢の母・郁子いくこは、夫亡き後、一人で息子・明日夢を育てている。その母が働くタクシー会社の慰安旅行も兼ねた忘年会に、明日夢は連れて来られたのだった。

群馬県西部にある標高一七〇〇メートル以上の場所にある万座温泉は、はつきり言つてこの時期、スキー客で溢れていた。

「普通はさ、受験生をスキー場に連れて来ないんじゃない？」

来た所でするくに滑れるわけでもない。自慢じゃないが明日夢の運動神経は……十五歳少年の平均をやや下回っていた。一六〇をようやく回つた程度の身長、脂肪もないが筋肉もついてない腕と足。およそ見た目は、女の子と雪合戦でもやってるほうがお似合いであるう。

一人で留守番をすると言つ明日夢に、受験で神経質になっている彼を、一人残しては行けないと母が言い出した。結果、母親思いの明日夢は、受験生でありながら……滑つて転びまくっている。

お気楽な母はそれを見て、

「今、滑つておけば、本番は安心よお」

などと言つていた。

宴会場からは賑やかな声が聞こえている。

明日夢は、淡い月の光が差し込むロτζジの庭を、一人ブラブラと散策していた。

さすがの明日夢も、夜は受験勉強に勤いそんでいたのだが……息抜きがてら外に出て来たのであった。

ほつつと吐く息は真っ白だ。シンとした空気がわずかに露出した

肌を刺すようで……。

(もう一回露天風呂に入って来ようかなあ)  
明日夢がそんなことを考えた瞬間だった。

チリン

真っ白い雪と澄んだ空気に、不意に暖かい色がつくような優しい音が明日夢の耳に飛び込んだ。

「え？ これって……昼間とおなじ」

今日の午後、初心者用のゲレンデでヨタヨタとペンギンのように明日夢は滑っていた。

最初は相手にしてくれていた母の会社の人も、それぞれの腕前に応じて上に行ってしまった。スキー場で一人なんて……僕はなんて親孝行なんだろう……などと口の中で呟きながら、ふと気付くと目の前に行き止まりの標識があった。どうやら、標識の向こうに木立があり、その先は崖のようだ。

と、そこへ家族連れがやって来る。子供二人は明日夢よりはるかに小さく、どちらも小学校低学年程度か。その子どもたちがふざけているうちに、一人が崖に向かって滑り出した。

「あつ……危ない、そっちは」

明日夢は口の中でモゴモゴと呟く。危険は判ってるのに、大きな声で注意も出来ないし、助けたくても身体が動かない。

(やっぱり僕はダメだ……)

見なかったフリをしよう、そんな情けないことを考えた時 何かが明日夢の目の前を横切った。

銀色に煌くスキーウェアに身を包んだスノーボーダーが現れ、文字通り、崖っぷちで子どもを抱き止めると、なんとそのまんま崖か

ら飛んだ！

一瞬の出来事に、明日夢は恐る恐る這うように崖のギリギリまで進んだ。下を覗き込むとなんと高さは十メートルを軽く越えてそう。でも、そのスノーボーダーは何でもなかったかのよう、下のほうを子供を抱いて颯爽と滑っていた。

「カッコいい〜」

チリン

ボーダーがすれ違った瞬間、明日夢は確かに聞いた。

それが彼の人生を変える音色だなんて思いもせず、明日夢はその透き通るような鈴の音に、一瞬で心を奪われたのだ。

(どこから聞こえたんだろう?)

明日夢は周囲を見回すが、人影はない。

チリン

ひょつとして上からなのか。そんな風に思い見上げた瞬間。

「えっ？ ええ？ えええっ!？」

ロτζジは四階建てだ。二階のランダの柵を乗り越える人影が…  
…ふわつと身体が浮き、その影がドンドン明日夢に近づき。

く\*く\*く\*く\*

「どうもすみません。ありがとございました」

子供の両親は、これでもか、と言つほど頭を下げ二人の子供の手を引いて引き上げて行った。

「さて、と」

スツと、スノーボーダーがマスクを取ると、女性だった。肩より少し長めのストレートの髪が銀色のウェアに零れる。

彼女は、ロッジに戻ると早速携帯を取り出した。ピッピッと手馴れた様子で幾つかボタンを押す。

「あ、日菜佳<sup>ひなが</sup>? 私だけど……」

『フブキさん! お疲れ様ですう〜。退治出来ました?』

相変わらずのテンションと声の高さに、フブキは携帯を一旦耳から離れた。

「あーえつとね、まだなんだなコレが。今日で三日目なんだよね。なんか他に情報ない?」

『ええつ! まだなんですか? ひよつとして腕が落ちました?』  
苦笑するフブキの耳に今度は違う声が聞こえてくる。

『ちよつと、これが仕事納めなんだからね。さつさと終わらせて戻つてこないと、明日のクリスマスも残業だからね』

そんなことを言われても、だ。相手があることなので、そうそう思い通りにはいかない。

「判つてんだけどね。香須実<sup>かすみ</sup>もさ、日菜佳を手伝つて、なんか手がかりを探してよ。ホントに孀恋で合ってる? 浅間山とか言わないよね?」

携帯の向こうから「あんたまた間違つてない?」とか、姉・香須実が妹・日菜佳を叱責する声が聞こえ……。

『とにかく、一応調べては見るけど……どうしてもダメなら応援回そうか?』

『ちなみに、誰なら空いてる?』

『今インターバルなのは……ザンキさんかな』

『……すみません。一人で頑張ります』

フブキは思わず携帯に向かって正座しそうになる。仕事において

師匠にあたる人に、休み返上で働けなんて言える訳がない。香須実とは長い付き合いなので、フブキの痛いところは心得ているようだ。『判ればよろしい。ケーキ食わずに待ってるからね、なるべく早く帰って来んのよ』

『了解!』

電話を切ると、フブキは再び装備を整え、雪の中に飛び出した。

## 一之巻「吹雪く鬼」(二)

フブキは“猛士<sup>たけし</sup>”という組織に所属する。早く言えば、かなりハードな害虫駆除の仕事をしていた。

害虫は総じて魔化魍<sup>まかもう</sup>と呼ばれる。例えば今回の場合、『オニクマ』と呼ばれる魔化魍を退治するために、この孀恋村の万座温泉にフブキは派遣されたのだ。

「熊が出て人を襲ってます！」というような場合は警察や地元の猟銃会が出動するだろう。

だが、その熊が通常の十倍、二十倍あれば……。さらには、近代兵器では退治しきれないモノであれば……。

猛士は、何百年にも渡ってそういった魔化魍と戦ってきた。様々な情報を持ち、有効な武器を作り出し、一般人の被害を最小限に抑えつつ、魔化魍を倒してきたのである。

現代医療において抗生物質は有効だ。しかし、昔ながらの漢方薬も利用されている。それと同じようなものであった。

ただ、魔化魍退治は誰でも出来ることじゃない。

魔化魍と戦うのに相応しい体に作り変えなければならない。それは厳しい訓練を必要とする。だがそれ以上に、適正がなければ不可能なことであった。

フブキは一人、薄暗くなった雪山へ入り込む。

ある程度奥まで進んだ時、フブキは腰のディスク用ホルスターから、円盤状のものを取り出した。そして、軽く右袖を押し上げ、手首を振る。右手首に巻かれたブレスレットから先ほど明日夢が聞いた鈴の音が辺りに響き渡った。

その瞬間、なんとディスクは鷹のような形に変形したのだ。

「アカネ、よろしくね！」

フブキは笑顔でディスクの鷹に声を掛ける。『アカネ』と呼ばれ



た鷹は、フブキの頭上を旋回し 了解、とばかり高い声で一鳴きすると、更に山奥に向かって飛び去ったのだった。

それは、猛士が開発した偵察型武器の一種、正式名称……デイスクアニマル“アカネタカ（茜鷹）”であった。

くわくわくわくわく

「痛ってー」

「あ、痛たたた……」

フブキはロツジのベランダで、DA“アカネタカ”の偵察報告を聞き、急ぎ出動しようとした。この寒さだ、どんな物好きも裏庭なんぞを徘徊してやしないだろう と思い、フブキは近道をすることに決めたのだ。

そして、一気にベランダを飛び越える。

「えええっ！」

と聞こえたのはその瞬間だった。

彼女は咄嗟に下にいた人間を下敷きにしないように、身体を捻り、明日夢を抱き込むような形で雪の上に転がった。

当然、そんな素早い反応など明日夢には出来ない。呆然と立ち尽くし、次に気付いた時は自分も雪の上に転がっていたのだ。いや、正確にはフブキに抱き締められ、彼女の上に乗る形で……。

「ごめんね。怪我不い？」

「あ、はい」

「近道のつもりだったんだけどね。まさか、人がいるなんて」

「あ、すみません」

明日夢はなんで謝ってるんだらうと思いつつ、とりあえず謝った。性格なのである。

「いや、それはいいんだけどね。……そろそろ下りて貰えたらありがたい。ついでに手も……どけて貰えるかな」

明日夢はハツとした。

どうしたわけか上から落ちてきたほうの人間が下になっている。

しかも、女性の上に乗ったままだ。おまけに、ふわふわと柔らかくて手触りがいいなあと思っていたら、女性の胸の位置に自分の手があった。

明日夢は雪の上を転げるようにフブキから離れた。

「すつすみません。すみません。決してわざとって訳じゃ」

「判ってるって。そんな少年に触られたくらいで悲鳴上げるような歳じゃないから、心配しないで」

真冬の雪山だというのに意外と軽装だな、フブキを見て明日夢はそんな風に思った。

母のようなオバサンではない。でも、同年代と言うほど若くはなかった。多分二十代、小柄で細身の明日夢に比べて、見るからにアスリートといった機敏さをフブキに感じた。そして、視線が合うと明日夢に向かってニッコリと微笑む。その人懐こい笑顔に、思わず明日夢も笑顔になっていた。

直後、フブキはハツとした表情になり、立ち上がった。

「あ、あのね。私、飛び降りたあの部屋……二〇一号室に泊まっている、藤倉ふじくわと言います。ちょっと、約束があつて……急いでて……。悪いんだけど、もしどっか怪我したら後で部屋まで来てくれるかな？ ホントごめんね。じゃー！」

「え？ あ、ええあの」

フブキはざっと雪を払うと、身を翻し駆け出した。

それは明日夢の目には……

(デートの約束でもあるのかな?)

そんな風に思えたのだった。

だが、例の鈴の音のことを聞こうと思ったのに忘れてしまった。フブキの一挙手一投足に目が釘付けになり、見惚れていたせいもある。

一目惚れと間違うほど、明日夢の胸の中に沸き立つ感情がある。どこか懐かしく、あの鈴の音色もフブキの姿も、明日夢の内に眠る何かを揺り起こしているようだ。

「へ、へクシユン！」

どれくらいフブキの後姿を見ていたのだろう。名前も部屋番号も聞いたのだから、その気になれば明日会える。今夜は部屋に戻ろう、明日夢が引き返そうとした時、つま先で何かを蹴った。

それは透明な定規に見えた。でもよく見ると、方位が書いてある。それは、よくあるタイプに登山用のコンパスだ。今まで何もなかったのだから、おそらくは彼女のもの……。

そう思った明日夢は、無謀にもフブキの後を追ったのであった。

一之巻「吹雪く鬼」(二)

(後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

雪山設定なもので、魔化魍はオリジナルにしました。

原作では鬼は誰でも目指せる(名前の韻については説明なし)感じでしたが、個人的に面白くないので『適性が必要』と設定しました。三之巻で具体的な説明が出てきます。

後、オープニングのミュージカルは……要りませんよね？(苦笑)

## 一之巻「吹雪く鬼」(三)

明日夢と別れたフブキはロツジの駐車場に停めた車に走り寄った。猛士から支給されてる、いわば社用車だ。オフロードタイプの四駆で、シルバーメタリック、雪山に出向くことの多いフブキのため寒冷地仕様になっていた。

フブキはリヤシートからリュックを取り出すと、肩に掛ける。いざ戦闘となると、自分で色々用意して行かなければ、後々洒落にならない事態を招いてしまう。

そして、長さ五十センチ程度の小型の弓を取り出した。それを腰のベルト……背中部分に引っ掛けるように装着する。どうやら、そういう仕様になっているらしい。

### チリーン

鈴の音と共に、今度のディスクは豹に変形した。一瞬、黒に見えるたが雪の上に降り立った時、それは色を白に変えた。フブキ専用のDA“ハシヨクヒヨウ（破色豹）”だ。

「シヨク！ 頼んだよ」

ディスクの豹は尻尾らしきものを振り、あっという間に雪の森に溶け込んだ。間髪入れず、フブキはその後を追う。

そして林の中に足を踏み入れた瞬間、木の上からフブキに飛びつく影が二体。。

それは一見人間のように見えるが、妖気を内に秘めた魔化魍の育ての親だ。常に番いで行動する彼らを……人型の男を“童子”、同じく女を“姫”と猛士では呼んでいた。

魔化魍は種類によって、幼体から成体になるのに時間を要するものもある。幼体の間はほとんど捕食が出来ず、この二体が代わって

捕食するのだ。

姫と童子が発生した後に魔化魍を生み出すのか、逆に、魔化魍が発生と同時にこの二体を伴うのか……まだ解明はされていない。

ただ、フブキらによって魔化魍が生育途中で駆除された場合、新たな魔化魍の幼体が発生することが確認されている。逆は未確認のため、猛士の中では「姫と童子の発生が先」という説が主流になりつつあった。

「チツ！」

フブキは短く舌打ちすると雪の上を転がって二体の攻撃を避ける。そして、手にしたリュックを遠くに放り投げた。

DAたちには魔化魍の発見を命令していた。それに、魔化魍『オニクマ』の行動は夜間に限定される。姫と童子は昼間に捕食して、夜間は『オニクマ』の傍にいるものだと思いついていた。

更に、この二体は生育する魔化魍と特徴がよく似ている。『オニクマ』の童子と姫なら、もっと大柄で動きが鈍い。その代わりに立ち木を叩き折るくらいの怪力で攻撃してくるはずだ。

こんな風从上から攻撃して来て、しかも雪山で活動するものといえは……。

フブキが脳内に収まったデータを取り出そうとした時、左右から糸を吐き掛けてきた。腰から小型の弓を外し、それで振り払おうした瞬間、逆に巻き取られる。フブキは咄嗟に、糸が身体に巻きつく直前、手首の鈴を鳴らした。

「お前たち……『ユキグモ』の童子と姫だね」

無駄な足掻きは止め、童子らに話しかける。

身体を自由を奪ったことで、彼らはゆっくりとフブキに近づいた。そして口を開き、人間の言葉を発したのだ。

【鬼だ】

【鬼だね】

そう言いながら二体は人型から本来の異形に変形する。二足歩行は変わらずだが……それ以外は、まるで異世界から来たような不気味な容姿となった。変形後の二体を猛士では“怪童子”“妖姫”と区別していた。奴らは変形後のほうが、より強敵となる。

二体が踏み出した瞬間、DAアカネとDAシヨクが同時に戻ってくる。フブキが鈴の音色で呼び戻したのだ。アカネは鋭い翼で奴らの吐き出した糸を切り、シヨクは二体に攻め込む。

「サンキュ！」

DAに声を掛けた後、フブキは右手首をブンツと振った。

チリリーン

鈴付きのブレスレット、正式名称は“変身鬼鈴・金剛”という。鈴は四個付いていて、これを鳴らし、精神を統一して額に翳す。すると

静寂の中、突如フブキの周囲にだけ雪が舞い上がった。いや、そんな生易しいものではない。彼女の周囲にだけ猛吹雪が起こり、それが全身を包み込んだのだ。フブキを中心に凄まじい風が吹き荒れ、残った数本の糸もあつと今に千切れ飛ぶ。

そして 雪のカーテンを弓で一閃して姿を現したのは、“鬼”に変身したフブキ、いや、“吹雪鬼”であった。

吹雪鬼は間髪入れずに怪童子を攻め立てた。

「出でよつ！ 氷刃！」

掛け声と共に、前に突き出した弓は両の先端から氷の刃が現れる。

それぞれ、約五十センチほどもあった。短弓が一気に剣となり武器となる。雪の上に華麗に舞うように吹雪鬼は怪童子を追い込む。しかし、横から妖姫が吹雪鬼に糸を吐きつけた。

氷剣が糸に絡め取られる。そこをチャンスとばかり、怪童子が口から青銅色の剣を吐き出し、吹雪鬼に斬りかかった。

「ハッ！」

吹雪鬼はあくまで冷静に、氷剣の先端まで気合いを籠める。すると、妖姫の糸はあっさり氷結し、そのまま一気に怪童子の剣を薙ぎ払った。返す一刀で怪童子を叩き斬る。凍った糸は粉々に砕け散り、怪童子は断末魔の悲鳴を上げた。仕上げとばかり、吹雪鬼は氷剣を怪童子の体に突き刺す。

「ハアッ！」

再び気合を入れ、剣先から凍気を怪童子の体内に送り込む。

怪童子は一瞬で凍りつき……蜘蛛の糸と同じく、飛散したのであった。

「まずは一匹」

吹雪鬼がそう言って妖姫を振り返ったとき、妖姫は口から槍のようなものを吐き出した。怪童子の剣と同じく青銅色をしている。

今度はそれを使って吹雪鬼に攻撃を仕掛ける。だがその攻撃を、吹雪鬼は余裕を持って受け流した。森を抜け、道路の端に追い詰め、氷剣を突き刺し一気にケリを着けようとした時、不測の事態が起こったのだ。

なんと、上から明日夢が雪の上を滑り落ちてくる。

「うわあっ！ わ、わ、わ、」

そのコースは、どう考えても吹雪鬼と妖姫のど真ん中、ストライ



クを狙っていた。

「う、嘘でしょ?」

「うわっ! 助けてえー!」

く二之巻「咆える蜘蛛」にっづく〜

一之巻「吹雪く鬼」(三)(後書き)

と、まあこういった感じで進みます。

原作と同じようなシーンも多くあって、映像も浮かびやすいのではないかと(笑)

ハシヨクヒヨウはフブキのオリジナルDAです。

出来れば1週間にサブタイトル1つ消化できたらいいなあ、と思っ  
てますが……。

その場合、テレビ放送並みに1年くらい連載することになるかも知  
れませんが、いや、ひよっとしたらそれ以上(汗)

早速『お気に入り』に入れて下さった読者さまありがとうございます。  
す。

末永く(?)よろしくお願い致しますm( )m

## 二之巻「咆える蜘蛛」(一)

フブキの後を追いかけた明日夢の耳に、突然人が争うような音が聞こえる。彼は咄嗟に、フブキが何かに巻き込まれたんじゃないか、と思ったのだ。恐る恐る近づき、身を乗り出した瞬間、彼は雪に足を取られた。

止めようもなくズルズルと滑り落ち。その視線の先にいるのは、奇妙な化け物と、神話や昔話の世界に出てきそうな一本角の鬼であった。でも、青鬼や赤鬼ならともかく、プラチナカラーの銀鬼なんて見たことも聞いたこともない。

そんなことを考えながら、両者の戦闘に割り込む形で飛び込んでしまったのだった。

当然、妖姫は手にした槍状の武器を明日夢の頭上に振り下ろす。吹雪鬼は、咄嗟に明日夢に飛びついて覆いかぶさった。直後、吹雪鬼の背中には妖姫の槍で大きく裂かれたのだ。

主人のピンチとばかり、DAシヨクとアカネは妖姫を攻撃し始める。怪童子をやらね不利と悟ったのか、妖姫は深い森に姿を消すのであった。

そんな異形のものとの戦いを間近で見た明日夢は、ついには緊張の糸が切れ……次第に意識が遠のいていくのだった。

「……参ったな」

鬼の顔に表情はなかったが、吹雪鬼は残念そうな声で森に目をやった後、明日夢を見下ろした。

「痛つつう」

吹雪鬼の背中にはパツクリと裂けていた。だがそう深くはないのだろう、出血も少ない。吹雪鬼は僅かに気合を込めると見る見る間に傷は塞がって行く。鬼の優れた身体能力、治癒力ゆえだ。

数分後、明日夢が目覚めた時、吹雪鬼はフブキに戻っていた。

「ふ、藤倉さん！今ココに、化け物がいませんでしたか？妖怪というか、鬼というか……襲われませんでした？」

一般人に見られた時の素晴らしい形容はいつものことである。苦笑いを浮かべつつ、フブキは答えた。

「いや、何も見てないけど」

「凄いものを見ちゃったんです！化け物と化け物が戦って……でも銀色の鬼みたいな奴は、人間の味方かもしれない……僕を助けてくれたみたいだし」

夢中になって目撃談を語る明日夢に、フブキは少し距離を取って背を向けた。

強固に否定したら、この年頃の少年はむきになって探しはじめることがある。この仕事に就いて六年……様々な経験から、フブキは敢えて何も言葉にせずにいる。そして、右手を上げ、なるべく自然に見える動作で髪をかき上げる。

チリン

この音を聞きつけ、DAたちは探索を止め、ロッジに戻るであろう。

フブキは、明日夢をロッジまで無事に連れて戻るのが先決だと判断した。どのみち敵が『ユキグモ』であるなら、行動範囲はもつと山頂、昼間に仕掛けるのが有利とのデータを思い出していた。

しかしその時、明日夢が信じられないことを口にしたのだ。

「あ！その音、やっぱり藤倉さんだったんですね？」

「……音？何の音が聞こえたの？」  
らしくないほど、フブキの声に動揺が浮かぶ。

「鈴の音です。昼間、子どもを助けたスノーボーダーからも聞こえ

たんですよね。あれって藤倉さんだったんですか？」  
その言葉に、フブキは息を飲むのであった。

くくくくくくくく

電話の向こうから聞こえてきたのは、

「だから言ったでしょ！ あんたはいつたい何を調べてるわけ？

最近、弛たるんでるんじゃないの！？ これだから女は、とか、東京の

立花姉妹は役に立たない、とか 吉野に言われるんだからねっ！」

それは、立花姉妹の姉、香須実の罵声であった。

もちろん、それはフブキに向けられたものではなく……

「お許し下さい、お姉さま。これでも、一生懸命調べております

う」「フブキさん。何とか言つて下さいまし！」

電話口から立花姉妹の妹、日菜佳がフブキに泣きついた。

立花姉妹の父・立花勢地郎たちばなせいぢろうは猛士の関東支部長だ。ちなみに、猛士本部は奈良県南部、奥吉野と呼ばれる地域の山中にある。

立花家は猛士の中で、宗家に次ぐ重要な位置にあった。それは代々、吹雪鬼のような魔化魍おにと直接戦う“鬼”を輩出する家系ということである。しかし、ここ三代ほど鬼は出ておらず、幾分立場が弱くなっていた。

そんな中、香須実の志望は鬼であった。

だが、彼女に鬼の適性はなく、諦めざるを得なかったのだ。現在は、鬼を補佐するサポーターとして、かなり危険な場所にも出勤している。

真面目で几帳面、それでいてアクティブな姉に比べ、幾分大らかでインドア派の妹・日菜佳はデスクワークであった。魔化魍予想か

らデータ管理、鬼たちのシフト管理までやっている。問題は予想だが……外すと今回のように大目玉を喰らう。出現する魔化魍によって派遣する鬼が変わるのだから、迂闊に間違われては人の命に関わるのだ。

今回は吹雪鬼だから良かったが……そう、猛士の中でも吹雪鬼は特殊な存在なのである。

そんなフブキは六年前から立花家に下宿している。

フブキの父も猛士に籍を置いていた。関東のほうに住み、魔化魍出現を支部に報告する役目に就いていたのである。フブキの父は吉野の出身ではないが、魔化魍の存在を知ってからは猛士の仕事に全身全霊を注いでいた。その関係で、十六年前に関東支部長を任され上京した立花一家とは、非常に懇意なのだ。

とくに父・勢地郎と二人で、幼稚園の頃から東京で暮らす日菜佳は、実の姉以上にフブキを慕っている。

『か、香須実……私は大丈夫だから、そんな怒らないで……』

『フブキッ！ あんたがそう言っつてこの子を甘やかすから、まあいいか、っつて思うんでしょ！』

『はい、すみません』

『この三日で更に被害者が増えてるはずよ。魔化魍だつて大きくなつて……成体になつてたら厄介なことになるんじゃないのっ？』

『はい、仰る通りです』

反対に香須実は病弱な母に付き添い、高校卒業まで吉野で暮らした。月に一度会う妹・日菜佳は、幼い頃は人見知りが激しく、実の姉にもどこかよそよそしい。五年前に母が亡くなり、香須実が上京したときには……既に家族の顔をしてフブキがそこにいたのだった。

当時の香須実の心境はかなり複雑なものだったであろう。

もちろん今ではそれぞれに居場所があつて、お互いの距離も見つけている。

『本当に大丈夫だから。明日の昼間には片付けて、夜には戻る。だから……ケーキはちゃんと残しておいてよ』

とりあえず、クリスマスケーキの心配をする辺りがフブキらしい。香須実はこれ以上怒るのを止めた。

『判ったわよ。忘年会だつてあんた待ちなんだからね！ 新年会になる前に帰つて来ないと、皆から袋叩きにされるわよ』

猛士とてごく普通の組織である。年末年始は慰労会が多い。

現場で魔化魍と戦う鬼は、関東支部だけで十人いる。事務職やらサポーターやら、車両部にも人はいて、更に四人の鬼に“弟子”と呼ばれる見習いが付いていた。

忘年会は一同に会して行われるのだが……毎年、フブキのせいですることが多い。冬場は氷属性のある吹雪鬼に出番が多く、今回のように少しでも手間取るとあちこちの予定を狂わせてしまうのである。

『了解。それから、さ』

フブキには一ツ気になることがあつた。いや、報告しなければならぬことが……。

『何？ まだなんか気になることがあるの？』

『……いや、なんでもない』

もう一度確認してから……フブキは胸の中でそう呟いたのだつた。

一一之巻「咆える蜘蛛」(一)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

来週の予定でしたが早めにUPします。一一之巻は全四話です。



## 二之巻「咆える蜘蛛」(二)

雪の深い森の中、明日夢のおかげで吹雪鬼から逃げ出した姫は、朽ち果てた山小屋に語りかけていた。

【あなたの父君は、鬼さんに殺されたのだと思うわ】

山小屋は返事の代わりにカタカタと揺れ……。

くわくわくわくわく

翌朝。

ロッジのレストランで、明日夢は昨夜見た化け物同士の戦いを母に報告していた。だが、まったく信じようとしなない。

明日夢自身、一晩経って夢か現まことか微妙な気分である。偶然近くにいた藤倉と名乗る女性も見なかったと言っていた。まさかその女性フブキが化け物の片割れであるとは思えない。

フブキと二人で雪道を歩きながらロッジに戻る途中のこと。

明日夢はふと思いつき、フブキに問い掛ける。確か、フブキは誰かと会うと言っていた。その相手に何かあったのではないかと。と、だが、

「ん……一応会えたんだけどね。都合が悪くなったみたい。でも、大丈夫……明日また会う約束をしたから」  
そう言っただけで静かに笑った。

更に、明日夢はどうしてもあの鈴の音が気になり、もう一度聴か

せて欲しいと頼んだのだ。しかし、

「えっと……ごめん。ちよつと部屋に戻って片付けなきゃなんない仕事があるから。また、今度でいいかな？」

「どうやら、体良ていよくはぐらかされた印象である。」

そして「ちよつとお。明日夢う？」

ロッジの近くまで近づいた時、不意に明日夢を呼ぶ声が聞こえた。母だ。

「あんだ、こんな時間にドコ行ってたのよお。勉強してるもんだと思っただら……ふらふらと」

「いや……あの」

突然、フブキを追いかけた理由を思い出す。明日夢はポケットから登山用のコンパスを取り出した。これを落とした人に返そうとしたのだ、と言いつつ、フブキを振り返った瞬間。そこには誰もいないのであった。

「全く！何を言ってるのか、母さんには全然判りません。第一、母さんにはそんな女の人なんて見えなかったわよ。あんだ、雪女にでも騙されたんじゃないの？」

「化け物は信じないくせに雪女は信じるんだ……」

「何か言った!?!」

朝食を食べようと下りて来たフブキの耳に、そんなやり取りが耳に飛び込んで来た。四十歳前後の女性が、息子に向かって何ごとか喚こゑっている。それが昨夜の少年だと気づいた時……。

(……ちよつとヤバイかな)

即行で回れ右をしようとしたフブキだったが……口を嚙くみ俯つく明日夢の姿に、なんとなく責任を感じる。ついつい、立ち止まって引き続き様子を窺おうとしてしまった。

その時だ。

「ああっ！ 昨日のお姉ちゃん！」

後ろから昨日助けた子供に飛びつかれ、フブキはパーティションの影から飛び出してしまい……。

「ああっ！ 藤倉さんっ！」

案の定、明日夢に見つかったのだった。

レストランと言うより、ロッジの食堂といった風情だ。バイキングとは名ばかりで、お盆におかずやご飯、味噌汁を順に乗せるセルフサービスになっている。おかわり自由という辺りがなんとも微妙であった。

シンプルな木製のテーブルを挟み、安達親子とフブキは和やかなムードの中、一緒に朝食を食べることになり……。

「へええ〜〜じゃあ、山でのレスキューがお仕事なんですか？」

「凄いや！ だから、あの時も簡単に子供を助けられたんですね！」

フブキは 藤倉双葉ふじくわしたはと言います、オリエンテリング団体「猛士」に所属するレスキューメンバーで選手の安全確保と救助が主な仕事です といつも通りの肩書きを口にした。

猛士の本業は政府に公認されている団体だ。しかし、世間一般には公表されていない。

魔化魍に対抗する手段が警察や自衛隊にないこと。その出現が山や海に偏っており、住宅地や都心に現れないこと。この二点が非公開の大きな理由であった。

「藤倉さんはひょっとして東京の人ですか？」

「え？ ああ、うん。出身は群馬だけど、東京には結構長く住んでるかな」

「何処ですか？」

「柴又のほうだけど……」

「うわあ偶然ですね！ 僕も柴又です！」

内心冷や汗が流れる。どうも、墓穴を掘ってる気がしてならない。フブキにとつて、こんな風に人を近寄らせることは滅多になかった。「母の会社の旅行について来たんですけど……ほとんど一人で口々に滑れないし……。あの、良かったら、仕事が終わったらで構いませんので、スノーボー教えて貰えませんか？ お問い合わせします！」

明日夢のことはフブキも気になっていた。もう一度、ちゃんと確認しておかなければならないこともある。だが……今はまだ、明日夢を傍に置くわけにはいかないのだ。

朝食を済ませ、自分で取って来たコーヒーカップを手でくるくる回しながら……。些か苦手ではあるが、明日夢を突き放すことにしたのだった。

「悪いけど……上級コースの安全チェックをしたら、今日中に報告しなきゃならなくてね。すぐに山を下りることになってる。ごめんね」

明日夢ははしゃぎ過ぎた自分を悟ったのか、急にしゅんとなる。

「もう、馬鹿な子ねえ。こんな綺麗な方がお一人なわけないでしょ？ あんたみたいな中学生に誘われたってご迷惑なだけじゃない。

ホントにごめんなさいねえ」

「別に誘うとかじゃないよ。ホントに教えて欲しかっただけで……」

「ああ、うん、判ってる。仕事で人には会っただけ……今回は単独の仕事だから、本当に一人なんです。調査の場所を間違っただけで無駄な時間を掛けてるんで、今日はすぐに出発します。明日夢くん、本当にごめんね。でも、君とはまた逢えそうな気がする」

立ち上がりながら、フブキは真っ直ぐに明日夢の瞳を捉えてそう言った。明日夢の目は一瞬で生氣を取り戻す。

「あ、はいっ！」

明日夢の母に会釈すると、軽く手を上げ……「じゃ」と一言口にして食堂を後にするフブキであった。

## 二之巻「咆える蜘蛛」(三)

フブキはリフトから降りると上級者コースに向かった。そして、途中からコースを逸れ、森の中に入って行く。コースにはちらほら人の姿もあつたが、さすがに森の中に人の気配はなかった。

だが、下のほうでは感じなかった妖しげな気配がそこかしこに漂っている。どうやら間違いなさそうだ。

フブキは腰に吊るされたDAのうち二枚を外すと、スナップを使って真横に投げる。

鈴の音とともにタカとヒヨウに変わり 「シヨク、アカネ頼んだよ」

それはまるで、相棒に語りかけるようなフブキだった。

く\*く\*く\*く\*

「だから、なんでついて来るわけ？」

「だってえ、あんたが行くトコだから初心者用だと思ってたのよ」

さすがに一番上には初心者用のコースはなかった。でも、林の左手側を回れば中級者用のコースだ。判つてはいたが……明日夢は林を抜け、右手側にある上級者用のコースを目指した。

しかし 視界が開けた瞬間、明日夢がこれまで見たこともない傾斜が、ドーンと一面に広がっているではないか……。

「あ、あんた、ココ……下まで滑って行ける？」

明日夢の母・郁子は、年上の女性に入れあげてる息子が気になったのと、生来せいらいの脳天気さが相まって上まで来てしまったのだ。だが、

間違つてもスキーの腕前は上級どころか中級ですらない。

「ちよ、ちよつと無理そう……だよな」

当の明日夢は完璧に若葉マークだ。どこをどう滑ればいいのかも判らず立ち尽くす。

明日夢は必死で周りを見回すが、フブキの白銀のウェアはその辺にはなく……。ため息をつきながら二人は引き返した。その後は、林の中を木にしがみ付きつつ、そろそろと下りて行くのであった。

「いきなり谷間とかなんないわよね？」

「そ、そんなに激しい地形じゃなかったら？ 怖いこと言うなよ」

林の中は昏間でも薄暗く、木々の間を吹く風はゲレンデより寒く感じる。でもリフトで戻るより、フブキに出会える可能性が高いと明日夢は考えていた。

「雪女とが出ないわよね？」

「まだ言ってるの？ 藤倉さんはちゃんと居たら？」

明日夢はそう言い返しながら、手袋越しにポケットの中にコンパスが入っていることを確認する。これを返すため……ちゃんと理由があるんだ、と自分に言い訳をしつつ……。

「ねえ、明日夢……」

「今度は何！？」

うるさいな、という言葉を読み込みつつ、明日夢は母の指差す方を見る。そこには、朽ち果てた山小屋がポツンと立っていたのだ。た。

「あー疲れた。ねえ明日夢、あの中で一休みして行こっか？」

その瞬間、明日夢の脳裏に例の鈴の音が鳴り響いた。

それもあの時の澄んだ音色ではなく、シャンシャンやかま喧しいほどの

……。明日夢にはそれが、警告音に思えてならない。

「や、やめとこつよ。早く行こつ。ほら、母さん。早くっ！」

急ぎ立てる明日夢を、母は不思議そうな顔で見ている。なぜ耳障

りなほど鈴の音が響くのか、なぜこの山小屋が不吉に思えてならぬのか、なぜ……明日夢の頭の中を不協和音がグルグル回り始めた。その時　振り返った明日夢の眼前に、妖気を漂わせた女が立ちはだかる。

「なっ……」

いつの間に、こんな近くに人が来たのか……。だが、それが人ではないことを明日夢は直に悟った。なぜなら、女の右手が昆虫の足のように鋭く長く伸び始めたからだ。

【ようこそお越し下さいました】

女の顔から男の声が聞こえる。明日夢は自分の耳がおかしくなったのかと思った。

「あ、あ、あす、あす……」

明日夢の背中にしがみ付く母も言葉になっていない。

サクツと雪を踏み締め、化け物の女　姫は、明日夢らに近づいた。二人は慌てて下がるが、スキー板が引つ掛かり危うく転びそうになる。

この雪深い中で、姫の足はほんの数センチしか雪に沈んでおらず

サクツ。鋭い指先を明日夢らに向け、姫はまた一歩近づいた。

スキー板が木にぶつからないように、と明日夢らはいついつい開けた方へ逃げてしまい……その先には例の山小屋が。

小屋の扉が強引に“内側から”押し開けられた。激しい音が背後に聞こえ、震える母の肩越しに明日夢は山小屋の中に目を凝らす。そこには、赤い二つの警告灯が点っていた。だが、赤い光は微妙に上下している。おまけに、荒い息遣いまで聞こえる気がした。さらには、開いた扉の奥から、雪山に相応しくない腐臭が明日夢の鼻孔を刺激して……。



【さあ、召し上がれ】

姫の口から発せられた言葉は……その意味を理解するほどに恐ろしい。

直後、小屋の中から白く太い糸が放たれる。それは一瞬で明日夢の母、郁子を襲った。

「きゃあ！」

瞬時に体に巻き付き、小屋の中に引きずり込もうとする。明日夢は必死で母を体を押さえた。だが、そんな明日夢の頭上に姫は鋭い指先を突き立てようとしたのだ。

「うわっ！」

フツと上空に影がよぎった。

(え？ スノーボード？)

明日夢が思った瞬間、視界に銀色のウェアが飛び込んだ。

「藤倉さんっ！」

ボードごとフブキが姫に体当たりしたのだった。

なんとフブキはこの林の中、木々の隙間を拭い全速力で滑り下りて来たのである。まさか、コース中央の林に居たとは思わなかった。森を奥に進むにつれ気配が薄れて行くことに気付き、慌ててDAを逆に放ち魔化魍の気配を追わせたのだった。

「ちよつと少年、大丈夫っ？」

フブキはボードを外しながら雪の中明日夢を振り返る。その間にも、DAアカネタカとハシヨクヒヨウが協力し合って明日夢の母に巻きついた糸を切り裂こうと奮闘していた。しかし、その背後から放たれた糸にDAアカネが一瞬で巻き取られ

粉碎！

「アカネッ！」

DAから発せられた甲高い鳴き声が悲鳴に聞こえ、フブキも逼迫した声を上げる。

直後、小屋は宙に浮いた。その下からは蠢く八本の白い足が見え……小屋がバラバラに壊れた瞬間、ついに巨大な魔化魍『ユキグモ』が正体を現したのだった。

こうなればもう、フブキに迷っている時間はない。

フブキは背負ったリュックを投げ捨てると、右手首の鈴を露にした。明日夢はジッとフブキを見ている。その視線を正面から受けて、フブキは鈴を鳴らした。

明日夢にはこれから起こることが判るような気がしていた。

彼の目の前にいるのは、巨大な白い蜘蛛だった。ほんの手の平大の蜘蛛でも、平気な人間は少ないだろう。それが一戸建てくらいの大きさがあるのだ……明日夢は腰が抜け、悲鳴すら出て来ない。浅く息をするのがやっとである。

付け加えるなら、蜘蛛の横には昨夜の化け物が立っていた。回転の鈍った明日夢の頭でも、得体の知れぬ女と化け物　妖姫がイコールで結びつく。

そしてフブキである。彼女が右手首を大きく振った瞬間、巨大蜘蛛から立ち込める汚臭を一掃するような、涼やかな音色が林の中に響き渡った。

「ふ、じくら、さん？」

チリーン

フブキは無言で仁王立ちとなる。右手首につけたブレスレットを額に翳し……すると不思議な印のようなものが額に浮き上がった。そのフブキの姿は、明日夢には“第三の目が開いた”ようにも見え

た。

だが、突如巻き起こる猛吹雪に目を伏せる。

明日夢が再び顔を上げた時、目にしたものは……銀色に光り輝く一角の鬼であった。

## 二之巻「咆える蜘蛛」(四)

妖姫は昨晚の報復とばかり、青銅色の槍を手に変身直後の吹雪鬼に襲い掛かった。

吹雪鬼は咄嗟に右の回し蹴りで槍を蹴り飛ばす。しかし、手薄になつた背後から、魔化魍『ユキグモ』は白い糸の塊かたまりを吐きつけた。この糸は一瞬で体に巻き付き自由を奪う、ヤツらが捕食に使う手口であつた。

だが、雪山と対『ユキグモ』戦には慣れている吹雪鬼に、そんな手は通用しない。

「出でよ！ 氷壁！」

腰に下げた弓型の武器 正式名称を“音撃弦・氷輪”おんげきげん ひょうりんという。指先でクルツと一回転させ、掛け声と共に魔化魍に向ける。その瞬間、雪の結晶のような壁が現れ、糸の塊を弾き飛ばした。再び器用に回転させつつ、

「出でよつ！ 氷刃！」

“氷輪”は防御モードから剣撃モードに姿を変え、今度は吹雪鬼から妖姫に攻め込んだ。

雪が積もつた木々の間を、吹雪鬼は飛ぶように間合いを詰める。そして魔化魍の後ろに逃げ込もうとする妖姫の背中を氷輪で一閃吹雪鬼は喊声かんせいを上げ、気合を入れる。そのまま一気に妖姫に突進し、刃やいばを突き立てた！ 刹那 吹雪鬼の冷気に妖姫は粉碎。

しかし、その吹雪鬼の背後に巨大な魔化魍の白い影が……。

『ユキグモ』は、よほど腹が空いてるのか八本 四対の足を器用に折り曲げ、吹雪鬼に齧り付こうとする。吹雪鬼はさらに低い姿

勢になり雪の上を転がった。一転……二転……魔化魍の横を掠めるように移動する。吹雪鬼の手には、刃を出したままの氷輪があった。

基本、吹雪鬼は“弦<sup>げん</sup>の鬼”だ。

弦の鬼とは、武器に相当するものを持つてる魔化魍と戦うのが専門である。更に、姫や童子とも一番戦いやすいフォームなので各鬼のフォーローも多い。

だがあくまで、基本、である。

右手に清めの鈴と呼ばれる金剛を持つ吹雪鬼は、その通り名<sup>とおりな</sup>を“鈴<sup>すず</sup>の鬼”と言った。

数百年の歴史を持つ猛士に伝わる逸話に、“鈴の鬼”は最強と謳われている。

不意に、魔化魍『ユキグモ』の巨体が右に傾いた。そして、奇声を上げ糸を撒き散らし始める。なんと、雪上を転がって吹雪鬼は逃げていたわけではなく、片方の脚を四本とも、見事に切断して回ったのだ。

ほぼ成体まで育った魔化魍は、まずは動きを封じることが鉄則だ。後は糸を喰らわない、魔化魍の背中に吹雪鬼は飛び乗った。胴体の出来るだけ薄い部分に氷輪の刃を突き刺す。そして、止め<sup>とど</sup>めは音撃だ。

魔化魍は直接攻撃では破壊できない。かつて米国陸軍が使用したロング・トムと呼ばれるカノン砲でも倒せなかったというデータがある。核攻撃の効果は不明だが……シロアリを駆除するために家を破壊したのでは洒落にならないだろう。

吹雪鬼はウエストのバックルに装備された“音撃震<sup>おんげきしん</sup>・銃弓<sup>つくゆみ</sup>”を外した。そして、氷輪の弓柄部分<sup>ゆつか</sup>にセットする。その瞬間、弓弦<sup>ゆみつる</sup>に眩しいばかりの光が走った。それは音撃モードにセット完了の合図で

あつた。

吹雪鬼は、危険を察知し必死で逃げようとする魔化魍の背で、静かに目を閉じた。意識を氷輪に集中させる。

「おんげきざん音撃斬！ はじやめいげん破邪鳴弦！」

威声いせいを放ち、わずか一度、弦打つひうちちの要領で弦を爪弾く。

その瞬間、林の中に「ユキグモ」の咆哮が響き渡った。それを包み込むように、冷気を纏った清めの音が木々の隙間を埋め尽くす。

突き刺さった氷の刃を通じ、魔化魍の体内に流れ込む音撃 薄氷の割れる音が内側から聞こえ「ユキグモ」の動きは止まる。

半瞬後、吹雪鬼はわずか一撃で、「ユキグモ」の巨体を木っ端微塵に吹き飛ばしたのだった。

深呼吸を一回。二回目に息を止め、顔部分だけ変身を解除する。吹雪鬼はフブキに戻り、ただ静かに明日夢を見つめた。そして、真冬の柔らかい陽射しのように、微笑んだのだった。

く\*く\*く\*く\*

「母さんは……大丈夫でしょうか？」

「ん。糸が巻きついたくらいじゃ後遺症はないから、心配はいらないよ」

フブキの変身を見て、さすがに許容量を超えたのか明日夢の母・郁子は気を失ってしまった。結局、母をフブキが背負い、明日夢は後を追いかけるようにしてロッジに戻って来たのだった。

「あの……」

明日夢がフブキに聞きたいことはたくさんあった。でも、何から言葉にしたらいいのか判らない。

「あの……あの」

無駄に時間が過ぎるばかりで、明日夢は自分が情けなくなる。

「う……ううん」

「か、母さんっ!」

母の意識が戻りそうになり、明日夢は母の傍に駆け寄った。

「あ……あす、む? ここは……」

「もう大丈夫だよ。藤倉さんが助けてくれたんだ。だから」

その言葉を聞いた瞬間だった。

母はカッと目を開き、体を起こすと明日夢を抱き締めた。フブキから庇おうとする態度に、明日夢は訳が判らない。

「あの……母さん?」

「あ、あなた、妖怪だったのねっ! この化け物っ! うちの子に近づいたら、わ……わたしが容赦しませんからねっ!」

明日夢は母の言葉に面食らった。確かに、目の前でフブキが鬼に変身した時は、明日夢自身も腰が抜けるかと思った。でも、仮にも命の恩人に向かって「化け物」呼ばわりはないだろう。フブキが怒って出て行くと思い、明日夢は慌てて母を諫める。

「母さん! なんてこと言うんだよ! 藤倉さんは僕らを助けくれたんだよ。それを」

「あんたは騙されてるのよ。この女だってあいつらの仲間が決まってる! 鬼が人間に化けてるんだから、何か悪さしようと思ってるのよっ!」

「母さんっ!」

しばらく離れた位置で静観していたフブキだったが……。明日夢がハッと気付くと、真横まで来ていた。そして、視線が絡んだ瞬間、ふわっと花が綻ON FLOWERぶようにフブキは微笑んだ。

「あ、あのっ」

そんな明日夢の言葉を遮るように、フブキは左の掌てのひらを目の前に突きつけた。まるで目隠しをされたみたいだ。フブキの姿が明日夢の視界から消える。

チリーン

その瞬間、鈴の音が鳴った。

明日夢は隣にいた母の体が前後に揺れ、そのままベッドにパタリと倒れるのを横目で見つつ……。

「待って……待ってください……聞きたいことが……ぼくは」

鈴の音はどんどん遠く小さくなる。それと同じように、フブキの姿も闇の中小さくなって消えてしまいそうだ。

（ぼくは……ぼくは……）

「もし、私を覚えていられたら……きっとまた会える」

それは明日夢の意識が真っ暗になる寸前、耳に微かに残ったフブキの声であった。

〜三之巻「落ちる海」につづく〜



## 二之巻「咆える蜘蛛」(四)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

妖怪や魔物を払うと言われる弦打ちなら音撃でもアリかな?と思い、吹雪鬼の武器に設定しました。

後「鬼火」はやめました……火の属性じゃないし、氷霧を吐き付けて敵を凍らしたりしたら、それこそ雪女?(苦笑)

「鬼爪」の設定はありますので、この先出て来ます。ということ、少しでも楽しんでいただけましたでしょうか?

次回、三之巻:イブキくん(変身はしません)初登場です!しばらくお時間を頂きますが、何卒、よろしくお願い致しますm)

——) m

### 三之巻「落ちる海」(一)

二月……雪山で吹雪鬼の戦いに遭遇して一ヶ月以上が過ぎた。

「あ、あのさ……あの万座温泉でのことなんだけど」

「ごくたまに、明日夢は母・郁子にあの時のことを尋ねてみる。

「え？ ああ、あの時ね。やあねえ、もう……あなたしつこいわよ」

「藤倉さんのことなんだけど、さ……覚えてる？」

「当ったり前じゃない！ あの時はびっくりしたわよね」

明日夢の茶碗に朝ご飯を装よそいながら、母は軽いノリで返事をする。味噌汁に目玉焼き、海苔に納豆……いつも通りのメニューがテーブルに並ぶ。

でも、タクシー運転手の母が夜中も勤務する時は……朝はコンビ二おにぎりが明日夢の定番であった。

「そうだよな。びっくりしたよね。えっと……何があったか、覚えてるんだよな？」

「だからさ、あなたしつこいって！ 母さんはまだボケる歳じゃありません！」

「判ってるよ。ただ、確認っていうか」

「あんたが藤倉さんを追っかけて上級者コースに行っちゃって……林の中で遭難したんじゃない。良かったわよねえ。レスキューが専門の藤倉さんがいらして。あたしたちを助けてくれたんですもの！  
ね？」

(やっぱりコレだ……)

明日夢はこっそりため息をついた。そこを目敏めくく母が見つけ、

「何？」

「ううん。なんでも……」

「あんたさ、何で、もつとちゃんと住所とか聞いておかなかったの？ そしたらお礼に行けたのに……。あ！ でも同じ柴又だもん。そのうちどっかでバツタリ会えるかも！ ね！」

「う、うん。そうだね」

朝っぱらから乾いた笑顔を浮かべる息子に、さつさと食べなさい、と叱咤しながら “化け物” 呼ばわりしたフブキを、褒めまくる郁子であった。

あれから明日夢は意味もなく柴又界隈かいわいをぶらつくことが多くなった。だが、バツタリ、どころか影も見つからない。

『もし、私を覚えていられたら……。きつとまた会える』

フブキは確かにそう言った。

「……覚えてるのに全然逢えないじゃん」

雪山で拾ったコンパスを見つめ、ポツリと呟く明日夢であった。

く\*く\*く\*く\*

甘味処「たちばな」の看板がある。

ショートカットの小柄な女性が暖簾を出して、店先に水を撒いていた。その衣装は、時代劇の茶屋娘を思わせる柳茶色やなぎあざいろの和装だ。もちろん動きやすいように袖にはゴムが入り、下は山袴やまはかま……。いわゆるモンペスタイルである。

「日菜佳！ そろそろ会議が終わりそうだった。地下に下りて、シフトチェンジの報告をお願い」

店のドアがガラツと開き、顔を出したのが香須実であった。同じ

和装……甘味処の制服を着ている。シヨートの日菜佳にくらべ、香須実は肩より長めの黒髪を無造作に束ねていた。それがオシャレに見えるのだから……美人は得というものだろう。

「はい。では、姉上、後よろしく！」

朱色の前掛けで手を拭くと、敬礼よろしくピツと額の前に右手を上げ、飛ぶように店内に駆け込む日菜佳であった。

猛士の秘密基地……というほど大袈裟なものではないが、甘味処「たちばな」の地下には、その店構えからは想像出来ないほどのスペースが隠されていた。一応ここが、関東支部の本拠地だ。作戦会議から本部の連絡事項の伝達、音撃武器・DA等の修理や受け渡し、出勤報告書の提出まで行っている。

ただ、車両部だけは別の場所にあった。出勤命令を受けてから、必要に応じて車かバイクを取りに行かなければならない。面倒と言えば面倒だが……二輪か四輪、或いは両方が鬼ごとに支給されているから、都心にスペースは取り辛いのであろう。

この甘味処「たちばな」は、ごく普通に営業している。

支部長の立花勢地朗と二人の娘が店に出ることが多いが、手が空いた時は当然フブキも店番を勤める。そのせいかな常連客たちは、甘味処「たちばな」は三姉妹だと思いついていた。誰も否定しないのだから尚更かも知れない。

関東支部には十人の鬼が所属していた。

年齢順に……  
裁鬼・鬪鬼・斬鬼・剛鬼・勝鬼・弾鬼・鋭鬼・吹雪鬼・蛮鬼・威吹鬼……となる。キャリアとなるとまた順番が変わってくるのだが……。十人を音撃武器のタイプ別に三つの班に分け、三丁四人で出勤・待機・インターバルを繰り返している。

ちなみにフブキが入るのは“弦の鬼”の班。

超ベテランのサバキとザンキ、そして二年目のバンキを加え、四人が同じグループだ。奇しくも、ザンキはフブキの、サバキはバンキの師匠であった。

結果……この班は、若手二人が師匠たちに気を遣い、やたら頑張らざるを得ないという構図が出来上がっている。

「と、いうことだ。済まなかったね、待機中の君たちを呼び出して」

吉野本部からの通達事項を話し終え、支部長の勢地郎が上座から腰を上げた。テーブルを囲む五人の鬼たちをグルッと見渡して「ご苦労様でした」と付け加える。インターバルと出勤中の鬼を除き、フブキのほかにサバキ・シヨウキ・ダンキ・イブキが顔を揃えていた。

「さっき話した通り、魔化魍の出現数が全国的に増えている。キットとは思うが、なんとかここを乗り切つて欲しい。よろしく頼む」  
「まあね、立花のおやつさんに言われたら、やらなきゃならんのだろぅが……。わたしのような年寄りには、いささか辛いところだな」  
支部長に次ぐ上座に座るのがサバキだ。彼は鬼の中で最年長のベテランで、既に二人の弟子を一人前にしていた。今は三人目の弟子を抱えている。

「インターバルが三週間からいきなり一週間なんてさ……吉野も無茶言うよな」

フブキの隣からため息と悪態が聞こえた。ジャンパーのポケットに手をつっ込み、片膝を椅子に立てている。

この、いささか口も態度も悪いのがダンキだ。だが、愚痴は多いが腕は良い。フブキとは同じ時期に弟子時代を過ごしたため、気心

は知れている。

「まあまあダンキさん。どうせやらなきゃならないんですから、黙ってやりましょうよ」

五人の中では一番大柄だが優しい声で話すのがシヨウキであった。フブキの前に座り笑顔を絶やさない。今回の吉野の横暴にも、ニコニコと了解している。

「そうやって呑気に笑ってるから吉野のいいようにされて……」

ダンキは同じ歳のシヨウキに向かって言い返そうとしたが……そこをサバキが遮った。

「そういうこつたな。泣いても笑ってもやらなきゃならんのなら、シヨウキのように笑って引き受けるのが男の、いや鬼の度量というもんだぞ。だからお前は女にモテンのだ、なあダンキ」

「そ、それとこれとは……その……はあ、すみません」

鬼社会は年功序列だ。さすがのダンキも大先輩には逆らえず……。フブキは反対隣のイブキとこっそり目を合らし、笑いを堪えるのであった。

三之巻「落ちる海」(一)(二)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

三之巻は全う話となります。

### 三之巻「落ちる海」(二)

海沿いの岩場に腰を下ろし、釣りをする男がひとり……。どうやらアタリが良くないのか、表情も冴えない。ポイントを変えようと、男が腰を上げ、立ち去ろうとしたその時だった。

海中から岩場を這い上がり、釣り人の足を掴む人影が。童子だ。釣り人はあり得ない場所に人らしきものを見て、仰天して声も出ない。

【ちょっと、痛いぞ】

直後、釣り人は掴まれた足に溶けるような熱さを感じ、悲鳴を上げた。なんとか童子を振り解き逃げようとするが……。振り返った瞬間、女の 姫の熱い抱擁を受けることになる。

【ちょっと、熱いぞ】

「ギヤアーーツ！」

それは断末魔の悲鳴であった。

釣り人の体は塩酸を掛けられたように溶け始め……。あつという間に屍骸となる。そして、童子の手により、魔化魍の餌となるべく海に投げ込まれた。

瞬時に海面は泡立ち、大きなハサミが屍骸を海中に引きずり込む。

満足気に微笑む童子と姫……。そして、彼らは新たな餌を求める。

くくくくくくくくくく



「フブキさん的にはどうですか？ 休みが減るのは……やはり、キツイですよね？」

丁寧な言葉でフブキに声を掛けるのは、関東支部最年少の鬼、イブキだ。

貴公子然とした面持ちの彼は、それもそのはず、鬼の中ではサラブレットと呼ばれていた。吉野の宗家と言われる和泉家の次男で、猛士総本部長の息子だ。本名を和泉伊織いずみいおりと言い、次期総本部長と目されている。

イブキの父は元鬼で、現役の頃は息子と同じ『威吹鬼』と名乗っていた。いや、正確には息子のほうが先代の後を継ぎ、威吹鬼の鬼名を貰ったのである。ちなみに先代威吹鬼の専属サポーターを務めていたのが、関東支部長の勢地郎であった。

和泉家には長男がいる。イブキの兄だ。当然のように彼も鬼に変身したが……諸事情により今は家を出ている。現在では、誰もがイブキを後継者として認めていたのだった。

「うーん、自由が利かなくなるってくらいかな？ 元々呼び出しが多いしね」

フブキの視線の先には、パソコンに向かってシフト変更のデータを打ち込む日菜佳がいた。

「す、すみませんっ！ 『魔化魍に迷った時はフブキさん！』という吉野の標語があるもんで」

「……」

「あるんですか？」

真面目に突っ込むイブキに、

「あるわけないでしょ！」

と、香須実はいささかオカシムリだ。姉の登場に妹はノートパソコンを抱え、大急ぎで地下を脱出するのであった。

香須実が下りて来た途端、ご機嫌になるのがイブキである。

「あ、香須実さん！ 僕これから予定が空いてるんですが……よかつたら一緒に」

「私の予定は空いてません！」

取り付く島もない、とはこのことだ。今日は、いつにも増してつげんどんな言い方である。しかし、イブキに凹んだ様子はまるでない。

「じゃあ今度の休みにぜひ！ 香須実さんの休みはいつですか？」

「休みはありません！ 以上」

鬼たちに出された湯のみをお盆に乗せ、香須実はさっさと地下から出て行くのだった。

「……前途多難だね」

「いえいえ、昔っからああいうトコが素敵なんですよ」

素気無く袖にされたのに、イブキは香須実の後姿をウツトリと見送る。

フブキは、二人は幼馴染と聞いていた。イブキのほうが三歳年下なはずだ。吉野本部に詰めるはずだったイブキが、無理を押しして関東支部に移ってきたのも香須実のためと言うが……。

それを良く思わない人物が香須実と入れ替わるように入って来た。

「何を見てるんだい。イ・ビ・キくん」

「……イブキです」

娘に邪な視線よこしまなまなこを投げかける男は魔化魍まわろうよりタチが悪い、とばかり勢地郎は睨みつけている。

「香須実をデートに誘わせるために、君に残ってくれと言ったわけじゃないんだがね」

「いやだなあ支部長。判ってますよ」

「いやいや、君は随分余裕があるようだ。若いしねえ……インター

バルは無くてもいいか」

「そ、そんなあ……」

「まあまあ、おやつさん、話を進めましょうよ」

間に入ったフブキに宥められ、勢地郎は咳払いを一つした。

「本部の調査報告書だ。フブキくん、この少年で間違いないね」

フブキの眼前に突き出された書類には、『安達明日夢』の名前と制服姿の写真が添付されていた。

「はい。間違いないです」

「そう、か。これによると……どうやら丸つきり無関係の血筋みただ。それに十五歳と若い……さあて、どうするかな」

勢地郎は顎を擦りながら、報告書の隅から隅まで目を通す。そこにイブキが口を挟んだ。

「どうもこうも、鬼のなり手はどんどん減ってるんです。猛士の中からこれ以上の上積みは見込めませんし……。一般人から鬼の適性を持つ人間が見つかるのはごく稀まれです。是非とも口説き落として、誰かの弟子になって貰うしかないと思います」

イブキが興奮するのも無理からぬ事情があった。

鬼の適性……それは、変身具の出す音が聞こえるかどうかで判る、ごく簡単なものだ。

変身具は鬼たちが鍛えた体を変化させるのに重要な役目を果たしていた。内に眠る潜在能力を、特別な周波数によって引き出し、変身するために誘導する。古来、鬼はそれぞれが見つけ出した様々な音によって変身した。自在に操れるようになるのは大変な苦労だったという。それを、わずかだが楽しめたのが猛士が開発した変身具であった。

同じものでも鬼によって変身し易いように細かなチューニングがされている。ただ、フブキの持つ『金剛』だけは例外であったが……適性を知る点においては、他のものと差異はなかった。

「まあまあ、そう焦ってもね。フブキくんはどうだい？ 直接彼と会って……鬼に向きそうかい？」

勢地郎の問いに、フブキは慎重に言葉を選ぶ。

「興味はありそうでした。向き不向きは……まだちよつと。十五歳という年齢は、確かにベストかも知れませんが……こればかりは」

猛士の中で産まれた子供は、誕生の直後に変身具の音を聞かされる。

それが聞こえた赤ん坊は、瞬間的に産声がピタリと止むのだという。たまたに誤りもあるが……鬼の適性有り、と判断された子供にはその印しるしがつけられるのだ。それは、姓名の頭文字が同じになるような韻を踏んだ名前を与えるのが仕来りしきたりであった。イブキ然り……フブキもまた、産まれた時には既に父が猛士の関係者であったため、同じ判断をされたという。

だが、当然のように一般の中にも鬼の適性を持つ者は産まれる。

そういった場合、今回の明日夢のように、偶然でしか知りえないものであった。それに、せっかく見つかつても年齢は大きなネックだ。家族や仕事を持つ人間が、いきなり人助けヒトコロを目指すわけがない。それに体力的にも無理が出てくる。

鬼を目指すギリギリが二十代で、十代というのが最適な年齢であった。尚、これは若ければ良いというものでもなく……。児童・幼児では自らの意思が示せず、親を無視出来なくなるためであった。

「まずは、再確認だな。その上で、少しずつ我々の仕事を見てもらって……最終的な判断はその少年に任せるしかないが……。『安達明日夢』ちゃんと鬼の名前を持つてるのも、不思議なもんだねえ」  
「そうですね。鬼の力を名前によって体内に封印する 猛士が行う秘法を、自然と与えられているのだから。彼が鬼になるのは運命

ですよ」

そんなイブキの言葉に、フブキも肯かざるを得ない。

鬼も魔化魍も関係ない場所に生まれながら、鬼の適性を持つ彼らは一様に名前が韻を踏んでいた。偶然とはいえ、不思議な現象だ。

「じゃあ、今から二人で会いに行つてくれるかな？ イブキくんは暇なようだし」

ニツコリ笑いつつ、勢地郎はまだ嫌味を言っている。

「わたしもですか？ 確認ならイブキくんだけでもオツケーでしょ？」

「フブキさんまで……僕を邪険にするんですか？」

「いや、そういうわけじゃ」

そう、イブキに問題があるわけではない。あの少年と会うのが……なぜかフブキには躊躇われた。しかし……。

「判りました。じゃすぐに」

行きましようか、というフブキの返事を遮るように　ダダダダ　ダツ！　と、日菜佳が階段を駆け下りて来た。手には携帯電話を掴んでいる。

「　　ザンキさんが魔化魍にやられたそうです！！」

三之巻「落ちる海」(二)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

鬼になれる資格というか……鬼の適性というものを設定いたしました。

それから、姓名の頭文字を同じにすることにも理由を付けました。フブキのオリジナル設定『鈴の鬼』というのも、いずれ明らかになりますので、しばらくお待ちください(笑)

(三)は明日中には投稿できそうです。

ぜひまたお越し下さいませm( )m

### 三之巻「落ちる海」(三)

「だからね、安達の場合は城南一本な訳でしょ。これを外しちゃうとマズイんだから……ちょっと気を抜くと落ちちゃうんだからね」

「……………」

猛士で明日夢の話題が上がった同じ頃、彼は担任の女教師と個人面談の真っ最中だった。

明日夢は中学三年間プラスバンド部に所属していた。そのままなるとなく、高校でも続けたいな、という気持ちでいたが……。いざ受験校を決める時、明日夢は願書提出のギリギリまで悩んだ。その結果、ブラバンを続けるのに最適な高校より、大学進学に有利な高校を選んだのである。

と、いうより、自分では決められず、教師や母親の意見に流されたというべきかも知れない。

拳げ句、滑り止めの私立を決める時間もなく……ふと気付けば、なぜか彼は“城南高校一本”という、カツコはイイが落ちたら間抜け、という事態に突入していたのだった。

それでも、元々成績が悪いわけではない。彼なりに受験勉強もしてきたつもりだった。内心、一緒に受ける友達より自分のほうが成績は上だ、と高を括っていたのだ。それが……、

「持田とか、他の城南組も頑張ってるわけよ。ここで安達が負けるわけにいかないでしょ？」

「……………」

思わぬ厳しい言葉に、肩を落とす明日夢であった。

「ねえ安達くん！ 面談どうだった？」

明日夢の落ち込みをよそに、にこやかに話しかけてくるのが、クラスメートの持田ひとみである。屈託のない笑顔で残酷な質問をさ

れ、今の明日夢にはひとみを真つ直ぐ見ることも出来ない。

「う、うん、まあ」

同じ城南高校を受けるひとみは「受かったら、演劇やめてチアに入ろうかなって悩んでるの」などと、合格後の心配をしている。そんなひとみに、明日夢の不安はさらに増すのだった。

そんな時、思い出すのがフブキの、いや、吹雪鬼の姿だった。

助けてもらったのに、ロクにお礼も言っていない。それに聞きたいことはたくさんある。もう一度会いたいのに会えない。フブキに会えない限り、受験勉強も進まない。

手に負えないことが起きるたびに、逃げ道を探してしまう。やる前に、言い訳を用意する……それは明日夢の悪いクセなのであった。

くくくくくくくくく

『じゃ、手術は上手く行ったわけね。ん、命に別状なくて良かった。こっちは大丈夫だから、DAは適当に使って回収もしておくから戻なくていいよ。ちょっと戸田山<sup>ただやま</sup>、あんたが泣いててどうすんの？ ザンキさんのことは頼むよ。大丈夫、大丈夫だから、いいね』

ピツと携帯の電源を切り、フブキはため息をついた。

「戸田山さん、なんて？」

魔化魍探索のために放つDAを用意しながら、香須実はフブキに声を掛ける。

「目の前で師匠がやられたのがショックだったらしい。命に別状ないっていうのに……」

「病院にフブキが駆けつけて来てくれると思ってたんじゃない？」



ホントはさ、フブキも行きたくったんじやないの？ 意地を張らずにイブキくんにに任せれば良かったのに」  
「……………」

フブキの師匠、ザンキが負傷したと緊急連絡が入った時、イブキが出勤すると言ったのだ。

だが、魔化魍の正体は「バケガニ」……………童子はザンキが倒したが、ががまだ生き残っているという。それに、「バケガニ」は“弦の鬼”が専門だ。イブキは“管の鬼”で一度も戦ったことがないはずであった。

「専門のわたしがいるのに、カニ未経験のイブキを出勤させるわけにはいかないでしょ」

房総の海岸はかなり波が荒かった。魔化魍の気配も濃く、フブキは香須実が段取りしてくれた新型のDA・キハダガニ（黄肌蟹）（ディスクアニマル）と、いつものアカネタカを鈴の音で空と海に放つ。

「とかなんとかカツコつけちゃって。いつもよりテンション低めなのは、やっぱりザンキさんが心配だからなんでしょ？ あんたね、そんな状態で戦って、無事で済むと思ってるのっ!？」

専門でもないのに妙な気遣いを見せたイブキ同様、香須実もおかしな誤解をしているらしい。……………フブキはそれに気付き苦笑いを浮かべた。

「誤解だよ。確かにテンションは低いけど……………それは戸田山と同じ理由だと思う。師匠に尻拭いをして貰うことはあっても、師匠がやられて、代わりに出勤……………なんて日が来るとは思わなかったんだよねえ。わたしたち鬼にとって、師匠は絶対的なヒーローだから」  
「本当にそれだけ？」  
「それだけですってば」

フブキは笑って答えながら、今度は左袖を捲り上げた。

手首には弦の鬼が通常使用する“変身鬼弦・音伽”<sup>へんしんきげん おんか</sup>があった。大きめの腕時計といった形のそれは、師匠の持つ変身具と同じものだ。当初、これで変身すべく師匠より渡された。今となつては“鈴の鬼”のフブキには無くても困らないモノである。だが、これがあると他の鬼のDAも自在に操れるので、フブキは併用していた。

音伽の下方を引き下げ、小さな弦を出すと指先で弾く。

高めの音が海岸に広がり……しばらくするとあちこちから、ザンキのDA・セイジガエル（青磁蛙）が岩場を跳ねながら戻つて来たのであつた。

くくくくくくくく

岩場では姫がダイバーらしき男性を襲い、今まさに止め刺さんとしていた。

そこへ飛び込んだのがDAアカネタカの大群である。先日の雪山のように、単独で動く時は大量のDAを持参することは出来ない。だが、サポーターを同行するときには別だ。

十羽を超えるDAに襲い掛かれ、姫はダイバーから離れた。すぐさま妖姫に変身してDAを叩き落とし始める。

その際に、フブキはダイバーの元に駆け寄り生存を確かめた。この程度なら助かりそうだと、ホツとひと息だ。

そして鈴を鳴らした瞬間、DAたちは一気に散開。フブキは妖姫に向かつて走つた。もう一度、右手首を振り今度は額に翳す。真冬の海岸に、突如まき起こった猛吹雪を手刀で一閃し 吹雪鬼は姿を現せた。

雪と風の目晦ましを喰らい、妖姫は鬼の姿を見失う。直後、目の前に現れた吹雪鬼に戸惑い　なんと背を向けて逃げようとしたのだ。

(氷輪を出すまでもない、か)

吹雪鬼は心の中で呟くと、グツと右手の拳に力を入れた。意識をそこに集中させる。

刹那　拳の先から鋭い猛禽類の鉤爪かぎつめ状のモノが生えた。鬼爪おにつめである。それを、逃げる妖姫の脇腹に、ひと息に突き立てた。

「グエツ！」

緑色の血を噴き出しながら、妖姫は少しでも海に逃げ込もうとする。だが、吹雪鬼は足場の悪さをもともせず、軽く勢いをつけ足刀で蹴り込んだ。仰向けに倒れた妖姫の全身から、釣り人を溶かした泡が噴き出した。今度はその液体で、自らを溶かして行くのだった。

「後は……カニ、か」

そう呟いた瞬間、海中から巨大な魔化魍「バケガニ」が姿を見せる。

フブキの弟子・戸田山からの報告通り、ほぼ成体に近い大きさであった。だが「バケガニ」の武器である大きなハサミが片方しかない。一本はザンキによって斬り落とされたのだ。

「なかなか……食い出のありそうなカニさんですこと。お歳暮の時期なら良かったのにな」

そんな軽口を叩きながら「バケガニ」の攻撃を軽快に避けて間合いを計る。

この「バケガニ」にはもう一つの武器があった。童子たち以上に強力な酸性の泡を噴き出すのだが……それも、氷輪で氷壁を作れば問題は無い。後は、もう片方のハサミを氷刃で叩き斬る。止めは、懐に潜り込み、清めの音で音撃　あつという間に「バケガニ」は四散した。

フブキは、顔フェイスオフだけ変身解除でDAたちに軽くウインク。「バケガニ」を探す予定で放ったDAキハダガニは所在無げに水辺をうろろしている。一方、DAセイジガエルたちはフブキの命令で怪我をしたダイバーを保護していた。

戻って香須実に救急車を呼んで貰おう　怪我人を運んだら、すぐに撤退だ。そんなことを考えて、一步踏み出した時……。

【鬼さんこちら】

【鬼さんこちら】

(そんな、馬鹿な……)

振り返ったフブキの目に、なんと新たな「バケガニ」の童子と娘が映る。

慌てて金剛を翳し、再び吹雪鬼へと変身するが……。その直後、目の前に怪童子と妖姫が揃い立ち、間断なく攻め立てられた。さつきとはまるで立場が逆だ。吹雪鬼は防戦一方になり崖の縁に追い込まれ……その背後に二匹目のバケガニが！

吹雪鬼は慌てて氷輪を構える。しかし　巨大なハサミで薙ぎ払われ、吹雪鬼は容赦なく、極寒の海に叩き落とされたのだった。

くくくくくくくく

柴又の、ある公立中学の前に一台の大型バイクが止まった。イブキである。

彼はジャンパーの内ポケットから一枚の写真を取り出した。それは、さきほどの報告書に添付されていた明日夢の写真であった。

イブキはフブキの代わりにザンキを見舞い、その帰り……思い立ったようにバイクを走らせて来たのだ。

ちょうど下校時刻と重なり、正門付近は同じ制服を着た少年少女たちが溢れ返っていた。そして、ほんの数分でイブキは写真の少年を見つけ……安達明日夢は、制服姿の少女と並んで自転車を押しながら出て来たのである。

その姿を確認した瞬間、イブキは“へんしんおにびえ変身鬼笛・おんてき音笛”を取り出し、口にあてて……。

く四之巻「負けぬ魂」につづく

三之巻「落ちる海」(三)(後書き)

イブキくん、原作よりクールに描いています。

あきらも、登場時のツンデレ路線を突き進む予定です(苦笑)(…)

…出番はもう少し先ですが)

風師弟の関係は原作とは少し変えています。

後、お待たせしました? もっちー初登場です。(他の友達はおそろく出てきません)

次は、四之巻「負けぬ魂」…対バケガニ戦の決着です。明日夢はフブキと会えるのでしょうか? といった感じで…ここで「少年よ」が流れています

では、また来週。皆さまのお越しをお待ちしておりますm( )

m

## 四之巻「負けぬ魂」(一)

「オレ、合格しちゃった!」「へえ〜おめでと〜」

受験に集中できない、吹雪鬼のことは忘れよう　そう心に誓う  
明日夢であったが……。

そんな明日夢の背後から、彼の決心を挫くような、浮かれた声が  
聞こえてきた。

「推薦合格だつて。でも、スベリ止めとかは受かつて当然のトコ受  
けるもんね」

隣で自転車を押すひとみは、他人の合否なんて全然気にしてない  
様子だ。しかし、そんなひとみを見るだけで明日夢の不安は募る。

そうなると駄目なのだ。自然にあの鈴の音が、明日夢の体中に響  
き渡る。今にいたつては、本当に聞こえてくるような錯覚にさえ陥  
つて……。

(なんで聞こえるんだよ!　なんで忘れられないんだ!)

「あ、ねえ安達くん。あの人こっち見てるよ。なんか、カッコいい  
ね」

ひとみが示した先に一人の青年が立っていた。道路わきに停めて  
ある大型バイクに寄り掛かり、不思議な形の笛を吹いている。その  
透明な瞳はやけに印象的で、どこかフブキを思い出させた。

だが、その青年　イブキは明日夢をジッと見ている。気のせい  
だ、と思い通り過ぎようとした瞬間、笛の音は止んだ。

ハツとして顔を上げた明日夢に、にっこりと微笑むイブキ。

「笛の音は聞こえましたか?」

「あ、はい」

頷きながら明日夢は答える。そんなこと、聞くまでもないことだろう。

「あの……あなたは」

明日夢が口を開きかけた途端、イブキはバイクに跨り、風のようまたがに走り去った。

そしてその時、明日夢の隣にいたひとみが、信じられないことを尋ねたのだった。

「ねえ安達くん。笛って何？」

くくくくくくくく

間もなく日が沈む。

そのころ房総の海岸では、香須実がフブキの帰りを待ちわびていた。携帯を手に救援を頼むかどうか、テントの周りを逡巡する。

出撃して三時間以上が経過した。

遅くはならない、と言って出かけたフブキが、これほど戻らないことは滅多にない。しかも、「バケガニ」相手に手間取ったことなど一度もなかった。

もし、フブキの身に何かあったなら、すぐにも応援を頼まなければならぬ。だが……最強の鬼と言われる“鈴の鬼”がやられるなんて、香須実には考えられないことだった。

思い悩む香須実の足に、不意に何かが触れた。

カサカサ動くそれは、魔化魍探索のために放った新型DA・キハダガニである。

「あ、あんたたち……フブキは？ フブキは無事なの？」

キハダガニたちは何かを伝えたい様子だが、香須実にそれを知る手段はない。しかし、その中の一匹を手に取り、



「ちょっと！ 私に判るように言いなさいよっ！」  
カニの爪を掴んで揺さぶる香須実に、DAたちも大弱りだ。

「香須実 その子たちを苛めないでやってよ」  
「フブキっ！」

「わたしが悪いんだからさ……だから」

「馬鹿っ！ どこから戻って来てんのよ！ あんた……どれだけ心配したと」

魔化魍退治に向かったのとは逆に方向からフブキは帰ってきた。しかも、全身ずぶ濡れである。フェイスオフの状態で、右手にはしっかりと氷輪を握り締めていた。

「ゴメン、ほんと……すみません」

香須実はこぼれそうになる涙を拭い、謝るフブキに噛み付いた。

「あのね、今まで何匹のバケガニを倒して来たか覚えてる？ 軽く二桁いってるわよ。それで、コレ？ 大丈夫が聞いて呆れるわ！」  
「いや……まあ、そう言わず。一応、倒したんですけどね。師匠が残した姫も、片爪のバケガニさんも。そしたら……」

「何？」

「もう一組、バケガニセットに出て来られました……こんなこと初めてで。あつという間に海に叩き込まれちゃいました。いやあもう、沖まで流されちゃって戻ってくるのに何キロ泳いだことか」

軽く塩水に濡れた髪をかき上げながら、フブキは笑って言った。

「バカっ！ 二月の海で泳いで、何笑ってるの！？ 早くテントで着替えて。スープ温めるから、その間焚き火の側で……」

香須実は先にテントに入り着替えを用意する。バスタオルと毛布も車から引っ張り出し……しかし、フブキは変身を解こうとはしなかった。

「何やってるの？ 体が冷え切ってるでしょ。早く」

「ありがと……香須実。でも、もう一回行って来る」

「もう日が落ちたわ。あと十分もせずには真っ暗になる。魔化魍も巢に戻るタイプでしょ？ 一晩休んで、出撃は朝にするべきよ」  
それは、フブキを思っただけの提案だった。だが、今のフブキは静かに首を振る。

「襲われたダイバーがいる。あの時はまだ軽傷だった」

「何時間経ったと思ってるの？ 残念だけど、もう」

「かも知れない。でも、生きて、助けを待つ人がいるかも知れないのに……休むわけにはいかない」

反論しようとした香須実を制し、フブキは言葉を繋いだ。

「それに、セイジガエルたちに怪我人を守るように頼んだから。あの子たちはきつと、最後の一匹までわたしとの約束を守ろうとする。

彼らに応えなければならぬ。わたしは、鬼だから」

「スープ……温めておくから、冷めないうちに戻って来て。絶対に戻って来て」

「うん、判った。じゃ、行って来ます！」

普通の人間なら、低体温症で病院送りになるところであろう。血の気が失せた青紫の唇でフブキは笑い、最初と同じ方向に岩場を駆けて行くのだった。

## 四之巻「負けぬ魂」(一)(後書き)

お待たせ致しました。四之巻は全三話です。  
明日までにはサクサクとUP致しますので、ぜひご覧下さい。

## 四之巻「負けぬ魂」(二)

太陽が墮ちる直前、闇が世界を支配する寸前……  
夕闇に包まれるほんのわずかな時間を、逢う魔が時、という。

まさしく、その“魔”に　魔化魍に会うため、フブキは岩場へと戻ってきた。

鬼の気配に反応して、DAセイジガエルが岩の隙間から姿を見せた。後発の童子と姫は、ダイバーに気付かなかつたらしい。だいたい弱ってはいたが、なんとか助かりそうである。

「ありがとね」

フブキのウインク付きのお礼に、DAたちは嬉しそうに岩場を跳ね回った。

瞬間　DAたちは慌ててフブキの元に集合する。  
暗闇に浮き上がる「バケガニ」の童子と姫の姿が……。

房総の海岸に三度目の吹雪を巻き起こし、フェイスオフの状態から再び吹雪鬼へと変身。同時に敵も、怪童子・妖姫へと姿を変える。先に襲い掛かってきたのは妖姫であった。左手の大きなハサミを振り翳し、吹雪鬼の喉元を狙ってくる。いくら鬼とはいえ、体力は無限じゃない。日に三度も変身するだけでかなりの力を消耗している。しかも、寒中水泳……いや遠泳の後だ。

吹雪鬼は腰に下げたDAハシヨクヒヨウとアカネタ力を起動させた。この二匹だけは、吹雪鬼にとって特別だ。アカネは怪童子の横槍を阻み、シヨクは色を黒に変えて妖姫に飛び掛る。

勝負は一瞬、

「出でよつ！　氷刃！」

腰から抜き放つ氷輪を剣撃モードに変え、飛び込みざま、妖姫のハサミを肩口から切断した。返す刀を妖姫の胸に突き立て一気に凍らせる。容赦ない攻撃に、妖姫は一瞬で氷の破片となり吹き飛んだ。次は怪童子だ。

「シヨク！ アカネ！ 下がって！」

DAたちが引いた瞬間、吹雪鬼は怪童子に斬りかかった。

だが、怪童子のハサミが吹雪鬼の“氷刃”挟み込む。外そうとするが、力比べになると分が悪い。吹雪鬼は左の拳を繰り出すが、怪童子は右手で受け止める。直後、その手の平から例の泡が吹き出した。

しかし、苦しみ始めたのは吹雪鬼ではなく怪童子のほうであった。吹雪鬼の拳からは鬼爪が飛び出し、怪童子の手の平に食い込んだ。酸性の物質を含んだ泡は音を立てて凍りつく。慌てて怪童子は吹雪鬼から飛び退いた。

ふらつく足で海を目指す怪童子。その背中に止めの蹴りを放とうとした瞬間、房総二匹目の「バケガニ」が姿を現した。

氷輪を構え直し戦闘態勢に入る吹雪鬼。一匹目より若干大きめの「バケガニ」はどうやら今日明日中にも成体となりそうだ。そうなれば童子らの手を離れ、漁船はおろかフェリーすら襲いかねない。魔化魍を成体になるまで放置し、大量の犠牲者を出すことだけは避けなければならない。

それは……さすがにノルマはないが……鬼としての使命であった。吹雪鬼の気配を察し、怪童子は我が子「バケガニ」に何ごとか語りかける。すると、おとなしく海中に戻るではないか。

「逃がすかつ！」

せめて巢まで追いかけて……そんなことを考えた時、怪童子は捨て身で吹雪鬼に飛び掛かる。

「チッ！」

小さく舌打ちして怪童子のハサミを切り落す。そのまま、吹雪鬼

が左の足刀で横蹴りを入れた瞬間、怪童子は自身の泡に溶けていくのであった。

くくくくくくくく

『城南合格!』

受験生の部屋であれば、必ずあるような張り紙が明日夢の部屋にもあった。

その夜、明日夢は学校帰りに会った青年・イブキのことを考えていた。ひとみにはあの笛の音が聞こえなかったという。だが、幻聴じゃない と思う。

去年のクリスマス直前、雪山でフブキと出逢ってから、そして、彼女が異形の鬼に姿を変えて化け物と戦う場面に遭遇してから、明日夢の中で何かが変わった。

心の中にカギの掛かった扉があり、あの鈴の音色がそのカギを開けたような気がするのだ。そう、カギはすでに開いている。後は扉を押し開けるだけ……。

(僕は……何なんだ?)

ベッドに寝転がり、そんな疑問ばかりが明日夢の中に渦巻く。

そして、今日の笛の音である。

あの青年はフブキと関係があるのだろうか? ……でもそれは、現実の高校受験から逃げたいために作り出した、幻のような気もする明日夢であった。

くくくくくくく

海岸沿いの道路を、一台の救急車がけたたましい音を上げ、走り抜けて行った。

とりあえず、倒れている人を見つけた女性キャンパーの通報により、意識不明のダイバーを搬送……と言うことになっている。たった一人、されど一人である。一人でも助かって良かった、とフブキは微笑むのだった。

焚き火の炎と、温めなおしてくれたスープで暖を取り、ようやくフブキも人心地が付いた。

「じゃあ、後はバケガニだけね」

「ん。朝一でカタをつけてくる。あれはもう成体だったから、腹が減ったら捕食に出ると思う」

「きつと同じ場所で二体とも育つてたから、猛士の情報網から抜け落ちたのね」

『たちばな』には報告済みだ。相変わらず日菜佳は謝っていたが……こればかりは彼女にも予測不可能だろう。それが判つたのか、香須実も妹を叱ることはなかった。

「ねえ、フブキ」

「何？」

「あんたと初めて会ってから、何年経つか覚えてる？」

「十……年くらい？」

「十七年よっ！十七年！私が六つ、あんたは」

「八つです。はい、思い出しました」

「あのとき、あんたは自分は鬼じゃない！って言い張ったんだよねえ。まあ、私は自分が鬼になれると信じてただけ……」

赤々とした炎に照らされた香須実の頬に、わずかだが影が落ちる。実は、香須実は立花家の長女ではない。フブキと出会う以前に、二歳年上の姉を魔化魍に襲われ亡くしていた。その姉には鬼の適性があり……尚更、フブキと重なるのかも知れない。

「ねえ香須実。わたしは大丈夫だから。そう簡単には死なないから……安心しててよ」

「バケガニに海に叩き落とされて、何を言うことやら」

「……それでも、生きて帰って来たでしょ？」

香須実がどれほど理不尽に噛み付いても、フブキが怒ることはない。

だが、昔はそんなことはなかった。香須実とは取っ組み合いのケンカをしたこともある仲だ。成長した、と言えば聞こえは良いが……今のフブキは鬼として、とくに“鈴の鬼”としての宿命に雁字搦がんじがらめの印象だった。

「いつかまた、双葉って呼べるよね？」

一般の人たちの前では今でも「双葉」ではあるのだが……香須実の言葉はそういう意味ではなく。

「そりゃね。そうそういつまでも今の力は維持出来ないし……鬼を引退する時は『藤倉双葉』に戻るよ」

香須実の気持ちを察し、何でもないことのようにフブキは笑う。「そうだよね！ “鈴の鬼”として戦う時が来ても、勝てるに決まってるよね。なんたって最強だもの！」

少し無理矢理に、香須実は自分の思いをフブキに押し付けた。出会って十七年、一緒に住んで五年……香須実にとってフブキは家族同然である。家族を魔化魍に奪われる辛さは一度で充分だ。そして、その辛さは猛士に関わるほとんどの人間が味わっていた。もちろん、フブキも……。



「だから大丈夫だってば。例え最強じゃなくても、勝てなくても…  
…わたしは死なないし、負けないから」

大丈夫　それはどんなピンチでも、フブキが絶えず口にする言  
葉なのだった。

## 四之巻「負けぬ魂」(三)

昨日沈んだ夕陽が、今は朝日となって水平線から昇る。

光の中をD Aアカネが舞い戻った。フブキに、「バケガニ」の棲<sup>す</sup>み処<sup>みか</sup>を伝えに。

かなり奥まった岩壁にできた洞穴だ。狭い隙間を器用にD Aアカネは滑空する。

奥は海中で繋がっており……海からなら自在に出入り出来る広大なスペースがあった。

正面から対峙した時、吹雪鬼はこれまでにない「バケガニ」の巨大さに圧倒された。対バケガニ戦全勝の吹雪鬼でも、正直に言えば成体相手は初体験だ。このサイズで見つからなかったという事は、よほど巧妙に隠れていたのだろう。

岩に囲まれた場所で「バケガニ」の泡を喰らえばひとたまりもない。

しかしそれは、敵にとっても動きづらい場所であった。「バケガニ」は吹雪鬼を最初の獲物に定めたのか、体躯を震わせ威嚇すると巨大なハサミで襲い掛かる。

避けたつもりが目測を誤ったのか氷輪だけ風圧で飛ばされた。

( しまった！ )

その瞬間、「バケガニ」は泡を吹き出し攻撃を仕掛ける。魔化魍に高度な知能はなく、意図的ではないはずだ。吹雪鬼は敵の死角に入り込みつつ、氷輪まで駆け寄った。多少の泡で傷ついても、鬼の

治癒力を持つてすれば、後でどうにでもなる。だが、それにも限度はあった。

最後の一步……吹雪鬼は氷輪に飛びつくと、間髪入れず「バケガニ」の下に潜り込む。

「出でよつ！ 氷刃！」

腹に氷の刃を突き刺して反動でひっくり返そうとするが……重くて儘ならない。変身しても女の身では、鬼の中で最軽量の吹雪鬼だ。このまま敵が体重を掛けてきたら、下手をすれば潰される。だが……ここで仕留められず海中に逃げられたら、手間は倍増だろう。

吹雪鬼は腹を決め、ウエストのバックルから“音撃震・銃弓”を外す。氷輪にセットした瞬間、魔化魍は本能で危険を察したのか暴れ始めた。

「クッ！」

吹雪鬼は片膝をつき、約六トンは超えそうな巨大な「バケガニ」を支える。本来、吹雪鬼の限界値は四トンなのだ。五割り増しの負担は鬼の体を軋ませた。

吹雪鬼の全身から悲鳴が上がる。だが、彼女の口から漏れた言葉は、

「くそつたれえー！！  
音撃斬！ 破邪鳴弦！」

岩穴に、魔化魍を引き裂く弦打ちの音が鳴り響いた。それはエコーが掛かったように、岩肌に反射し、「バケガニ」の体内と甲羅に浸透する。

ピシピシ急速に凍りつく音がして

(まだか……)

重量オーバーで腰が砕けそうになる寸前　氷輪の先がフツと軽くなり、巨大「バケガニ」は海の藻屑もくすと消えたのだった。

く　く　く　く　く　く

週末　日曜の朝を迎えた。

ここ数日考え抜いた明日夢は、何としてももう一度フブキに会おうと決意する。そして彼が起こした行動は……柴又近辺の商店街を片っ端からあたることだった。

「ねえ、ちよつと待って！　ほんつとーに、お店一軒一軒聞いて回るつもり？」

図書館で勉強しようとした誘いに来た持田ひとみは、その明日夢の決意を聞いて、開いた口が塞がらない。ちなみに、明日夢はフブキのことを……遭難し掛けた明日夢たちを助けてくれたレスキューのお姉さん……と説明している。母の記憶通りといったあたりか。

「そりゃあ、お礼を言いたい気持ちは判るけど……。でも、柴又にお店って何軒あるか知ってる？　百軒とかじゃすまないと思うよ」「ひとみの言う事も最もだろう。犬も歩けば棒に当たる、ではないが……冷静に考えれば、柴又を歩けばフブキに当たる、とは思えなくて当然だ。」

「判ってるよ。でも、どうしても逢いたいんだ。逢わなきゃならないんだよ。僕は藤倉さんに逢わなきゃ、一步も進めない気がするんだ」

「……………」

明日夢が何を言いたいのか、ひとみにはサツパリ判らない。だが、

首を傾げる彼女の目の前で、明日夢は商店街を端から尋ね始めた。見た目は飛び込み営業のようだ。

最初は呆れていたひとみも、明日夢のこれまでにない熱心さに、どこことなく覇気を感じ……

「もうっ！ 判ったわよ、あたしも手伝う！」

そう叫ぶと、ひとみも明日夢と一緒に、商店街の端から三つ目にあるお蕎麦屋さんに飛び込んだのだった。

くくくくくくくく

「じゃあ、イブキくんの調査でも間違いなかっただね」

「はい。僕の笛の音に間違いなく反応しました。彼は 鬼の適性を持っていきます」

地下ではなく、客のいない甘味処「たちばな」の店内で勢地郎とイブキが話している。

ちようどお昼を過ぎたあたりか……お食事処ではないので、その時間帯が賑わうことはない。むしろ常連客は平日に訪れることが多い店であった。

勢地郎とイブキの前にスツとお茶が置かれる。

「じゃ、わたしが彼に逢う必要はなくなりましたね」

湯のみを二つ置きながら、そう言ったのはフブキであった。出勤待機中のフブキは、香須実たちと同じ、くすんだ緑色の和風コスチュームを着て本日は店番である。

日菜佳は猛士の仕事が忙しく、香須実はサポーターとして他の鬼と出勤していた。

「そうだなあ。本決まりなら、これ以上フブキくんが関わらない方がいいか……」

勢地郎はしみじみと呟いた。その言葉にイブキも同意する。

「そうですね。とりあえず……弟子のいない鬼をピックアップして、鬼の中からも希望を取りましょう。それから、あの少年にアプローチしてほうが良いと思います。フブキさんも、それでいいですよね？」

お盆を胸に抱かかえるようにしていたフブキだが……イブキの質問にハツとして、

「どっちにしても、わたしが関わることはないから……猛士のほうで決めて下さい」

穏やかな声の中に、どことなく寂しさの混じるフブキだった。

く\*く\*く\*く\*く\*

「……」

「そう、……」

「でも、甘いものはちょっと……」

「午前中いっぱい付き合っただけだよ。お昼も食べないで……。『きびだんご』が名物なんだって。ね、おごってくれてもバチは当たらないと思うなあ」

目に付く店に片っ端から飛び込んで……結局、「藤倉双葉」という女性の手掛かりは、何一つ掴めなかった。そして……「疲れた」というひとみに、強引に引っ張って来られた明日夢。

二人の目の前には、甘味処「たちばな」の看板があった。

く五之巻「息吹く鬼」につづく

#### 四之巻「負けぬ魂」(三)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

人助け、人命救助に重きを置いて、その心構えをフブキに語って貰いました。

香須実とフブキのやり取りは書いてて楽しいです。独特のテンポが少しでも伝わっていると嬉しいな(笑)

次回、五之巻「息吹く鬼」…ということ、威吹鬼が登場します。

明日夢もフブキと再会しますし…あきらも初登場！(でも原作とは違います)

では、また来週。皆さまのお越しをお待ちしておりますm( )m



## 五之巻「息吹く鬼」(一)

目の前に雪山で逢った女性がいる。

明日夢は言葉なく立ち尽くした。当然、フブキの口も開きかけたままだ。勢地郎とイブキも同様で……まさにひとみ以外の全員が、ゴクリと息を飲んだ。

「あの……ひよつとして準備中だったですか？」

おずおずとひとみがフブキに問い掛けた。

「あ、いえ。いらっしやいませ。さあ、どうぞ！」

フブキは一瞬固まったが、ニツコリと微笑みを返す。明日夢はそんなフブキに、

「あの……あの……」

「明日夢くん、だったっけ？ わたしのこと覚えてる？」

「はいっ！ 覚えてますっ！」

「そうか……それは良かった。また、逢えたね」

「はいっ！」

「え？ え？ ええっ？」

フブキと明日夢の顔を交互に見て、ひとみは驚きの声を上げるのだった。

く\*く\*く\*く\*

「でも、驚いたねえ。双葉くんを探すために、柴又の商店街をねえ」  
勢地郎は目を丸くして感心した声を出す。フブキと呼んでいたのを瞬時に切り替える。この辺は手馴れたものだ。

「はあ……まあ」

勢地郎だけでなく、フブキやイブキも肯きつつ、好意的な笑顔を見せてくれた。明日夢はこの偶然に喜びつつも緊張気味だ。

「でもでも、あたしもビックリしました！ だって、あのイケメンのお兄さんにまた逢えるなんて！ それにい、ちゃんと覚えていて下さったなんて！」

ひとみの感動はフブキではなくて、どうやらイブキらしい。校門前に立っていて、すぐに大型バイクで走り去ったイブキのことを、ひとみはしっかりと覚えていた。

「それはね……キミみたいに可愛い女の子のことは、忘れてたりしないよ」

などと、齒の浮くような台詞を言って、余計にひとみを喜ばせている。

勢地郎はコソツとフブキに耳打ちし、

「この辺りが、どうもイブキくんは信用ならんのだ。この件はしっかり香須実に報告しておいてくれよ」

人当たりの……トクに女性受けの良いイブキに不信感を露にする。支部長というより、父親としての感情が百パーセントであろう。

「はあ……報告するまでもないと思います」

現状ではイブキにチャンスはなさそうだが……恋はどう転ぶか判らない。とまあ、恋愛経験ゼロのフブキは考えつつも苦笑した。

コトツとテーブルに『きびだんご』が二皿置かれた。給仕は当然フブキである。

「お待たせしました。名物『きびだんご』です」

「あつ、あのお……」

「何？」

「僕、あの時のことを色々聞きたくて……それに、あの鈴の音が、どうしてももう一度聞きたくて……」

「ん。それは……」

フブキは言葉を止め、勢地郎を振り返った。明日夢はその微妙な時間が不安で堪らなくなり……。

「藤倉さん！ 僕っ」

「フブキさん！ フブキさん！ フブキさ〜ん！！」

階段を駆け上がる音と共に、絶叫しながら日菜佳が飛び込んでくる。

しかも、「フブキさん」を連呼しながら……だ。猛士の面々は思わず頭を抱えたのだった。

く〜く〜く〜く〜

「魔化魍があ〜」と叫び出す日菜佳を引き摺るように、地下に下りたフブキとイブキだったが……。

「じゃあ……ヤマビコの予想でダンキを出勤させたら、イッタンメンが飛んできたって訳？」

苦笑混じりのフブキとは逆に、拡声ボタンを押した電話のスピーカーからは香須実の怒鳴り声が聞こえてきた。

『笑ってる場合じゃないでしょうがっ！ 太鼓とバチでイッタンメンに飛び乗れって言うの！？』

電話の向こう側では「まあまあカスミちゃん落ち着こっ……」とダンキの宥める声がする。

音撃武器のタイプの中で、このダンキを含めゴウキ・エイキの三人が打撃で音撃を放つ“太鼓の鬼”と呼ばれるグループに属する。彼らは一度に大勢の敵は相手に出来ない。その代わり、直接叩いて

音を響かせるため、外装の硬い敵や動きの鈍い大型の魔化魍が専門だ。

接近戦が主流だから、と言っわけではあるまいが……“太鼓の鬼”は気の荒いヤツが多い。このダンキにしても、鬼の中ではかなり喧嘩っ早いほうだ。何かあれば真っ先に怒鳴りつける男だが……それ以上という香須実は、ある意味凄いかもしれない。

フブキもこれ以上香須実を怒らせるまい、と声音を引き締める。  
「判った判った。ダンキに替わってくれる？」

『……………』

『あ、オレ。フブキ、お前来る？』

『そりゃ行けるけどね。でも……………』

『実は、さ。ヤマビコも強<sup>おなが</sup>ち外してるとは思えないんだよな』

『どういうこと？』

『気配はするんだよ。ヤマビコの童子と姫らしき被害も出てるし……あいつら、結構移動するからさ。ひよっとしたら隣の山かも知れない。俺らはさ、隣に移動して探ってみるよ』

ダンキと香須実は、茨城県の筑波連山の一つにベースキャンプを張っている。標高三百〜八百メートルの山々が連なり、確かに魔化魍の出現ポイントを予測するのが難しい場所であった。

「わたしが出てもいいんだけど……隣にイブキくんがいるからね。ま、どつちかが行くから。到着しだい引継ぎでOK？」

『了解！ まだまだ幼体で、飛ぶのがやっとだったな。お前かイブキなら楽勝だよ』

軽口を叩くダンキに 「ダンキさんっ！ そんないい加減なことを言わないで下さい！ ただでさえ……………」と香須実の説教が始まった。

「じゃ、そういうことで……………姉上をよろしく！」

『あ……おいつ』

姉の怒りが飛び火しないうちに、慌てて電話を切る日菜佳なのであった。

五之巻「息吹く鬼」(一)(後書き)

お待たせ致しましたm(――)m( 待ってる人がいるかどうかは  
…苦笑)

五之巻は威吹鬼登場で全三話です。

明日(今日?)とにかく本日中に後二話UPしますので、ぜひご覧  
下さいませ。

よろしくお願い致します。

## 五之巻「息吹く鬼」(二)

「それじゃ、僕が行くということ、構いませんか？」

「それはいいんだけどね。確か、お弟子さんはまだお休みだったよね」

日菜佳と交代で地下に下りて来た勢地郎が、若干心配そうな声を出す。

その勢地郎の言葉に、いささか神経質そうにイブキは応じた。どうも、弟子のことを言われるのは面白くないようだ。

「弟子がいなくても出勤出来ますよ。それとも、そんなに頼りないですか？」

「いやいや、そうじゃなくて。今、サポーターも全員出払っているからね。信用してないわけじゃないが、宗家の鬼を単独では出せないんだ。その辺の事情も、君なら判ってくれるだろ？」

判るが納得出来ない　イブキの顔はそう言っていた。

「なら、わたしがサポートしますよ。イッタンモメンなら彼のほうが慣れてるし……DAの用意やベースキャンプの段取りは覚えてますから。“雪花”<sup>せっか</sup>でも出てもいいですよね？」

折衷案のようにフブキが口を挟んだ。

「そんな……先輩の、しかも“鈴の鬼”のフブキさんにサポートなんて」

イブキは一度は断わったが……。

結局、フブキをサポーターとして伴い、関東支部長の出勤許可が出たのであった。

明日夢はトボトボと帰路についていた。

フブキとは逢えたものの……

「ごめん。ホントごめんね。レスキューの出動要請が入ったから行かなきゃならないんだ。また今度訪ねて来て。わたしはココに住んでるから……」

ドタバタと慌てふためくように、フブキはイブキと共に店を飛び出した。その様子を見ていたひとみは、

「なんか……悔しいけどお似合いよね。美男美女って感じ？」

などと、フブキとイブキの仲を邪推している。それも、どこことなく明日夢には面白くない。

「そんなにお似合いかなあ？ 藤倉さんには、もっと……その、大人のしつかりした人のほうが似合うと思うけどなっ！」

ひとみに向かって怒鳴るように言ってしまった。それも自己嫌悪の一つだ。

「安達くんて、藤倉さんのことが好きなの？ 一目惚れしたから探してたんだ！ なんか手伝って損した！」

ひとみはそんな風に言うと、さっさと一人で帰ってしまったのだ。

決して『恋』とかじゃないと思う。そうじゃなくて、上手く説明出来ないが トクベツなのだ。

そう、明日夢にとってフブキはトクベツな存在である。例えどんな危険な状況に陥っても、無条件で信じていいような……真っ暗な中でも、フブキに呼ばれたら真っ直ぐ駆けて行けるような……。

「はあああ~~~~」

思わず声に出してため息をついていた。渡ろうと思った瞬間に信号も赤に変わり、



(僕はなんて運が悪いな……)  
何もかもが裏目に出ている気がして、ガックリ肩を落とす。  
その時だ。

明日夢の隣で信号待ちをしていた女性が、不意にうずくまった。  
一見して判るくらいお腹が大きい。たまに挨拶する来月出産予定の  
隣の奥さんと同じくらいだ、と明日夢は思った。

「あ、あの……」

「い……いたい……」

「え？ ええっ？」

誰がどう見ても危険な状態だろう。何かしなければ……と気持ち  
は焦るが、具体的に何をすればいいのか思いつかない。オロオロと  
周りを見回すだけだ。車は通るが、気付かないのか停まってはくれ  
ない。それに、横断歩道の反対側に待つ人はいたが、こちら側には  
明日夢しかいないのである。

ふと気付くと、妊婦の足元に水のようなものが広がり出して、明  
日夢のほうにも流れてきた。彼は怖くなり……

(僕が何もしなくても誰かが助けてくれるよ……たぶん)

そんな弱腰の考えが頭をよぎり、膝が震えて後退し始める。

その時、明日夢の真横を風が通り過ぎた。

それは、明日夢と同じ年頃のショートヘアで小柄な少女であった。  
少女は膝をつく妊婦に駆け寄る。

「陣痛ですか？ 破水しますから救急車を呼びますね。横になっ  
て、少しだけ我慢して下さい」

優しい声で言うと、自分のジャケットを脱ぎ妊婦の枕にする。そ  
して振り返るなり、明日夢に厳しい声で指示を出す。

「早く救急車を！」  
「は、はいっ」

明日夢は、震える手で一一九をコールするが……

『はい一一九番です。火事ですか？ 救急ですか？』

「あ、あの……あの……あの」

『落ち着いて下さい。火事が救急か教えて下さい』

「は、はい。あの……」

その瞬間、パツと携帯電話は取り上げられた。

「救急車をお願いします。妊娠後期の女性が陣痛を起こして倒れています。はい、破水もしてます。場所は柴又五丁目……」

少女はまるで動じない様子でテキパキと通報する。瞬く間に救急車が到着し、妊婦が運ばれて行くが……明日夢は何も出来ず、呆然と見送るだけだった。

救急車が走り去り、佇む明日夢に向かつて少女は無言で携帯を突き返した。透明でひたむきさが窺える少女の瞳は、明らかに『役立たず』と言っているのだった。

くくくくくくくくく

筑波連山 とある湖畔で、体を寄せ合いデートを楽しむカップルがいた。

二人は背後から忍び寄る影に気付くこともなく……水際をはしやぎながら戯れる。カップルが湖から離れようと振り返った瞬間不気味な男女が空から舞い降りた。まるで宙吊りになった状態から、スーッと着地したみように見える。それは、魔化魍「イッタンモメ

ン」の童子と姫であった。

【我々の子が……】

【お腹を空かせて泣いております】

「何？ この人たち！？」

「い、行こう……」

人とは違う異質なものを感じ、カップルは慌てて立ち去ろうとしたが……。童子と姫は足をロープのように伸ばし、カップルの身体に巻きつける。一瞬のことで、抵抗する間もなく二人は巻き取られ、見る見るうちに生気が奪われていく。

【少し、絞らせていただきます】

そして言葉通り、命の失った肉体を湖の真上に翳<sup>かざ</sup>し、きつく絞り始めたのだ。血液とは違う無色の液体が音を立て水中に滴<sup>したた</sup>り落ち……。その直後、黒い影に湖面は波打つのであった。

く\*く\*く\*く\*

「あきらは……相変わらず？」

森の中にベースキャンプを張りながら、フブキはイブキに尋ねた。引継ぎを済ませると、ダンキは香須実を伴い「ヤマビコ」の気配を追った。隣の山にキャンプを張るといふ。

到着した時のイブキの眼差しは、明らかに、フブキと香須実に入れ替わって欲しいと言わんばかりで……。それを察したのか、素早くテントを畳みダンキの車に詰め込み……。危うくダンキを置いて行きそうになる香須実であった。

「え？ ええ、まあ。悪くはないんですけど……ね」

弟子のことになると、イブキの口調は鈍る。

「もう、丸二年だっけ？」

「そうです」

「修行もそろそろ仕上げだよね」

「……わかってます」

弱冠二十歳にして四年のキャリアを持ち、しかもイブキには弟子がいた。

その弟子というのが、十五歳……中学三年生の少女・天美あきらだ。今年に入つてすぐ、高校受験のために長期休暇を取っている。

鬼の血を受け継ぐ彼女は、鬼候補の中でも非常に優秀であった。全てにおいて覚えが早く、天才と評されるくらいだ。

優秀な鬼に優秀な弟子……この弟子がイブキの目下最大の悩みである。

「難しいですよ……十代の女の子は」

「十代の女の子だけじゃないと思うな……難しいのは」

イブキの弱音にボソツとフブキは突っ込む。イブキは少し表情を和らげると、

「そうですね。女性は謎です」

顔を見合わせ、二人は笑うのだった。

## 五之巻「息吹く鬼」(三)

猛士の中で最も酷使されるのがサポーターと言っても過言じゃない。

それくらい、彼らの仕事は多いのである。

ベースキャンプを設営する場合、テントを張るだけじゃなくほとんどの作業を受け持つ。お茶や食事、着替えの用意といった雑用。「たちばな」との連絡やDAのセッティング。最終的に現場に立ち会えるケースだと、魔化魍の情報収集まで行うのだ。

今は人手不足で鬼三人辺りサポーターの数は一〜二人だ。足りない分は弟子が務める。だから、弟子を持つイブキなどは、普段サポーターは付かないのだった。

弟子も後期になると変身可能なケースも多い。魔化魍相手は無理でも、姫や童子相手の戦力となる。イブキの弟子・あきらの場合、修行進度は早かったが未だ変身出来ず、そこで止まっていた。

そして彼らの場合、通常の師弟関係とは微妙に違い……。

サポーターよろしく準備をこなすフブキの元に、イブキの放ったDA・ニビイロヘビ(銅色蛇)が戻ってきた。

音笛おんてきにセットしてDAの報告を聞くイブキ。

「当たり前 ですね」

「手を貸そうか？」

フブキの問い掛けに、イブキはしばらく沈黙する。しかし、やがて意を決したように顔を上げ、ニッコリと微笑んだ。

「それじゃ、お言葉に甘えて。……おとこ困こになって下さい」

「……………」

くくくくくくくく

間もなく日が落ちる。

雪こそ積もってはいるが、吐く息は白く、誰もいない山の中は静寂に包まれていた。

湖畔に転がる枯れ木の側に、フブキは佇たたずんでいた。

いや、よくよく見るとそれは『木』ではない。『人』であったものだ。気配は徐々に近づき……フブキを囲い込むように姫と童子が姿を現した。

囷ひょうりんと言われたため、氷輪もD Aも持たたず……音伽おんかだけでなく金剛こんごうの鈴すずまで外している。早く言えば、今のフブキは吹雪鬼になれない。生身なまみの女性であった。

【どうか……食べ物を】

姫の口から人間の言葉が発せられた瞬間　　姫の足がスルスル伸びてフブキに襲い掛かる。

フブキは、首を庇おうと左腕をかざし……そこに姫の足が絡みつく。直後、童子の伸びた両足が、今度は右腕と胸に巻きついた。あつという間に、フブキは自由を奪われた。

我が子……魔化魍の獲物を捕え、ほくそ笑む童子と姫。奴らの注意は完璧にフブキに向いていた。

その時、静寂を破り、森に爆音が轟いた。  
後方から一気に竜巻を駆り、イブキが現れたのだ。見事に童子と

姫の後方を取る。こうでもしなければ湖面ギリギリを浮遊出来る、  
奴らの背後には回れない。

銃モードの“音撃管・烈風”おんげきかん れつふうから鬼石おにいしを連射すると、フブキの腕  
に巻きついた姫の足が千切れ飛んだ。

イブキは大型バイク・竜巻から降りるなり、“音笛”を吹き、静  
かに額にかざした。

片足を粉々にされた姫は、妖姫へと変身しながらイブキに残った  
足で襲い掛かる。だが……彼を中心に巻き起こった突風は、妖姫の  
足を簡単に弾き飛ばした。そして、風を手刀で切り裂き、そこから  
現れたのは……深い青、コバルトブルーを身に纏まとう鬼、“威吹鬼”いぶき  
であった。

変身後の体格は吹雪鬼より一回り大きい。角も、左右に二本、中  
央に一本の計三本。

威吹鬼は烈風を構え、背を向けた妖姫に容赦なく撃ち込む。妖姫  
は全身に数十発を喰らい、抵抗する間もなく微塵に吹き飛んだのだ  
った。

「フブキさん、お怪我はありませんか？」

威吹鬼は余裕の声だ。

しかしフブキに至っては笑みすら浮かべて、両手を上げると肩を  
すくめて見せた。

一方、イブキに足を撃ち抜かれる寸前、フブキから離れた童子だ  
ったが……。ヤツもまた怪童子へと変身。威吹鬼の視線がフブキに  
移った隙を見つけ攻撃に転じた。

怪童子は手足を地上をスレスレにうねらせ、威吹鬼に襲い掛かる。

「おっと……」

威吹鬼は、怪童子の攻撃をすり抜けるように避ける。ヤツの伸びきった足を、鋭い蹴りで次々に切り裂いていく。

そこに 湖から魔化魍「イッタンモメン」が飛び出した。急上昇すると、親である怪童子を殺そうとする威吹鬼に向かって、今度は急降下する。

威吹鬼の意識が「イッタンモメン」に移るのを待っていたのだから。怪童子は湖に逃げ込もうと、地表を滑るよう移動するではないか。だが……その怪童子の前に立ち塞がったのはフブキであった。

丸腰で変身具すら持たず。そんな、鬼の気配を絶ったフブキに怪童子は奇声を上げ威嚇する。しかし、腕組みをしたまま彼女は微動だにしない。

それに気付いた威吹鬼は「イッタンモメン」の攻撃をかわし、怪童子に向かって風のように突き進んだ。間合いに捉えた一瞬、威吹鬼の足が空を舞う。威吹鬼の回し蹴り……旋風脚せんふうきゃくが怪童子の全身を切り刻んだ。

フブキの鼻先で、怪童子は風に散るのだった。

残るは魔化魍のみ。威吹鬼が烈風を構えなおした時、湖面から覗くのは「イッタンモメン」の尻尾だけであった。

く　　く　　く　　く　　く　　く

翌日　　。

ちょうど昨日と同じ時刻。「たちばな」の前に立ち尽くす少年がひとり……明日夢である。



昨日の帰宅途中の出来事にかなり落ち込み、明日夢は再びやって来てしまったのだ。もちろん、一人で。入ろうか、入るまいか……およそ三十分近くもウロウロと悩み続ける。

「入るんなら早く入れば？」

「う、うわっ！ す、すみませんっ……」

不意に、勢地郎に声を掛けられ、驚きのあまり跳ね上がる。

「実は……さつきから見てたんだよ。ほら！」

上を指差す勢地郎に、明日夢がつかられて視線を上げたとき。そこには日菜佳がニコニコ笑って手を振っていたのだった。

「そう……ですか。じゃ、昨日出掛けられたままなんですな……」

日菜佳から、昨日の“仕事”が長引いて、と言われ、俯く明日夢の視線は更に下に向かった。

“仕事”とはレスキューではなく、あの化け物退治であろうと想像はついた。しかし、それを口にするのはどうも憚はばられる。明日夢は、尋ねる勇気を奮い起こそうとするが……。

「去年ね、双葉くんと逢ったんだよね？ 万座温泉で」

「は、はあ。まあ、そうです」

「何としても礼を言いたくて、この柴又を片っ端から探した、と」

「は、い。ご迷惑だったでしょうか？」

「いやいや、そうじゃなくてね。うーん、何から切り出せばいいかなあ」

勢地郎は変わらず笑みを浮かべたまま、言葉を選んで見たいだ。明日夢はそんな勢地郎なら話せる気がして、思い切って尋ねてみる。

「あのっ！ 藤倉さんって何者なんですか？ ヒーローとか……正

義の味方とか……そういう特殊な人なんでしょう？　こうして、僕なんか逢いに來ることは……ダメなんでしょう？」

明日夢の精一杯であった。そして、

「は、母は、なんか色々忘れちゃったみたいだけど、僕は忘れられないし……。それに、あの鈴の音が　あの音が僕の耳から離れないんです！　初めて聞いた時に、僕の心とか、運命とか、何かが変わった気がして……。このまんまじゃ勉強も手に付かないし……すみません……責任転嫁だとは思うんですけど。それでも僕はっ！」

叫ぶように口にする明日夢をジッと見ていた勢地郎だったが……。軽く目を閉じると、勢地郎の眉間に少しだけシワが寄る。次に目を開いた時、勢地郎の瞳から柔らかい光がパタリと閉じられた。自然と明日夢の表情も引き締まる。

微かな緊張が「<sup>かす</sup>たちばな」の店内に漂った。

無意識で、明日夢は片方の手を制服のポケットに突っ込んだ。そして、あの時拾った登山用のコンパスをきつく握り締める。

「あのね、明日夢くん。双葉くんは“フブキ”と言った。簡単に言えば、アノ姿になる彼女の、コードネームみたいなものかな。そして　彼女は今、筑波連山の一つにいる。そこは決して安全な場所じゃあない。さて……君はどうするかい？」

それは明日夢の前に開かれた『鬼への道』に繋がる　彼自身が選ぶ『第一歩』であった。

五之巻「息吹く鬼」(三)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

イブキくんは、原作登場時の飄々とした性格のイケメン路線を行って貰おうかと思ってます。宗家の鬼のプライドなんかも見せて行きたいな(笑)

あきらはツンデレを通すつもりです。簡単に明日夢と『仲直り』はさせません。(なんちゃって)

ちなみにダンキさん、結構お気に入りなのでちよくちよく出て来るかも(笑)

他の鬼で「出して欲しいな」というのがありましたらお知らせください。可能な限り、頑張ってみます！(たくさんは無理だけど)(^ ^ ;)

次回、六之巻「叫ぶ風」…ということで、対イッタンモメン戦の決着と、「少年の一步」です。(29話は掛け過ぎでしょう…苦笑)

では、また来週。皆さまのお越しをお待ちしておりますm( )m

## 六之巻「叫ぶ風」(一)

『そっちにね、例の少年が向かったから……』

翌朝、「イッタンモメン」は取り逃がしたものの、姫と童子は倒したと「たちはな」に連絡を入れるイブキ。

電話口に出た勢地郎は「そりゃご苦労さん。フブキに代わってくれるかな」と言い、いきなり明日夢のことを話し始めたのだった。

『あ、あの……どういことですか？ 例のって、安達明日夢くんですよ？』

『そうそう。彼がね、店に訪ねて来たんだよ、今度は一人で』

『いや、でも……』

『フブキくんが正義の味方なのか、ヒーローなのか、と聞くもんでね。君の名前がフブキである、ということだけ教えて……どうしたいか、彼に選んで貰ったんだ』

『言ってることは判るが、いささか乱暴だろう、とフブキは思ってた。でも、おやつさん。ここはまだ危険ですよ。第一、ダンキの追ってるヤマビコもまだ確認出来てないんでしょう？』

『うん。でもね、危険だと判ってても、あの少年は“行きたい”と言ったんだ。だから……後は任せるよ。イブキちゃんと相談して、なんだったら鬼の戦いぶりを見せてやつちやどうか？』

勢地郎の言葉をイブキに伝え、無言で顔を見合わせる二人だった。

くくくくくくくく

魔化魍「イッタンモメン」は成体になるまでほとんど湖中にいる

という。

親である姫と童子が死んだため、捕食は厳しくなったはずだ。しかし、既に少しの時間でも水から出て空を飛べるまでに成長していた。あれなら、湖中の魚や小動物、湖畔に近づく人間を捕食して成長を続ける可能性が高い。

フブキが属する“弦の鬼”、ダンキが属する“太鼓の鬼”に続いて、音撃武器にはもう一つ、“管の鬼”と呼ばれるグループがある。このイブキとトウキ、シヨウキがその“管の鬼”であった。彼らは、「イッタンモメン」のような飛翔・遠距離系の魔化魍、或いは一定条件の下で複数出現する魔化魍が専門だ。

だいたいにおいて、音撃管と呼ばれる武器を持つ。魔化魍を倒すのに絶大な効果を示す弾丸“鬼石”を敵に撃ち込み、音撃によって敵を内部から破壊するのだ。

あと、数は少ないが水中に棲息する魔化魍もイブキらの担当であった。“弦”と“太鼓”は水中では十分な音撃が出来ない。“管”は音の振動により音撃が可能なのである。

ただ、これら全ての条件をクリアするのがフブキだが……。

吹雪鬼は、数百年の昔から伝わる金剛の音色で変身出来る通称“鈴の鬼”だ。鬼は厳密に言えば、どの変身具でも変身が可能なのだ。それぞれ変身し易い音域があり、それに合わせてチューニングしている。だが、調整不可能な金剛は、その音で変身出来る鬼が現れるまで待たねばならない。

優ゆうに吹雪鬼は、猛士のデータにおいて百年以上ぶりに顕現した“鈴の鬼”であった。

もちろん、その特殊な鬼が現れるのには、当然の如く特殊な状況を意味して……。

「おやつさんにも困ったもんだ。どうしてわたしのことを教えるかなあ」

昨夜は森の深くにテントを張ったが、童子と姫を倒したので、フブキらは湖に近づくことにした。そして、湖畔から五十メートルほど木々を分け入った場所に新たにベースキャンプを設置する。

森の中を澄んだ空気が席卷し、朝の光が冬枯れの木を白く照らした。ほんの数時間前まで深遠の闇に包まれていた森が、今は隠れる場所を探すのも困難なほど白々としている。

フブキは順に戻ってきたD・A・ニビイロヘビの情報を確認しながら、再びケースにセッティングし直した。深夜に放ったD・Aは昼前には全部戻るであろう。当たりが出てもすぐには追えない。その場所を重点的にチェックして、D・Aに魔化魍の気配を追わせ、水から出た時を狙うのがベストな戦法だと言える。

「確かに……この状況では長期戦になるかも知れませんが。その場合、ダンキさんのほうに回して、音撃を見てもらったほうがいいのかも……」

フブキは思わず苦笑いだ。彼のビジネスライクな点は、ある意味尊敬に値する。

そんなフブキの視線に気付いたのか、

「何か？」

「いや。そうじゃなくて、ね」

色々な意味の「そうじゃなくて」だ。

小さく首を振りながら、フブキは隣の山を見つめた。標高は六百メートルもない。だが……、

「隣が気になりますか？」

「ん、まあね。イブキは？ 何も感じない？」

「そう……ですね。気配は。でも、そっちじゃなくて逆ですけど」  
イブキが指差した方角はダンキの向かった山だった。フブキが気

にするのは反対側である。

「ああ、まあね。そっちは確実だともう。成長しながら逃げてるみたいだから、じきにダンキが追いつくでしょう」

「そっちの山は……僕にはちよつと……」

「そうだね。日菜佳も何にも言っただから、気のせい、かな」

最後にチラツと視線を送り、作業に戻るフブキだった。

くくくくくくくく

三度の乗り換えを経て、四度目が最後だ。明日夢は今、一両編成の電車に乗っている。教えられた通りに向かっているつもりだが、間違っていないか不安になる。

始発で出た明日夢だが、時刻は間もなく昼であった。

「そこは決して安全な場所じゃあない」

勢地郎はそう言った。それでも、と言ったのは明日夢だ。

フブキに逢いたい。逢って話したい。それでどうするのかまでは考えてはいなかった。

明日夢は車窓に流れる景色をボンヤリと眺めていた。

市街地を通る時は、それなりに町ごとに色あいもあったが、郊外に出ると代わり映えがなくなる。明日夢の前に広がるのは長閑な田園風景。コレが秋なら稲穂が金色に揺れ、波のように見えてさぞ綺麗だろう。真冬の今はどこか寒々しく……そんなこと考えながら……やがて何も考えられなくなり……。

明日夢は降りるべき駅を通過し、早い話が寝過ごしたのだった。

次の駅で慌てて飛び降りた明日夢に地元の間人は「今日はもう電車はないぞ」と言う。

どうしたらいいのか……。呆然と独り、無人駅に佇む明日夢であった。

くわくわくわくわく

「イッタンモメン」を追尾中のDAが、地面を滑るようにベースキャンプ目指して戻って来る。

イブキは魔化魍が湖中を飛び立ちそうな気配を察知した。

「この分なら意外と早くケリが付きそうですね」

イブキはそう言いながらニツコリと余裕の笑みを浮かべる。

「空を飛んでいられるのは十分程度でしょ？ 鬼石を撃ち込んで音撃までって厳しくない？」

「あのサイズなら数発で効果があります。時間は掛かりませんよ」

だが、水に逃げ込まれたら……水中で効果があるのは振動で、音そのものじゃない。イブキが飛び込めば話は別だが。この時期の水は、音撃どころではなくなるほど冷たい。それはつい先日、フブキが身を持って経験済みだ。

いざと言う時のためフォローに回ろうというフブキを、

「フブキさんは僕の師匠じゃありませんし、僕は鬼になりたての新米でもありません。それに、今はサポーターとしてお願いしてるんです。ここで待機していて下さい」

「了解」

フブキは軽く両手を上げ、引き下がった。



イブキは決してわからずやでも頑固な男でもない。だが、宗家の鬼として刷り込まれた矜持きょうじが、必要以上にフブキと対等であろうとする。

それは彼の長所でもあり、欠点でもあった。

おそらくは彼の弟子・あきらが、イブキではなくフブキの弟子を希望してことも、関係しているのであろう。

（男心も難しいな…… ホント）

口の中で呟き、ため息をつくフブキであった。

六之巻「叫ぶ風」(一)(後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

六之巻は全三話です。

(三)は今日中は無理かも、日曜にはUPしたいと思っています。

## 六之巻「叫ぶ風」(二)

『え？ 帰ってないし、連絡もないってことですか？』  
『朝早く出て行ったきりで、夕方には戻るから、とか言ってたんですけどねえ。ホント何やってんのかしら』

日菜佳が受けた電話は、明日夢の母・郁子からのものだ。郁子は明日夢から「藤倉さんは柴又の立花さんの家に住んでる」と聞いていたので、柴又の立花さんを片っ端から電話したらしい。その辺りが、やはり親子！ と感心する日菜佳であった。しかし、電話の内容は笑っていられるものではない。

もう日は傾き、沈む寸前である。

昼過ぎにフブキの定時連絡を受けた時は、まだ着いてない、ということだった。着いたらすぐに連絡下さいと、フブキたちには言うてあるのだが……。

テーブルの反対側で勢地郎が携帯でフブキに連絡を取っている。しかし、コール五回で留守電に変わるだけだ。

「ダメだね。二人とも出てるみたいだ」

「どうしましょー。明日夢くんに何かあったんじゃ」

「いや……フブキが近くににいるんだから、滅多なことにはならんだろっ」

「でも……」

勢地郎はスッと受話器を取り、郁子に向かって話し始めた。

『ああ、お母さんですか？ 私は、オリエンテーリング団体『猛士』の関東支部長を務めております、立花と申します。先日は、うちの藤倉がお世話になりました』

『いえいえ、とんでもない！ こちらこそ助けて頂いて……藤倉さんがいなきや、息子と二人で今でも雪に埋まったまんまですよ！』  
『いやあ、お役に立てて良かった。藤倉も喜びますよ。で、息子さんの明日夢くんなんですが、どうやら藤倉の仕事に興味を持たれたみたいで、今、彼女の仕事先に行ってるんです』  
『ええっ？ あの子運動神経もなくて……ご迷惑じゃ』  
『いやいや、藤倉はベテランのレスキューですし、他にも現場には腕利きがいますんで、息子さんに危険はありません。……ちよっと電波に状態が悪い場所なんで、直接は連絡取れないみたいなんです  
が……』

その父親の言葉に日菜佳は啞然とする。

口をパクパクさせる娘を片手で往なし、勢地郎は続けた。

『ですから、今夜は向こうに泊まって頂きます。明日には、藤倉にご自宅まで送らせるんで。お母さんにはご心配のことと思いますが……』  
『……』  
『とんでもない！ もう、そう言う事でしたら……男の子はそれぐらいじゃなきや！ 受験失敗したら「猛士」さんで雇って貰おうかしら。あ、こんなこと言ったら、また縁起でもないって叱られるわ』

電話からは郁子の明るい声が響いてくるのであった。

「父上~~~~いいんですか？ あんなこと言っちゃって」

「大丈夫、大丈夫」

「でもお、鬼の適性があるってことは……ある意味、魔化魍に遭遇する可能性も高いんじゃない」

「だーいじょうぶ」

『猛士』以外から鬼の適性を持つものが現れる場合、魔化魍に襲われて『猛士』の一員と遭遇するケースが非常に多い。明日夢の場合もそうである。

以前、鬼の数を増やそうと『猛士』の開発チームがこんな実験をした。

街中で変身具の音を鳴らし、道行く人の反応を探ったのである。言い方は悪いが“数撃ちや当たる”作戦だ。結果、適性を持つ人間はゼロであった。おそらく数千人は試したのであろう。

それにより、『鬼の適性を持つものは魔化魍を引き寄せる』または『鬼の適性を持つものが魔化魍を見つけ易い』といった仮説が立てられている。

「フブキさーん。明日夢くんをお願いしますよぉ」

日菜佳は筑波連山の方角に向かって、小さな声で呟き、パンパンと手を叩いたのだった。

一方、呆気<sup>あっけ</sup>らかんと笑って返事をしたものの、郁子にとって明日夢は大事な一人息子だ。

さすがに心配そうな表情で受話器を下ろし、祈るように目を閉じる母であった。

くまくまくまくま

そのころ明日夢はコンパスを握り締め、筑波連山の山中にいた。だが、自分が何処の山にいるのか彼は判っていない。

たかが一駅である。舗装された道路も通っており、道から少し入

った場所でベースキャンプを張っている、という話だ。道路沿いに戻れば問題ない。そう思ったのが大問題であった。

フブキに逢わなければならない。その一念でやって来たもの……。

舗装された道路は車用だ。傾斜が急にならないように考えられている。徒歩なら目の前にある上段の道路まで、百メートル以上遠回りしなければならぬ。そのため、明日夢は森の中をショートカットするコースを選んだ。

初めは良かったのだ。だが、次第に森の中を歩く時間が長くなり……足元も険しくなり……舗装された道路はなくなった。なのに、一向に目的地に着く気配もない。

ガサツと茂みが揺れ 鳥が飛び立つ。ホツとひと息つくが、事態はなんら好転したわけではない。

彼はコンパスを手に、

「駅で野宿したほうがマシだったかも……」

そんな弱気な言葉を呟く明日夢であった。

く\*く\*く\*く\*

イブキが到着した時、「イッタンモメン」は今まさに飛び立とうと、水面ギリギリまで浮かび上がって来ていた。

音笛を口に当て、湖畔に突風を巻き起こし、イブキはコバルトブルーに輝く鬼 威吹鬼に変身する。

刹那 「イッタンモメン」の幼体が水面を突き破り天空を舞っ

た。

威吹鬼は“音撃管・烈風”に鬼石を充填し、魔化魍に撃ち込む。軽快な音と共に、鬼石は「イッタンモメン」の細長い体躯に食い込んだ。だが、それだけではほとんど効き目はない。寧ろ、危険を感じて魔化魍はより一層暴れ始める。

「イッタンモメン」は幼体ながら体の半分はある尻尾を鞭のようにしならせ、威吹鬼に襲い掛かった。威吹鬼は体を低く構え、地表を二転三転しながらギリギリで避ける。攻撃の隙を突き、ウエストのバックルから“音撃鳴・鳴風”を取り外した。

それを、音撃管・烈風にセツトする。烈風はたちまち銃モードから音撃モードに姿を変えた。

威吹鬼は魔化魍に向かって立ち、烈風を右手に構え肩の辺りで静止させたのだ。

意識を額の中央に置き、全神経を集中させる。撃ち込んだ鬼石はわずかに発火……フブキにはああ言ったが、数は多ければ多いほど音撃は楽であった。

コンセントレーションが最大まで高まったその時、

「おんげきしゃ音撃射！しつぷういっせん疾風一閃！」

マウスピースに口をつけ、高らかな音が響き掛けた一瞬　滑空状態にあった「イッタンモメン」が威吹鬼目掛けて急降下したのだ。鬼の反射神経で直撃は免れたが、烈風は威吹鬼の手を離れ、水辺から森の入り口付近まで三十メートルは飛ばされた。

「クソッ！」

烈風に駆け寄る威吹鬼。「イッタンモメン」はチャンスとばかり、

湖面に向かって飛び込む！

(ダメだ……また逃げられる……)

走る速度が落ちて、諦めが胸に浮かんだ。

その時。

「出いでよ！ 氷壁ひょうへき！」

フブキは水際に立ち、氷輪を構え突端を湖中に差し込んだ。

瞬しゅんく間に湖面に氷が張り、「イッタンモメン」は氷上に激突する。

「イブキツ！ 今だ」

対岸が見えないほど広い湖面に厚い氷は張れない。薄氷は「イッタンモメン」が再び飛来し飛び込めば、あっさり割れるだろう。

直後、威吹鬼は烈風に飛びついた。

集中はまだ途切れてない。彼はそのまま、最も効果的と思われる一音を選び、数秒間吹き鳴らす。魔化魍の中に納まった鬼石が共鳴して光を帯び、清めの音を増幅して

終つひに、「イッタンモメン」は内部から破壊され、一瞬にして吹き飛んだのであった。



## 六之巻「叫ぶ風」(三)

「フブキさん！ どうでした？」

イブキの問い掛けに首を左右に振る。

「駅まで行ってみたんだけどね。誰もいなかった。無人だから、明日夢くんが降りたかどうか、確認しようがない」

明日夢が到着しない。自宅に連絡もなく、携帯も取らない。

「ベースキャンプに戻るなり『たちばな』から連絡があり、さすがのフブキも顔色が変わった。」

「一応、ルリを走らせました。半径十キロ以内なら四時間程度もあれば……」

すでに日は落ちている。周囲は真つ暗だ。

イブキはDA・ルリオオカミ（瑠璃狼）を明日夢探索に一斉に放った。

「ん。妙に運の良さそうな子だから……大丈夫だとは思っただけだね」

フブキはそう言うと隣の山を見上げる。そこは山があるのかどうかも判らないほど、漆黒の闇に覆われていた。

「まだ、気になりますか？」

「そうだね。どうも……落ち着かない」

答えると同時に、フブキは腰に下げた二枚のDA・アカネタカとハシヨクヒヨウを、フリスビーの要領で放り投げた。鈴の音と共に彼らは姿を変え、闇に消える。

「シヨク、アカネ……頼んだよ」

フブキの小さな声が届いたのか、アカネタカの甲高い声が空に響くのだった。

くくくくくくくく

真っ暗になっても目的地には着かなかった。

ようやく明日夢は自分が完全に迷子になつてること気がつく。時間を確認しようと携帯を手にするが……ハツとしてガツクリ来る。そう、それは随分前に電池切れであった。

日が暮れる寸前、クラスメートの持田ひとみから電話が入ったのだ。

受験を間近に控え、明日夢を心配するひとみはわざと明るく語りかけてくれる。だが、明日夢が返事をする間もなく携帯のバッテリーは切れてしまい……。

「何でだよ。何で、僕だけこんな目に遭わなきゃならないんだよ」  
途方に暮れながら明日夢は木々を伝うように歩いた。杖代わりに途中で拾った太目の杖を持っている。それで体を支えないと、もう立ってるのも辛い。

二月の山は恐ろしく冷える。凍死の可能性が頭に浮かび、迂闊に休憩も出来ない。眠ったらお終いだ、必ずフブキに逢えるはずだ、と自分を叱咤激励する。

その時だった 明日夢の目の前に、突如不審な男女が現れた。

明日夢の全身に、あの雪山で出会ったような感覚が甦る。背中がぞわぞわして、いても経ってもいられず、明日夢は咄嗟に身を翻した。

くくくくくくくく

「フブキさん……」

不意に改まった声でイブキが話しかけた。

「何？」

焚き火のパチパチと言う音が聞こえ、二人の頬を赤く照らした。

明日夢のことは気になるが、出来ることは全部した。後は結果待ちである。焦る心を宥めるように、フブキは殊更こゝろむ冷静に振舞う。

スツとイブキは立ち上がり、焚き火を挟んだ向こうに回った。フブキの正面である。

そして……

「偉そうなことを言って申し訳ありませんでした。おかげで、助かりました」

ひと息に言うと「ありがとうございます」と深く頭を下げたのであった。

イブキの潔さは貴重だ。フブキはそう思っている。これは持つて生まれた気質であろう。フブキが五歳下の後輩を尊重する理由でもあった。

無論、見た目より頑固な性格も否めないが。

案の定、無言のフブキに、

「二度と、あんな醜態を晒さないよう……次のインターバルでは更に鍛えたいと思っています」

それは 次は助けはいらぬ。という意味であろう。

「ねえイブキ。自分で持たなきゃならない荷物はあると思うよ。でも、人に預けられる荷物もあるんじゃないかな？」

フブキは穏やかだがよく通る声で語りかけた。火の中で枝が弾ける大きな音がして、フブキの声に重なる。

「でも僕は」

「シッ」

指を一本立て、フブキは制した。彼女らの真上を何かが舞う。それは焚き火の煙と共に舞い上がった炎にも見えたが……甲高い声がフブキに何かを告げる。

「……まずいな」

一言呟くとフブキは横に置いた氷輪を掴んだ。

「フブキさん？ アカネはなんて」

「悪い。あと頼む」

それだけ言々と深夜の森に向って駆け出し……あつという間にフブキの姿は見えなくなる。

悔しいがイブキには鳴き声だけで意思を通わせるDAはいない。

彼にとつてDAは探索・偵察を兼用した武器の一つに過ぎないからだ。

闇を拭いフブキと入れ替わるように戻ってきた瑠璃色の光を見て、イブキは心を引き締めたのだった。

く\*く\*く\*く\*

雪の森で遭遇した女の化け物は、こんなに素早かっただろうか？

転がるように森を逃げながら、明日夢はそんなことを考えていた。アツと思った瞬間、足を滑らせ、傾斜を転げ落ちる。

数十メートルを転がり、太い木の幹に掴まって立ち上がった時、後方に人影はなかった。

【みいつけた】

明日夢の頭上から声が降ってくる。  
恐る恐る見上げた時、真上の枝に光る二組の目。それは 姫と  
童子であった。

(もう逃げられない)

明日夢は一步も動けず、そのまま座り込んだ。その頭上に童子の  
鎌状の手が振り下るされ……明日夢はきつく目を瞑り

刹那、漆黒に姿を変えたDAハシヨクヒヨウが童子に飛び掛った。  
間髪入れず、明日夢に飛びついたのはフブキだ。数メートルを纏もっれ  
るように転がる。たった今明日夢が居た場所は、童子に次いで襲い  
掛かった姫の鎌が空を切り裂いていた。

「藤倉……えっと、フブキさんっ！」

「ちよっと少年、なんで隣の山？ ひよっとして方向音痴？」

直線で約十キロ、起伏に富んだ真つ暗な森の中を数分で全力疾走  
したのだ。いくらフブキでも息が上がる。

「そこに伏せて！ 良いと言うまで頭は上げるな。鎌で首を飛ばさ  
れるぞっ！」

叫びながらフブキは明日夢と距離を取った。

そして、手首の鈴を鳴らし、額に翳す

目の前にいるのは、魔化魍「カマイタチ」の童子と姫であった。  
フブキが捉えていたのは彼らの気配だったのだ。魔化魍の中でも極  
端に動きの速い彼らは、常にフブキの担当である。童子と姫も好戦  
的で質たちが悪く、なんとベースキャンピングを襲撃してくるくらいだ。

突如舞い起こった猛吹雪は周囲を真っ白に塗り替える。辺りに闇

が戻った時、そこにいたのはプラチナに輝く吹雪鬼であった。

時を措かず二体も怪童子・妖姫へと変身。

二体の手には大きな鎌が付いている。それを使い、桁外れのスピードで吹雪鬼に襲い掛かった。その速さは、変身前とは雲泥の差だ。だが吹雪鬼も負けてはいない。

「出でよつ！ 氷刃！」

怪童子らの動きを瞬時に捉え、白刃が残像を描きながら後を追う。氷の結晶が煌き、見た目は如何にも美しい。

先に動きを止めたのは妖姫のほうであった。目前をよぎるDAにほんの一秒静止する。それが命取りとなった。追いついた吹雪鬼の氷刃に鎌を切断され、返す刀で妖姫の体は真つ二つだ。

次は怪童子である。

妖姫をやられたことで怪童子は攻撃に転じた。そんな中、吹雪鬼はピタツと動きを止め……しかも、目を閉じたのである。

一瞬で集中し聞こえるのは吹雪鬼自身の浅い呼吸音のみ……しかし、それを引き裂く風の音が左後方から聞こえた！

迷うことなく、吹雪鬼は氷刃で左後方を一閃したのである。

怪童子は縦に身を裂かれ……断末魔の悲鳴を上げたのだった。

「フ、フブキさん……」

「まだだっ！」

吹雪鬼が短い言葉で制した直後、明日夢の後方から魔化魍「カマイタチ」が飛び立った。

まだ幼体でかなり小さい。だが幼くても「カマイタチ」らしく低空飛行で素早いのが厄介だ。放っておいてもおそらくは成体にはなれまい、そう思ったが……。万に一つのケースも考えておかねばな

らない。

吹雪鬼は背中に装備された“やだま矢玉”を取り出し、氷輪つがに番え、瞬時に射抜いた。矢玉の先端、やしり鏃になるのが鬼石だ。

「カマイタチ」は警戒を見せ、矢玉を腹に刺したまま空高く舞い上がる。だが逃がさない。吹雪鬼はすぐに“おんげきしん音撃震・つくゆみ銃弓”をセツトし

「おんげきざん音撃斬！  
はじゃめいげん破邪鳴弦！」

「カマイタチ」は奇声を上げ少しでも遠くに逃げようとする。だが、音の届かない場所までは不可能であろう。弦を弾く音が魔化魍に追いついた瞬間、「カマイタチ」は凍りつき四散。

一回深く息を吐き、フブキはフェイスオフの姿を明日夢に見せた。そんなフブキの姿を見て

(やっと会えた……)

胸が熱くなる明日夢だった。

く七之巻「定める師」につづく

## 六之巻「叫ぶ風」(三)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

せっかく弓状の武器を持つてるので、剣以外の使い方も見せてみました。

便利な武器だなあと思っていただけたら幸い(苦笑)

魔化魍はオリジナルです。(後半のS姫童子が作った鎌を啜えた奴は想像しないでね(^^;))

次回、七之巻「定める師」：明日夢のフブキに対する憧憬が決意へと…。魔化魍はオリジナルで「オオムカデ」(原作最終話のロクロクビの鮫顔を取って下さい)。

戸田山くんが初登場です。

では、また来週。皆さまのお越しをお待ちしておりますm( )m



番外編「鬼の弟子」(前書き)

羽 衣石さまへ

本編だと先になりそうなので、番外編(過去編)をフブキ一人称で書いてみました。

フブキが17歳の女子高生だった頃のお話です(笑)

「牛鬼」がご期待に添えてたらいいのですが……

## 番外編「鬼の弟子」

「ザンキさーん。荷物……重いんですけど」

「ああ……だろうな」

「……」

だけかいつ！ ま、こういう人だけどね。うちの師匠は。

DAケース三個をレンタカーに積み替えながら、私、藤倉双葉はひとりごちた。

私たちは今、中国地方の玄関口、岡山市に来ていた。目的地は島根県の出雲市、それで何で岡山で降りたかと言うと、ここに我が“猛士”の中国支部があるからである。

ホントは車で来た方が楽なんだけどね。大荷物だし……でも、弟子の私が十七歳で免許を持ってないから、東京から島根まで師匠が運転って言うのもねえ。申し訳なくって、まだDAケース三個抱えたほうがマシってもんよ。

「遠いとこまでよう来られました。わしが中国支部長の大森です。すみませんねえ。うちは鬼が四人しかおらんで、それが奴にやられて三人じゃけえのお」

立花のおやつさんを倍にしたくらいの人だ。主に横幅が……。これで元鬼って言うんだから、この先、鬼になつて引退してもずっと鍛えていたいなあ、とかしみじみ思う。なれたら、だけど。

「関東支部所属のザンキです。こっちは弟子の藤倉。吉野のほうも忙しいらしく、私が助っ人に来ました。出来る限りのことはやらせて頂きます」

師匠はそう言うと丁寧にお辞儀する。

私も慌てて横で頭を下げた。

「いやあ、こりやまた可愛いお弟子さんじゃのお。お嬢ちゃんも  
う鬼になれるんかい？」

「……いえ。まだです」

「あんまり無理せんとな。可愛い顔に傷でもつけたら大変じゃけえ」  
カンツペキに馬鹿にされてる。中国支部長は大きな声で笑ってる  
し。チラツと師匠のほうを見たけど、こっちは完全にシカトモード  
である。

……ま、こついう人だけど、ね。

くくくくくくくくく

三十分後、中国支部のほうで用意してくれたレンタカーで一路島  
根に向った。山陽自動車道に乗り、岡山自動車道、中国自動車道、  
米子自動車道と経由して最後に山陰自動車道の終点出雲で降りる。  
そこから日御碕ひのみさきの方向へ。全部で一七〇キロ程度なんで一応三時  
間くらいを見越していた。

「ザンキさん、食べます？」

何気に『たちばな』名物きびだんごを、桃太郎の本場・岡山で買  
ったもんで師匠に差し出した。

「いや。お前が食べ」

しばし無言の時が流れ、

「こつちの鬼って大変ですよ。移動範囲が広くて」  
「そつだな」

再び無言の時が流れた。

いや、わかつてはいるのだ。師匠に悪気はない、と。酔うと饒舌

になるのだが、ここで飲まず訳にもいかない。第一、酒にはそれほど強くないし……忘年会とか、運んで帰るのが大変なのである。

「双葉」

「はいっ！」

ぼーっと窓の外を見てたら不意に声を掛けられた。

「お前、弟子になって何年になる？」

「三年ですけど……」

「そうか」

……だけですか？ と聞いてもいいだろうか？

「今回の魔化魍は お前、経験なかったな」

「はい……」

中国支部からの連絡に書いてあったのは、魔化魍「ギユウキ」。古来は牛鬼うしおにとも呼ばれていたらしい。水中に棲息して捕食に陸に上がってくる。体は蜘蛛に似てて、牛とも鬼とも見える角があるという。かなり獯猛で毒を吐くとか……。その毒で中国支部の鬼がやられたのだ。命には別状ないのが不幸中の幸이었다。

「ベースキャンプを張ったらお前はそこで待機だ」

「え？ 待って下さい。鬼にはなれませんがDAくらいは操れます。少なくともフォローくらいは」

「待機だ」

「はい」

確かに、私がついて行こうが行くまいが、ザンキさんには関係ないだろう。でも、姫も童子も残っているというし……。

私は出来る限り気付かれないようにため息をついた。

鬼を志して三年目。中学三年の時にザンキさんの弟子になった。

直接のきっかけは……猛士に協力していた父が魔化魍に殺されたからだ。その六年前には双子の兄も殺されていて、家族を失ったのは

二度目だった。

六歳年上のザンキさんは当時二十歳。鬼になって二年目のまだまだ新人である。そのザンキさんが弟子を取れたのは、やはり宗家の分家筋の出身だからだろう。

鬼は適性が認められると、現役の鬼に弟子入りして基礎を学ぶ。主に師匠から……年に数回は吉野の本部に全国の鬼候補が集められ、鬼の能力や魔化魍データなど基本の知識を習う機会もある。

私たちが師匠に習うことは、大きく分けて三つある。

一つはDAの扱い方。一つは実践での戦い方。そして一番重要なのが、鬼に変身すること、だった。

適性はあるのだから必ず変身出来るはずなのだ。基礎体力は、それぞれ師匠の後について訓練している。だが、変身後の体を扱う術は、変身しなければ学べないし訓練も出来ない。

まず、変身して、そこからが鬼としてのスタートだ。

現時点で最短記録が半年。私と同じ歳でほぼ同じ時期に弟子入りし、一年前に独立した大輔だいすけ……いや、ダンキがそうだ。アイツはやたら変身は早かったけど、コントロールが出来なくて結局独立まで二年掛かった。それでも早いには違いないけど。

平均して一年半、遅くとも二年ちょっとで皆変身出来るようになる。

でも、中には落ちこぼれもいるのだ。三年過ぎて変身出来なかった鬼候補は、“弟子”を下ろされる。継続して猛士に残る場合は、サポーターか内勤に回されるのが慣例だ。

私はもうギリギリのところにいる。

ザンキさんの「待機」って言葉は、もう要らない、に聞こえて……窓の外を見ながら泣きそうになる私だった。

くくくくくくく

その日の夕方、私は一人で日御碕付近の海岸をぶらつく。

ザンキさんはD Aが当たりをつけて戻ったので、出勤したのだ。

もちろん一人で。

「足手まといですか？」

と聞きたいが聞けない。

ザンキさんのことだ。きつとそう思ってたら一言「ああ、そうだな」で終わりそうな気がする。それはちよつとキツイ、マジで凹むかもしれない。

私の傍をD A・ハシヨクヒヨウが走り回っている。

いろんな色に変化できるシヨクは、今は夕陽と同じオレンジ色だ。足が速いのが取り柄で、弟子になって三ヶ月目、“<sup>へんしんきげん</sup>変身鬼弦・音伽<sup>おんか</sup>”と一緒に渡された初めてのD A<sup>フェイスクアニマル</sup>だった。以来、私のパートナーみたいなもんだ。

と、コレもマズインだよねえ。D Aは武器の一つで鬼が扱うんだ、相棒だなんて思うな。と本部に行った時に言われた。そんな甘いことを言ってるから、いつまで経っても変身できないんだ、ってさ。「んなこと言っただってねえ。シヨク……変身できなかつたら、お別れかなあ」

私がそう言つと、シヨクは犬が甘えるような声を上げた。

「ごめんね。落ちこぼれで、さ。師匠にも、無駄な三年過ごさせちゃったな……」

岩の上に佇み、膝を抱えて俯いた瞬間だった。

不意にシヨクが鋭い声を上げる。

「どうしたの？」

嫌な気配に振り向いたとき、そこには見たことのない姫と童子の

姿があった。

彼らの目はぎらぎらと光っている。

【我らを知っておるか】

【我らを知っておるな】

二体は左右から私を囲むように移動しつつ、そんな言葉を投げかけてくる。

私が口を開きかけた瞬間、

「双葉っ！ 何も返すな！」

「え？ ザンキさん」

斬鬼に変身した師匠が音撃武器の“烈雷”を手に岩場を走っていく。

【我らを知っておろう】

【我らの名を答えよ】

「だって、こいつらがギユウキの姫と童子でしょう？」

そう答えた瞬間、二体は妖姫・怪童子へと変身した。そして一気に左右から襲い掛かる。私は武器は持ってないから逃げるしかない。怪童子が口を開き、何かを吐きつけた。おそらくは毒だ。その時、私の前にシヨクが飛び込み、私を庇ってくれた。吐きつけた黄色い液体はD Aの表面を溶かしていく。

「シヨク！」

私は半分溶けたD Aを拾い、ダッシュでその場から逃げようとする。だが、その目の前に妖姫が口を開いて待ち構えていた。しまった！ と目を瞑った瞬間、

「目を閉じるな！ 諦めるのは死んでからだ！」

師匠の言葉に、どうせダメなら、と私は妖姫に体当たりした。――

瞬怯んだ妖姫を、駆けつけた師匠が烈雷で一刀両断にする。

「奴らは獲物が返事をしたら、海に引き込み魔化魍の餌にするんだ」  
そ、それは早く教えておいて下さい師匠！

そう叫びたいのをグツと我慢した。

「下がってる！」

我が師匠、グリーンメタリックに輝く鬼は、口を開き襲い掛かる怪童子を烈雷で一閃した。そしてすぐさま、右足で回し蹴りをきめる。怪童子は雷撃を帯びた蹴りに数十メートル後方に飛ばされ、叫び声を上げて四散した。

その時、海からゆつくりと這い上がってくる黒い影が 魔化魍

「ギユウキ」であった。

予想していたのよりかなり大きい。バケガニ並の大きさだ。成体に近いのかと思ったら、私は相当距離があるのに、思わず後ずさりしてしまう。

だが、師匠は喊声かんせいを上げ敵を威嚇すると、一気に飛び掛った。

烈雷で「ギユウキ」の足を切断して回る。海に逃げ込めぬようにするためだろう。でもそれは、毒を喰らう可能性が高くなる。案の定「ギユウキ」は口を開き、師匠に向って大量の毒液を吐きつけた。  
「ザンキさんっ！」

素早く避けたがいくらかは体に掛かり、それはわずかだが鬼の体を溶かし始める。しかし、毒は一度吐いたら次までは多少時間が掛かるみたいだ。師匠はそこを突いた。

動けないのをいいことに背中に飛び乗ったのだ。それで「ギユウキ」の死角を取れる。

背中のいささか硬い部分を師匠は力任せに突き破った。烈雷の先端を押し込み、ベルトのバックルから“音撃震おんげきしん・雷轟らいこう”を外した。  
そのまま、烈雷にセットする。

「おんげきしん 音撃斬！ らいでんげきしん 雷電激震！」



エレキギターを模した烈雷の弦を爪弾いた。魔化魍に最も効果的な音を探し出し音撃する。手ごたえがあったのか、師匠は長く一つの音を海岸に響かせた。数秒後、「ギユウキ」は見事、日御碕の海辺に散ったのだった。

くわくわくわくわく

「すみませんでしたっ」

「何を謝ってるんだ？」

いつものことだけど……。不機嫌そうに見えるだけで、多分怒ってないんだろうな、と思う。とはいえ、やっぱり謝るしかないでしょう。

「ベースキャンプで待機と言われたのに、勝手に海の近くまで行って……奴ら餌にされそうになって」

「……」

「それに、DAに気を取られて逃げるタイミングを外してしまっ

鬼の中には嫌がる人もいるけど、長く使つとDAにも意思や感情が生まれて魂が宿る。それは仮に器が壊れても、鬼の力で別のDAに移すことが可能なのだ。でも……

「こないだ吉野に行った時、お前、何を言われた？」

私はドキツとした。でも、師匠には隠し事は出来ない。してもすぐにバレる自信があった。

「……DAは武器だから、執着するな、と」

「奴だな。……他には？」

「今月いっぱいの変身出来なかつたら……そろそろ身の振り方を考

えたほうがいい、と」

気まずい沈黙が流れる。

私は、とりあえず黙々とDAの回収作業を続けた。

「す、すみませんでした。その、三年も面倒見てもらって、結局、鬼になれなくて……」

「双葉、さっき俺の言った言葉、もう忘れたのか？」

「え？」

何か言われたっけ？ そんな間の抜けたことを考えてた。

「お前は生きてて、まだ十七だ。諦めるには早すぎるんじゃないのか？ ん？」

「でもっ！ でも吉野が」

「お前の師匠は誰だ？」

「……ザンキさんです」

「三年は目処めどで規則じゃない。大丈夫だ、俺が鬼にしてやる」  
それは三年前にも言われた言葉であった。

女の鬼は宗家に繋がる血筋ばかりで、私はある意味イレギュラーなのだ。しかも、兄のスペアに過ぎない……と自分で思っている。『双葉』と名付けられたのも、確信ではなく推測だと言われたし。本当は、適性がないのかも知れないと不安が付き纏っていた。

ザンキさんは優しい。それに強いし、カッコイイし、カンペキだ。弟子の欲目だけど……。

足を引っ張っている自分が情けなかった。泣くまいと思っても、DAの上に雫が落ちる。

「……十年、経ってもダメかも……知れませんか」

「その台詞は十年頑張ってから言え」

「……はい」

「お前はお前だ。機械なしにDAのメッセージを読み取る力は俺以上だ。これからも大事にしてやれ」

「はいっ！」

その四ヶ月後、十八歳になってすぐ、私は猛吹雪の中で変身した訳だけど……。その時はめていたのは師匠から貰った音伽ではなく、四個の鈴がついた金剛だった。

くわくわくわくわく

### 八年後

「あ！ ザンキさん、こないだ久しぶりにギユウキが出たんですよ。単<sup>びん</sup>独でやり合っただのは初めてでしたね」

一応、暇を見つけて見舞いには来ている。師匠が入院するのは、五年前に膝をやった時以来だし……。ああ、嫌なことを思い出しちゃった。自己嫌悪に陥るんでこれ以上は止めとこう。

「ギユウキ……」

「……」

ボケる歳じゃないでしょうが。と心の中で突っ込みを入れる。

「えっと、日御碕まで出張して」

「ああ……お前が、鬼になれないとベソを掻いてた頃か」  
いらんコトまで思い出さなくていいってば！

「ええっ！ フブキさんにそんな頃があったんっスか？」

金魚のフンのように師匠に付き纏<sup>おとつた</sup>う、弟弟子の戸田山が妙に嬉しそうな声をあげる。

「馬鹿正直に返事して襲われたりしなかつただろうな？」

「ちよ、ちよっと師匠」

「あの時は、ギユウキを見て腰を抜かしてたんじゃないか？」

さすがに、壁に立て掛けてある烈雷でどついてやるうかと思っ  
たが……。

「それが立派になったもんだ。……戸田山、しっかりフブキを見習  
うんだぞ」

「はいっ！ 一生懸命頑張ります！」  
そう来るか。

「はいはい。ちゃんと面倒みますよ。ザンキさんも無理なさらず  
お歳”なんだから、ゆっくり休んで下さいね」  
これくらいの嫌味は許されるだろう。

「ああ、そう言えば、戸田山はまだフェイスオフが出来ないんだ。  
フブキ、確かお前も……」

「ザンキさんっ！」  
くそお！ それを引っ張り出されたら……何年経っても師匠には  
逆らえないじゃない！ 諦めて全面降伏すると 私が憧れたヒー  
ローは、ベッドの上でニヤリとしてるし。

……ま、こっという人なただけど、ね。

番外編「鬼の弟子」(後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

ラスト辺りは来週の予告かな？(苦笑)

## 七之巻「定める師」(一)

東京都立城南高等学校 入学試験合格発表当日。

ひとみらが次々と喜びの声をあげる中、明日夢だけが真剣な表情でまだ数字を追っている。しかし、次の瞬間、

「あつた！ あつた！ 受かった！ やったー！」

その合格は明日夢にとって特別な意味を持つのであった。

くくくくくくくく

三週間前、明日夢は筑波連山の山中でフブキに助けられた。

そのまま、イブキの待つベースキャンプに戻り、母・郁子と『たちばな』に無事の一報を入れ、全員胸を撫で下ろしたのだった。

「もう、びっくりしたよ、明日夢くん。でも、どうして隣の山に？」

「え？ えつと、降りる駅を間違えて……それで」

まさか寝過ごした上に方向まで間違えました、とは言えず、明日夢は言葉を濁した。

そしてイブキはそんな明日夢に“猛士”のこと、“鬼”や“魔化魍”の存在を語ったのである。

「じゃ、僕もフブキさんやイブキさんみたいに、“鬼”に変身出来るってことですか？」

「ああ、そうだよ。もちろん厳しいトレーニングはあるけど、コツさえ掴めば年齢や性別、体格も関係ない。ああ、言ってなかったっけ？ 僕の弟子は明日夢くんと同じ歳の女の子なんだ」

その言葉に明日夢は妙に元氣付けられる。

ただ、ひとつ不安があるとすれば、それは……一度もフブキが口を開かないことだった。

三人の前で焚き火は赤く燃え盛り、パチパチという音が絶え間なく聞こえた。明日夢はその炎に照らされながら、フブキの横顔をチラチラ覗き見る。

フブキの興味を惹きたいという気持ちもあつた。深く考えず口にしたことを、明日夢はすぐに後悔する羽目になる。

「あつ、じゃあ、僕も“猛士”に入ろうかな。だって、人の役に立つ仕事ですよ？ それも、限られた人間にしか出来ないって言うんなら……僕」

「無理だよ」

フブキが口を開き、言ったのは一言だった。明日夢は一瞬で青褪める。

「フブキさん！ そんな、決め付けなくても……。試用期間もあるんだし、彼に興味があるって言うなら試してみたって」

「城南高校を受けるとか言っただけじゃなかったっけ？」

「……はい」

「あのさ……鬼の道は、逃げ道に選べるような楽な道じゃない」

その言葉はズシンと明日夢の胸に響いた。フブキの視線を受けるのが辛い。何もかも見透かされているようで、明日夢は居た堪れなくなる。

「フブキさん、それは……」

イブキも察してはいたのだ。だが、適性を持つ明日夢を囲い込みたい一心だった。

「イブキ、誰もがあきらまやあんだのように、使命感を持って生きてる訳じゃない。少年には自分で人生を選ぶ義務と権利がある。テレビや映画で見る、ヒーローに対する憧憬をくすぐって、猛士に引き込むような真似はするべきじゃない」

瞬時にイブキの頬に赤みが差した。それは、炎の色だけではないだろう。辛辣なフブキの忠告にイブキは無言で立ち上がる。

数分後、“水冷4ストロークOH C 3バルブV型2気筒、総排気量745cc”という大型バイク“竜巻”のエンジン音が闇を引き裂いた。

フブキに助けられ、頭を下げたものの……。度重なる忠告に、二十歳の青年のプライドは、甚く傷つけられたようだ。

「あ、あの……あの……」

明日夢はそれが自分のせいだと思い、オロオロしている。

「ああ、気にしなくていいよ。私たちは師匠や先輩には基本的に逆らえないんだ。でも……ま、仕事も終わってるしね、職場放棄じゃないから。アイツもしばらく頭を冷やしたほうがいい」

「はあ……」

フブキとイブキは根本的にお互いを信頼し合っている。

だからこそ、フブキも遠慮なく口にするし、イブキも怒れるのだ。それはイブキがフブキに甘えている証拠でもあった。

しかし、部外者の明日夢には二人が大喧嘩をして決裂したように見え、どうにも落ち着かない。

「受験勉強、上手く行ってないの？」

「えっ？ えっと、えっと……まあ……はい」

「これって言ってなかったかな？ 城南って私の母校でもある」

「ええっ!？」

「中学三年の時、鬼の弟子になって……高校三年間、勉強と修行を両立させた。卒業する直前に、鬼になれたから……大学には行かなかったけど。猛士の中で城南は多いよ。イブキの弟子も城南を受けるみたいだし」

「……そうなんですか」



明日夢は感慨深そうに頷いた。

「ねえ、明日夢くん。鬼は何があっても、どんな時も、逃げられないんだよ。土壇場で、君が逃げない人間だと証明して見せてよ。その時は、無理だつて言葉を撤回して、君の質問に何でも答える。…それで、どう?。」

明日夢にとって、その言葉は試練に聞こえた。

でも、乗り越えなければフブキの傍に居る資格は得られない。明日夢は十五年の人生で、最も真剣に答えた。

「はいっ、判りました!。」

くくくくくくくく

「なんだあ、三週間も経つのに、まだ仲直りしてないのかい?。」

勢地郎は『たちばな』の地下でフブキに向かって話していた。

イブキとの一件である。魔化魍の出現が増え、鬼のローテーションは厳しくなる一方なのに、鬼のなり手が少な過ぎるのだ。その現状を考え、打開に必死な吉野とイブキの考えが重なっても、仕方ないところではあった。

「顔を合わす機会がないだけですよ。次に会う時はイブキのことだ、きつと何もなかったような顔をしていますっつて。」

フブキは苦笑しながらそんな風に言う。

「まあ、そんなもんだらうね……彼なら。」

勢地郎も同意するところを見ると、以前から“そんなもん”らしい。それに、今のフブキに課せられた問題はイブキではなかった。

「俺、ザンキさん以外の鬼と出動するのは初めてっス！ よろしく  
お願いします、フブキ先輩！！ 俺、がんばるっス！」

テーブルを挟んで真向かいに座る男……鬼にはちよつと良さそう  
なガタイだ。顔は人懐こく、満面の笑みを浮かべてフブキを見てい  
る。

彼の名を戸田山登己蔵ただやまとみぞうという。ザンキの弟子で、フブキにとって  
は弟弟子にあたる。

フブキは今回の出動に、サポーターではなく、彼を同行するよう  
に言われたところであった。

七之巻「定める師」(一)(後書き)

お待たせしましたm( )m  
七之巻は全三話です。

## 七之巻「定める師」(二)

「え？ 戸田山を、私がですか？」  
出動の電話が掛かり、『たちばな』に来るなり勢地郎から言われたのだった。

「うん。ザンキさんの希望でね。戸田山くんはもう独立寸前で変身も自在だそうだ。そんな彼を何ヶ月も病院に縛り付ける訳にはいかない、少しでも自分の抜けた穴を埋められたら……ってことらしいね」

「は、はあ」

椅子に座っていた戸田山は、フブキの姿を見るなり直立不動になる。

「ザンキさんから、フブキさんの言うことをしっかり聞いて、少しでも独立に近づけるように頑張れと言われて来ましたっ！ 烈雷も預かって来てます！ よろしくお願い致しますっ！！」

声はどんどん大きくなり、フブキと勢地郎は顔をしかめ、テーブルの向こうでパソコンを叩いていた日菜佳は、思わず耳を塞いだ。  
「わ、判った。判ったから。ちよつとはポリユームを落とそうよ。

日菜佳も困ってるよ」

「あ、す、すみませんっ！」

と、また大声で謝罪する。

「私は大丈夫ですから……気にしないで下さい。ね、戸田山さん」  
どことなく、戸田山の名前の後に、ハートマークが付きそうな日菜佳の声だ。勢地郎は更に顔をしかめ、軽く咳払いをすると、話を元に戻した。

「場所は奥武蔵だ。魔化魍の予測は……」

「あ、えつと、魔化魍は才オムカデだと思います。一応、八割の確

率でそう出てるんですが」

「日菜佳も精一杯やってくれてるんだがね。最近は、どうも気温や条件だけじゃ絞り辛くてねえ」

自信のなさそうな日菜佳を父親の勢地郎がフォローする。

「オオムカデは確か……毒針が厄介な奴でしたっけ。後、かなりでかくなるんですよ。幼体でも五メートル近くあつた気がする」

「そうです！ あのサソリみたいなお尻の毒針！ しかも発射してきて数時間経つたら新しいのが出て来るんですよ。姫と童子も毒針を持っていますから……あれで動けなくして餌を調達するんです。戸田さん、充分に気をつけて下さいね」

「どうやら、日菜佳が心配なのはフブキではなく戸田山のほうらしい。」

「ねえ、戸田山。あんたオオムカデの経験は？」

「あ、はいっ！ 一度だけあります！ 随分前ですけど……。それに、その時はベースキャンプで待っていただけで……。魔化魍は見たこともないっす」

威勢良く答えたものの、返事は尻すぼみだ。

「うーん。それじゃ、ゼロに等しいってことだよな」

「す、すんません」

師匠の希望であるなら、フブキに逆らう理由はない。師匠が役に立つと言つなら役に立つんだろうし、独立寸前なら尚のことだ。戸田山はフブキが沈黙したままなのが不安なようだ。まるで捨てられそうな子犬の目で、フブキを見つめている。

「運転頼もつか。慣れてるほうがいいよね？ 雷神を出してもいいですか？」

フブキの専用車両は“雪花<sup>せいか</sup>”という。それと同じオフロードタイプの四駆で、ザンキの専用車両は名称を“雷神<sup>らいじん</sup>”と言った。違うの

は色だけで、“雷神”はグリーンとシルバーのツートンである。  
ちなみに鬼それぞれに車両があり、イブキにも“風神”<sup>ふうしん</sup>が支給されているがほとんど使用していない。彼は、弟子が一緒の時も“竜巻”を好んで使っている。移動に手間が掛からず、小回りが利くのが良いらしい。

「はいつ！ 現役最強と言われる“鈴の鬼”のフブキさんに学べるなんて、最高っス！」

「まあ、滅多にないことだ。フブキくんもたまにはいいだろう」

「はあ……」

凹んだかに見えてもすぐに立ち直っている。この単純さと明快さは貴重かも知れない。弟弟子の長所を必死で探すフブキに、

「フブキさんっ！ 戸田山さんのこと、くれぐれもよろしくお願い致しますね。守ってあげて下さいねっ！！」

両手を掴み必死で頼む日菜佳であった。

くくくくくくくく

“雷神”の車中。グリーンの塗装とは反して、内部は所々赤が混ざっている。聞くところによると、カラーを間違えて赤で発注されていたらしい。

ザンキの変身後の色は深い緑だ。

本来、弟子は師匠と同じフォーム・同系色に変身する。理由は簡単だ。それぞれが“鬼”として思い描いた姿に変身するからである。弟子にとって“鬼”とは師匠そのものであった。フブキもフォームはザンキに似ている。角が一本のところも……。おそらくは、この戸田山も一本角の鬼に変身するのだろう。それも緑色であることは間違いない。

「ねえ、戸田山」

「はいっ！ なんっスか？」

「あんたさ、私より三つ上だよな？」

「今年二十八っス」

「警官なんてこのご時世、安定した仕事に就いてたのに、なんで猛士に入ったの？」

戸田山がザンキに弟子入りしたのはちょうど二年前だ。彼はちょうどどこから向う、武蔵のほうの駐在所に詰める警官だった。同僚の警官を目の前で魔化魍に殺され、彼も危うく殺されそうになったところをザンキに助けられた。ザンキの持つ音伽の音色を聞いた彼は、自分に鬼の適性があることを知り、弟子入りしたのだった。

しかし、当時二十六歳だ。正直、人助けに人生の軌道を修正するには遅い年齢だろう。

「そんなフブキさん、答えは決まっていますよ！ 師匠に出会ったからです」

「……だけ？」

「はいっ！」

小気味好い返事ではあるが、ここまでシンプルなのはコイツくらいなものだろう、とフブキは考える。聞く相手を間違ったかも知れない。

だが……

(師匠に出会ったから……か)

もし、明日夢が鬼の弟子になれば、あの少年はどんな色の鬼に変身するのだろうか？ そんな、妙な考えがフブキの胸を掠める。

慌てて頭を振り、雑念を払うフブキであった。

くわくわくわくわく

奥武蔵の山中、行方不明の登山客が出たため、自警団が登山道を見回っていた。

二人の自警団メンバーは何かを感じているのか、どうも落ち着かない様子だ。下り坂を先へ先へと急ぐ。その時だ。

道を塞ぐ人影が……童子だった。

「な、なにもんだ！」

前に立つ男が怒鳴った瞬間、彼の真後ろから悲鳴が上がった。

道の後方には、もう一人の不気味な人型の化け物が立っていた。

姫である。姫は触手を伸ばし、後方を歩いていた自警団のメンバーに突き刺していた。

刺された男はその場に倒れこみ、痙攣し始める。

「おいっ！ おい、しっかりしろ」

その瞬間、もう一人の男の背に童子から伸びた触手が突き刺さる。

今にも息絶えそうな二人の人間を引き摺り、童子と姫は森の中に消えたのだった。



七之巻「定める師」(二)(後書き)

(三)は暫くお待ちください。

### 七之巻「定める師」(三)

「やったねー！ おめでとー明日夢くん!!」

「おめでとー、良かったわね。フブキも喜ぶわよ」

日菜佳と香須実に祝福され、明日夢も有頂天だ。

母には電話で報告し、学校を出ると明日夢は即行で甘味処『ちばな』へ向った。フブキに合格したことを伝えようと思ったのだが、フブキは出勤した後であった。

「あ！ 携帯があるじゃないですか。それで、フブキさんに連絡取りましようよ。ね、明日夢くん」

日菜佳が携帯を取り出しフブキに掛けようとする。

「待って、あの、ちょっと待って下さい。僕……フブキさんには直接、顔を見て伝えたいんです」

「あー、でも今日はちょっと無理だと思いますよ」

「すみません……でも」

そんな明日夢の声に、横で見ていた香須実が日菜佳の携帯をスツと取り上げ、パタンと閉じた。

「え、え、姉上？」

「ねえ、明日夢くん。今から行ってみる？」

香須実は明日夢を真正面から見つめ、そんなことを言い出した。

「行くなってひょっとして」

「そう。奥武蔵なんだけどね、ちょっと遠いから、今日中には帰れなくなるけど」

明日夢はすぐには返事が出来なかった。この間も現場に顔を出して、フブキに助けて貰ったばかりだ。もしかた何か失敗して、今度こそフブキを怒らせたなら……二度と来るなって言われるかも知れない。

明日夢は正直に、香須実にそのことを伝える。だが、  
「じゃあさ。フブキはあなたに二度と現場には来るなって言った？」  
慎重にフブキに言われたことを思い出すが、そんなことは一言も  
言われなかった。

「フブキはね、何を言っても、されても怒らない。それに、誰かを  
助けることが、迷惑だなんて思ったりしない」

香須実の言葉が明日夢の胸にズンと響いた。それは、信じる強さ  
の違いに気付いたからである。

自分はフブキを信じきれないのだろうか？

人を信じることに、自信や勇気があることを、明日夢はわずかず  
つだが学びつつあった。

「ほらっ！ どうするの？」

「えっと……ええっと」

「迷わないっ！ 迷ってる間に魔化魍の餌になるわよ。さっさと決  
めるー！」

「は、はいっ、行きます」

「よろしい」

日菜佳はコトの成り行きが理解出来ず、目を丸くしている。

「日菜佳、“雪花”を出すから、父さんにそう言っておいて」

それだけ言うと、香須実は明日夢を連れて、『たちばな』を飛び  
出したのだった。

くくくくくくくくく

DAアカネタカ・ルリオオカミ・リョクオオザル（緑大猿）……  
奥武蔵の複雑な山中を、それぞれが指示された場所を目指して駆け

抜ける。

そのうちの一体が目的のモノを見つけると、大急ぎでベースキャンプに駆け戻るのであった。

数分後、姫と童子を追跡中のDARIヨクオオザルの前に、童子が立ちはだかる。仲間をフォローしようと飛び掛るDARLりを、童子はアツサリと叩き落とした。一体、また一体と破壊されて行く。

しかし、次の瞬間、フブキが童子の前に滑り込んだ。素手で童子の攻撃を受け、蹴り飛ばす。

「なにオイタしてるのかな？　うちの子たちを苛めると、後が怖いわよ」

【……】

【……】

「相変わらず、無口だよね……まあ、五月蠅いのも御免だけど」

童子と姫はフブキから離れた。両者は間合いを計りつつ、妖姫と怪童子に変身する。すかさず、フブキも吹雪鬼に変身。白い霧が晴れた瞬間、なんと吹雪鬼の眼前に妖姫がいた。

氷輪を構える間もなく襲い掛かれる。だが、妖姫はすれ違い様先端に毒針の付いた触手を、鞭むちのように撓しならせ、吹雪鬼の手から氷輪を叩き落とした。

「チツ！」

軽い舌打ちと共に、氷輪に飛びつこうとするが　妖姫の触手が矛先を変え、吹雪鬼に向って突き進んできた。　武器にこだわれば隙が出来る。そう判断した吹雪鬼は素手で構え直した。

そのまま、腰を捻りつつ踏み込む。回し蹴りで触手を払った後、一気に妖姫の間合いに飛び込んだ。妖姫の突きを左腕で受け、右拳を腹に叩き込む。一瞬で妖姫の動きが止まる。吹雪鬼の右拳からは

鬼爪が……。

妖姫は腹部から凍りつき　次に吹雪鬼が放った横蹴りで瞬く間に粉碎。

だが、息つく暇もない。吹雪鬼の背後から空を切り裂く音が。吹雪鬼はそのまま地面を転がった。そして、氷輪に飛びつく。

「氷刃！」

吹雪鬼は叫びながら氷輪で後方を薙ぎ払う　間一髪、形を成した氷の刃は、怪童子の触手を切断した。

緑の体液を撒き散らしながら、怪童子は窮鼠となり吹雪鬼に飛び掛った。闇雲に攻撃を仕掛け、吹雪鬼を崖つぶちまで追い詰める。だが、ぎりぎりの所で吹雪鬼は氷輪を構えた。

三月初め、陽が沈み、奥武蔵の山中を吹き抜ける風はかなり冷たい。雪山ほど楽ではないが、吹雪鬼は外気温を味方につけ、集中した力を一気に氷刃に注ぎ込む。氷の刃は倍もの厚さとなり、それは大刀さながらのパワーで怪童子を真つ二つに切断した。

刹那　怪童子が砕け散る寸前、吹雪鬼の左肩を針状の物体が貫いた！

一滴、二滴……夜の帳が下りつつある森の地面に、黒い染みが滴り落ちる。吹雪鬼の身体を覆い隠す巨大な影。

振り返った吹雪鬼の目に映ったのは、毒針を放った後、牙を剥き襲い掛かる　魔化魍「オオムカデ」であった。

くくくくくくくくく

鬼たちがベースキャンプを張る場所は毎回ほぼ決まっていた。

この奥武蔵なら、香須実も何度となく足を運んでいる。色んな鬼達をサポートするので、相当な回数であろう。香須実がいつもの場所に“雪花”で到着した時、そこは“雷神”が陣取っていた。

『うん、うん、ゴメン。本当にゴメンってば。うん、判ったよ。迷惑なんか掛けないよ。うん、じゃあね』

明日夢は前回の失敗を反省して、母・郁子に連絡を入れたのだった。母子家庭の事情もあって、放任主義の郁子ではあるが……今夜ばかりはご馳走を用意して待っていた。

「合格祝いなんだから、明日ちゃんと食べてよ」という母を、必死で宥める明日夢であった。

香須実は、車から降りながら、

「お母さんに悪いことしちゃったね。私もウツカリしてたわ」

「いえ、いいんです。僕がどうしてもフブキさんに会いたかったんだから」

母と話してる時は、罪悪感を感じていた明日夢だが……。電話を切った瞬間、心はずでにフブキのことで一杯であった。ひよっとしたら、また戦闘シーンが見れるかもしれない。そう思うだけで胸がわくわくする。

「あれ？ 香須実さーん。なんでここに……。あ、自分が何か忘れ物でもしたんでしょうか？」

“雪花”で到着した香須実を見つけ、戸田山は飛んでくる。

「フブキは？」

「出動されました！」

「されました、って……。あ、あなた、留守番なの？」

香須実は呆れ顔だ。それもそうだろう、ベースキャンプを設置して留守番するだけならサポーターでも充分である。

「フブキさんに来るなって言われたら……自分にはどうしようもないって言うか……あの」

ようやく、戸田山は明日夢の存在に気付いたらしい。

香須実は簡単に、明日夢の置かれている状況を説明した。正式な鬼でない戸田山は会議には当然参加出来ない。ザンキはあまり語るほうではないので、明日夢のことは初耳だった。

「へえ〜。自分も師匠に助けってもらって、鬼の弟子になりました！ 明日夢くんも頑張って下さい！」

「あ、あの、僕はまだ弟子ってわけじゃ……」

「自分はフブキさんの弟子っす。フブキさんは女性だけど、最強の鬼なんですよね〜。憧れます。せっかく身近で戦闘が見られると思っただのになあ」

「僕、見たことあります。あ、助けてもらった時じゃなくて、この間も……」

妙に馬が合うのか、明日夢と戸田山はフブキについて熱く語り合っている。

それを横目で見つつ、香須実は立ち上がった。戦って戻って来るフブキのために、熱いコーヒーを淹れておこう。そう思って、やかんを火に掛けるのだった。

〜八之巻「響く声」につづく〜

七之巻「定める師」(三)(後書き)

お待たせしました。

と、言いつつ、吹雪鬼がとんでもないトコで終わってますが(^^);

戸田山<sup>ヒロキ</sup>は、ほぼ原作まんまのキャラです、いや、他に書きようがない、というか(苦笑)

最強の割によくピンチに陥る吹雪鬼ですが…完全無欠ではなく、どんな状況でも勝利に持ち込むから最強ってことで、よろしくお願いします。

次回、八之巻「響く声」…対オオムカデ戦の決着です。フブキの怪我の具合は？ 戸田山は変身出来るのか？ 明日夢はフブキに何を伝えたいのか…といった感じで。

では、また来週(ホントか?)。皆さまのお越しをお待ちしておりますm( )m



## 八之巻「響く声」(一)

東京都立城南高等学校 入学試験合格発表当日。

午前中は大勢の受験生で詰め掛けたその場所も、今は陽が傾き、人も疎ら<sup>まばら</sup>であった。教師であろうか、正門の横に置かれた『発表掲示板はこちら』の看板を外し、片付け始める。

門の横には制服姿の一人の少女が……。

「君、受験生？ 気を落とさないようにね」

その男性教師は、暗い表情で俯く少女を見てどうやら勘違いしたらしい。少女は浅く微笑むと、

「ありがとうございます。でも、受かりました。春からお世話になります」

「そうか、それは良かったね」

その時、一台の大型バイクが交差点を曲がり近づいてくる。

「ああ……兄が迎えに来てくれました」

そう言っただけで会釈をして少女 天美あきはイブキの元に駆けて行った。

「無事合格しました。ご迷惑をお掛けしました」

「いや、おめでとっ」

小柄でショートカット、柔和で儂<sup>はかま</sup>げな印象を振り払うかのようなキツイ口調と俊敏な動き。意思の強い眼光を放つあきは、明日夢に携帯を無言でつき返した、いつぞやの少女であった。

あきは師匠に対しても、ニコリともせず要点のみを伝える。イブキは頑張って笑うのだが……どうにも空回りだ。

その時、イブキは視線を感じてヘルメットを脱ぎ正門の辺りを見回した。すると、さっきの教師がまだこちらを見ている。

「あきら……あれは？」

「先生みたいです。イブキさんを兄だと説明しました」  
「そう」

あきらは振り向き、もう一度教師に頭を下げた。同じようにイブキもニツコリ微笑んで会釈する。教師はようやく安心したのか、門の中に消えて行くのだった。

「イブキさん、今から出動ですか？」

「うん。あきらを家に送り届けてから……」

「いえ、このままで構いません。着替えはカバンに入れてますから」  
「でも疲れてるだろ？ 戻ってご両親に合格を伝えた方が」

その瞬間、あきらの表情は一層険しくなる。

「今の私に両親に報告することは一つもありません。一分一秒でも早く鬼にならなければ……」

そんなに焦っても鬼にはなれないよ。

イブキはその言葉を飲み込む。すでに何度となく口にしては撥ねつけられて来たのだ。これ以上は無駄というものだろう。

(フブキさんなら、そんなことはない、と言っただろうな)

イブキの胸の奥で、何かがちクリと痛んだ。

「判った。じゃ、行こうか」

「はい」

タンDEM仕様の“竜巻”に乗り、茜色あかねいろの太陽の方角に、二人は走り去るのだった。

くくくくくくくく

甘味処『たちばな』の暖簾のれんを下ろしながら、日菜佳は父・勢地郎

の質問に答えていた。

「ですから！ 私じゃないんですってば。姉上が明日夢くんを引っ張って、奥武蔵まで行っちゃったんですからあ」

「それで、今回はちゃんと着いたんだね。連絡は確かにあったんだろっね？」

「はいはい。ありましたっ！」

つい先日、明日夢が迷子になり、間一髪フブキが助けたばかりである。そのことには勢地郎も責任を感じていた。だが、フブキたちと会い、猛士や鬼についても話を聞き、感触は良かったとイブキから報告を受けている。となれば、これ以上フブキに近づけても良いことにならない。

「全く、香須実は何を考えてるんだ？ これ以上フブキくんには近づけるなと言ったはずなんだがなあ」

「やっぱり、ダメなんですかね？ なんだか明日夢くんはフブキさんの……」

日菜佳は途中まで言って口を閉じる。

「吉野の決定だからねえ。“鈴の鬼”は弟子を取ってはならない、ってね」

く\*く\*く\*く\*

まさか、高校に合格した夜、奥武蔵の山中に張られたテントの中で眠ることになるとは……。

彼らに吹雪鬼の窮状など知る由もなく。遅くなるかも、と言われて、明日夢はひとりテントの中で仮眠を取ることにしたのだった。

「……おかしいっていつてるじゃない！」

「でも……自分は……」

話し声にハッと明日夢は目を覚ました。時計を見ると深夜の一時を回ったところだ。

「もういいわっ！ 私が行く！」

「香須実さん、そんな無茶言わないで下さい」

最初はフブキが帰って来たのかと思った。だが、それにしても様子がおかしい。そつと、テントから顔を出すと、外では香須実と戸田山が言い争っていた。

「あの……おはようございます。あの、フブキさんは？」

香須実はイライラした素振り腕を組み、足で地面を叩いている。戸田山のほうが申し訳なさそうに、

「フブキさんのD Aアカネタカは戻ってきたんですが、魔化魍の情報だけで……」

「え？ それって」

「だから、おかしいって言ってるの！ もう、出勤して六時間経つんでしょ？ あり得ないわ、こんなこと。一刻も早く探しに行かないと」

「だから無茶つスよ。こんな深夜の森に入るなんて。香須実さんを行かせるわけには」

「じゃあ、あんたが行きなさいよ！ 半人前でも鬼に変身出来るんでしょ？ 烈雷だってあるんだから」

テーブルの横に立てかけてあるギターのようなものを指差し、香須実は言った。どうやら、それが戸田山にとって、フブキの持つ“氷輪”にあたる武器らしい。

「だから、さつきから言うように、弟子である自分は師匠の命令に

逆らえません。今は、フブキさんが師匠の代理で……待機と命令されてるんです。もし、自分が戻らなかつたら、夜明けを待って山を下りろ、と」

戸田山は泣くよう言う。

「じゃあ、フブキじゃなくて、これがザンキさんなら、あなたは黙って山を下りれるのっ?」

「それは……」

言葉に詰まる戸田山に、思い切り大きなため息をぶつけて香須実は乗ってきた“雪花”から、登山ナイフを取り出した。腰のベルトに装着して森に足を向ける。

「待って下さい。ダメですってば!」

「じゃあ、どうすんのよっ!」

「あの……そのディスクアニマルっていうのに、探して貰うって言うのは……なしですか?」

明日夢の言葉を受けて、戸田山は自ら所有するDA三枚を森に放った。

「これも動かしたほうがいいんじゃない? あ、せつかくあるんだし、勿体ないっていうか」

フブキが所有するDAが大量に戻って来ている。明日夢は当然のようにそれらを指差して言ったが……。

「す、すみませんっ! 自分にはまだ、ザンキさん以外のDAを動かすことは、ちょっと……出来ないっていうか」

必死で頭を下げる戸田山だったが、香須実の不安を孕んだ双眸は、  
深淵たる闇に飲み込まれた森をジッと見つめるだけであった。

八之巻「響く声」(一)(後書き)

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

出だしが七之巻と同じにしてみました(笑)

八之巻も全三話の予定です。

(一)(二)は一緒にあげます、(三)のUPは少し遅れるかも…

## 八之巻「響く声」(二)

薄明はくめいに東の空が白々としてくる。

もう数分のうちに太陽の欠片が顔を見せるであろう。フブキはまだ戻らなかつた。

あれから、三人は一睡もせず、フブキの身を案じていた。夜が明けたら『たちばな』に連絡を入れると香須実は言う。

「じゃあ、僕……夜が明けたらフブキさんを探しに行つて来ます！」  
「だめっスよ、明日夢くん。そんなことはゼツタイ」

「そうよ。明日夢くん。オオムカデは昼夜関係なしに人を襲うの。フブキがないこの状況で、明日夢くんを一人には出来ない。私が責任を持って柴又まで連れて帰ります」

戸田山に対しては無茶も言うが、明日夢はまだ一般人だ。サポーターとはいえ、猛士の人間である香須実には、彼を守る義務があった。

「僕は、フブキさんに逢う為にここまで来たんだ！ なんでも教えてくれるって言ったのに……。フブキさんと逢わずに帰るつもりはありません！」

「明日夢くん。ちゃんとした鬼に応援に来て貰つて、フブキさんのことは探すから、だから、香須実さんと戻つて下さい！」

固い決意で森に飛び込もうとする明日夢を、戸田山は必死に止めようとする。

だが、

「僕はまだ、弟子じゃありません！ だから、命令に従う義務はありませんよね？」

「……やけに……威勢がいいね」

まだ明けきれぬ、森の薄闇を縫うようにフブキの声が聞こえた。

「フブキさんっ！」

三人の声が重なる。明日夢の声は弾み、香須実と戸田山の声には安堵の色が広がった。

一瞬で笑顔になりフブキに駆け寄る明日夢。しかし……次の瞬間、彼は愕然とする。

フブキは顔だけ変身を解除した、いわゆるフェイスオフの状態であった。そして、左肩からは血が滴り落ち、地面を黒く染めていた。フブキの歩いてきた後方にも、点々と血の跡がついている。顔色は蒼白で、それは相当量の出血を示していた。

「悪い……心配かけたね。でも、さ、何でここに香須実と少年がいるの？」

真っ青の顔で、紫色の唇を開く。だが、フブキの声は極めて冷静だった。

「そんなことより、まず治療よ。どうして自分で塞がないの？ は、早く出血を止めないと」

さすがの香須実も声が震えている。

「ん、ムカデの針にやられたんだ。毒があるからね、それが抜けるまでは……傷口を塞ぐわけにいかない」

それは、止血も出来ないということであつた。しかし、それでは毒が回らなくても、失血死する可能性が高い。

「フブキさん。とりあえず、テントの中で変身を解除して下さい……自分は」

戸田山がそう言いながら、テントの入口を開けるが、フブキは軽くクビを振った。

「解除出来ないんだ。生身じゃ毒性に負ける……」



青くなる香須実と戸田山に、なんとフブキは、逆に軽く笑いかけたのだ。

「大丈夫。毒性が抜けたらすぐに傷を塞ぐ。鬼の体は生半可なことじゃ、へこたれないから。少年も……大丈夫だからそんな顔するんじゃない」

明日夢も、自分では気付かないうちに悲壮感漂う表情をしていたらしい。フブキに言われ、急に肩の力が抜けていく少年であった。

「じゃ、魔化魍は何体かのD Aが追跡続行してるんだね。よかった」「よくないっす、フブキさん。自分は音撃出来ないのに……どうするんですか？」

姫と童子は倒した。残すは魔化魍「オオムカデ」のみ。

フブキはムカデの毒で一瞬動けなくなり、攻撃を避けるため崖から飛び降りたのだという。これほどの怪我を負って崖から飛び降り、しかも戻って来るといふのだから、鬼というのはどれほどの体力・生命力があるのだろう。明日夢は期待半分、不安半分でフブキを見つめた。

さらに明日夢は、香須実の指示で、フブキの肩から流れ落ちる血を拭っていた。厚手のバスタオルはあつと言う間に真紅に染まる。そして、初めて触れた鬼の体は、思ったほど硬くなかった。だが恐ろしく熱い。

オオムカデの毒は、並の人間であれば掠るだけで死に至るといふそれをまともに喰らったのだ。さすがのフブキも毒のせいで体温が急上昇していた。息も荒い。明日夢は心配で……何も出来ない自分が悔しくて堪らなかつた。

「フブキさんっ！ ムカデの野郎、かなり下まで来てますよ。どうしたらいいんだ……」

戸田山は、DAが持ち帰ったの情報を地図で照らし合わせている。

「その下……キャンプ場がなかったっけ？」

「え？ えっと……あ、あります！」

「この時期だからね。使用者はいないかも知れないけど、念のため管理事務所に連絡して確認とってみて。事務所の所長が<sup>おおきこ</sup>大迫さんって言ってる、猛士の協力者だから」

「あ、はいっ！」

戸田山は走って車のほうまで行った。

『出せない？ 出せないってどういうこと？』

不意に、電話中の香須実の声が大きくなった。相手は当然、彼女の父・勢地郎だ。

香須実はフブキの怪我を報告し、応援を頼んだのである。しかし、勢地郎は「近場には誰もいないので、すぐに応援は出せない」と言う。

『でも、戸田山くんじゃ音撃が出来ないのよ！？ ちょっと待ってよ、ねえ……そんな、いくらフブキでも』

その時、香須実の横からフブキがスツと携帯電話を取り上げた。明日夢は、いつのまにフブキがそこまで行ったのかさえ気付かず、キョロキョロしてしまう。

『電話代わりました。わたしです』

『ああ、フブキくんか。傷はどうだね。どうしても無理なら、一旦引き上げて来てくれ。その上で、手が空いた者を回すか、君の治療をしてから仕切りなおすか……それくらいしか』

『いえ……応援は要りません。こっちは大丈夫です』

「ちよっ！ フブキい！？」

香須実が抗議の声を上げる。だが、フブキはそれを目で制した。

『本当に、大丈夫なんだね？』

『大丈夫ですよ。香須実が心配性なだけです。かすり傷ですから』

『判った。だが、無茶はするな。引き返して来ても構わんのだから、いいね』  
『はい』

携帯電話を切った後、香須実は凄い顔でフブキを睨んだ。しかし、怒鳴ることはせず……少し悲しげに口元を歪めただけであつた。

くくくくくくくく

テントの中は薄暗い。そして、荒い呼吸音だけが明日夢の耳に響く。彼の目の前、テントのほぼ中央にフブキは横たわっていた。バスタオルは、また一枚が真っ赤に染まり……新しい物と取り替えて、香須実が持つて出たところだ。

「フブキを見ていてね」

香須実に言われ明日夢は付き添うが、自分の息が止まりそうなほど苦しい。これが鬼の仕事なんだと思うと、彼の膝は震えた。

「……合格、おめでとう」

少し掠れた声でフブキが言った。

「え？ あ、あの、どうして？」

「だって、受かってなきや来ないでしょ？ こんなトコまで」

苦しい息の下、フブキは笑っている。

「と、戸田山さんから、聞きました。フブキさんって最強の鬼なんですね。凄いですよね、女の人ののに」

明日夢の言葉にフブキは困ったような顔をする。

「最強が、聞いて呆れる体たらくだね。……幻滅した？」

「い、いえ。でも、本当に命懸けなんだ、って思ったら……少し怖いです」

「わたしもそうだ。怖いよ」

「え？ フブキさんが、ですか？」

「ん。怖いし、逃げたくなるし、泣きたくなる」

「ええっ！？ でも、そんな、だって……」

驚く明日夢に言葉を掛けようとフブキが口を開いた時、だった。

「フブキさんっ！ 大変っスー！！ キャンプ場にキャンピングカーで乗り入れた家族連れがいて……連絡が取れないって！」

## 八之巻「響く声」(三)

フブキはスツと体を起こした。

「戸田山、烈雷を持ってすぐに向かいなさい。もし魔化魍を発見したら、変身して戦うように。わたしも傷を塞いだら、すぐに後を追うから」

「む、無理ッス。そんな、自分ひとりでオオムカデなんて」

「家族連れが無事なら避難誘導を、怪我人がいたら一人でも助けて欲しい。頼む、戸田山……わたしが行くまで、頼む」

頭を下げるフブキを見て、戸田山は慌てて答えた。

「そ、そんなっ！ 頭を上げて下さい、フブキさんっ！ ……判りました、自分に出来る精一杯のことをやってみるっス！」

戸田山は弾かれたように立ち上がり、テントから飛び出していた。

「フブキさ」

「フブキっ！ 戸田山くんが烈雷を持って飛び出して行ったわ！ どういうこと!?!」

テントに飛び込んだきた香須実は、明日夢を押しつけフブキに問い掛ける。フブキは戸田山の報告……家族連れのキャンパーと連絡が取れなくなったことを伝えた。

「香須実、悪いけど、消毒液とナイフをお願い。ナイフは火で炙<sup>あぶ</sup>ってくれる?」

「ちよつとそれって……止めても無駄なんだよね」

「ん、ごめん。でも、大丈夫だから」

香須実は肩をすくめ、テントから出て行った。

「あ、あのフブキさん」

「ああ、悪い。今から変身解除するから……」

明日夢はきよとんとしたまま、テントに立ち尽くす。フブキは少し照れたように笑い、

「えっとね。変身解除すると……真っ裸になるんだよね。見たい？」

「い、いいえっ！ すみませんでしたっ！」

大慌てでテントから飛び出す明日夢だった。

くわくわくわくわく

一瞬、テントの中から誰かの首を絞めるような呻き声が聞こえた。明日夢は驚いて香須実を見る。香須実もその視線に気付き、

「フブキが大丈夫って言ったら、大丈夫だから。心配しなくていいよ」

「でもっ！」

再び聞こえた呻き声に、明日夢はオロオロするばかりだ。大丈夫だ、という香須実も奥歯を噛み締めている。まるで、自分の身体がナイフで切られるみたいな顔で。

「フブキさんは何をしてるんですか？ 毒を抜かなきゃ傷口を塞げないって。変身を解いたら、毒にやられるって。それなのに」

「傷口をナイフで抉り取って、毒を一気に体外に出す気なんでしょうね。ギリギリまで堪えて、傷口を塞いでから首から下の変身も解除する。変身は一旦解除したほうが、傷の治りが早いよ。変身するたびに、体をリセットするようなものらしいから……」

傷をナイフで抉る？ 聞いただけで明日夢は身震いした。

香須実はそんな明日夢を見て、自分のしたことが正しいのか誤りだったか、判らなくなる。

明日夢と出会いフブキは変わった。

どこか揺れている気がする。だがそれは、人であれば当然の感情だと香須実<sup>かすみ</sup>は思っていた。フブキは、吉野に突きつけられた“鈴の鬼”のご法度<sup>はつと</sup>だか禁忌<sup>きんき</sup>だかに縛られているのだ。香須実<sup>かすみ</sup>はフブキを、双葉の頃の彼女に戻したいと思っていた。

フブキなら、孤独の中で戦う強さではなく、他の何かを見つけてくれるはずだ、と。

だが、それは自分の思い違いだったのだろうか……香須実<sup>かすみ</sup>がフブキの心を揺さぶったことで、無用な怪我をさせてるのだとしたら。吉野の言う通り弟子など取らず、彼女は戦いに専念するべきなのだろうか？

「フブキさんっ！」

明日夢は不安を隠せない表情でフブキを見つめた。当のフブキはいつものシャツとジーンズに着替えを済ませ、一見、何も変わらなないように思えた。だが……手にした氷輪を腰にセットした瞬間、足元がふらつき。明日夢は咄嗟にフブキの腕を掴む。そしてそれは、鬼であった時とは比べものにならないほど細く……。

「無理です……そんな、絶対無理です。死んでしまいますよ！ やめて下さい！」

「明日夢くん」

「最強って言っても、やっぱり女の人だし……そりゃ、僕なんかとは比べ物にならないけど、でも、フブキさんより強い男の人って絶対いますよ！ いや、そう言う事が言いたいんじゃないやなくて」

半ばパニックで叫ぶ明日夢に、フブキは落ち着いた声で応える。

「うん。どう考えても、わたしより、戸田山のほうが力はあるそうだよ。背も高い、体も大きいし腕も太い。きっと力では男に負け

る。でもね　心は負けない」

「フブキ……さん」

荒い呼吸をどうにか整え、首筋には滝のような汗が流れていた。それでもフブキは笑うのだ。「心は負けない」その声は明日夢の胸に何重にも響き、心の奥底に染み込んで行く。

「僕も行きます！　一緒に連れて行って下さいっ！」

「待って！　ダメよ。今のフブキは自分のことで手一杯のはずよ。

明日夢くん、今日じゃなくて」

「……いいよ」

「フブキッ！」

反対する香須実を、まあまあ、と宥めつつ、フブキは明日夢の同行を許可した。フブキに認められたことが嬉しかったのが、明日夢の瞳は煌き、何かが変わった。

「ただ、戸田山を先行させてるから、わたしは全速力で行く。明日夢くんは　」

腰からDAを外し、フブキは鈴の音と共に木々の間に放った。何の変哲もない円盤が、フブキ専用のDA・ハシヨクヒヨウに姿を変える。何度見ても明日夢には不思議でならない。

「シヨクをつけるから、この子に道案内してもらって。OK？」

「はいっ！」

くわくわくわくわく

木立を抜け、キャンプ場を指し示す看板を過ぎた瞬間、そこは咽返る血の匂いで溢れていた。横倒しになったキャンピングカーが一



台。その横に蠢く巨大な黒い影　魔化魍「オオムカデ」だ。その口元から見え隠れする白い棒が……それは、人間の足であった。はじめて見る「オオムカデ」の姿に、戸田山は恐怖を感じずにいられない。

(……遅かったんだ)

俯き、下がってフブキの到着を待とうとする。

そして「オオムカデ」が首をキャンピングカーに突っ込み、更なる餌を探そうとした、その時だ！

「ママーッ！　パーッ！」

車の割れた窓ガラスから、一人の子供が這い出し外に転げ落ちる。どうにか立ち上がり、泣きながら走り出した。

魔化魍がそれに気づき、餌を追うのも時間の問題だろう。

戸田山は、烈雷を地面に置いた。そして、左手首に嵌めた“変身鬼弦・音錠”<sup>おんじょう</sup>を鳴らす。それは、フブキやザンキの持つ“音伽”より、改良を加えられた新しいタイプだ。

弦の音が、血塗られたキャンプ場に響いた。魔化魍も動きを止め、戸田山のほうを見る。そして、彼は左手を額に翳し、そのまま天に向かつて衝き上げた。一瞬、微かな閃光<sup>かす</sup>が走るが……

「あ、あれ？」

何度も左腕を衝き上げるのだが、何も変化は起こらない。

「な、なんで……どうして」

慌てふためく戸田山を尻目に、魔化魍は子供を追い詰める。

「く、くそっ」

烈雷を掴むと、人間体のまま彼は魔化魍に突進した。

「うおおおおーっ！！」

子供を救おうと、戸田山は烈雷で斬り付ける。だが、姫や童子相手ならともかく、魔化魍相手に変身出来なければお話にならない。

尻尾であっさり振り払われ、烈雷は弾き飛ばされた。

戸田山は子供に飛びつくと、そのまま抱きかかえて走り出したのだ。

しかし、あつという間に追いつかれ……子供と一緒に「オオムカデ」の長く硬い体躯たいくに巻き取られてしまう。

「うわあっ！」

戸田山は子供だけでも逃がそうと、必死にもがくがびくともしない。それどころか、益々二人を締め上げ……。

その時、なんと魔化魍の目に烈雷が突き刺さった。間一髪、駆けつけたフブキが烈雷を拾い、右腕を鞭むちのように撓しならせて投げたのだ。痛みを暴れる「オオムカデ」は戸田山らを放り出す。

「戸田山っ！ 子供を早く！」

「は、はいっ」

ムカデの毒はまだ少し体内に残っていた。大量の血を失ったことで、さすがのフブキも貧血気味だ。長丁場は体力が持たない。フブキは速攻を決め、吹雪鬼へと変身する。

変身により傷口は塞がった。痛みもない。だが……目がかすみ、魔化魍がぼやける。

「血の気が多い香須実から、少し貰ってくるんだっただな」

そんな独り言が口をつく。

どうやら、明日夢たちが心配するほど、いよいよピンチと言っわけじゃないさそうだ。

だが、魔化魍は片目をつぶされた痛みか、奇声を上げ、吹雪鬼に襲い掛かった。

「出いでよっ！ 氷刃ひやうじん！」

グツと奥歯を噛み締めた。掛け声と共に、氷輪を握る手に力を加える。同時に「オオムカデ」に向かって吹雪鬼も突撃したのだ。両者は正面から激突。間髪入れず、吹雪鬼は氷刃で百足の名に相応しい、無数の手足を叩き斬った。「オオムカデ」は大音声の咆哮を上げつつ、復活した毒針を吹雪目掛けて尻から放つ。だが、不意打ちでなければ同じ手を食う吹雪鬼ではない。薙ぎ払った氷刃で毒針は真つ二つだ。

吹雪鬼は氷輪を構えなおすと、呼吸を整え、牙を剥いた魔化魍の頭上に飛び乗った。そのまま、脳天目掛けて氷輪を突き刺し、さすが“銃弓”をセツトした。

「おんげきざん音撃斬！ はじやめいげん破邪鳴弦！」

長い巨体をあつという間に白い氷の結晶が覆い尽くし 半瞬後、  
オオムカデは奥武蔵のキャンプ場にて砕け散るのだった。

くくくくくくくくく

「あ、あ、ままあ……ぱぱあ……ままあ……おにいちゃ」

目の前で、家族を魔化魍に食われたのだ。さらに、異形の鬼の出現に怯え泣き叫ぶ……わずか五く六歳の少年。その目は見開かれ、あまりの恐怖に神経は焼き切れんばかりだ。

フェイスオフで近づくフブキ。彼女の足元には少年から脱げた靴が転がった。「仮面ライダー」のスニーカーには『たなかゆうた』と名前が書かれてある。

それは、フブキに嫌でも思い出させる。十七年前、フブキを庇っ

て魔化魍の餌食となった双子の兄のことを。

幼い少年の瞳に左手を翳す。そして右手首の金剛を一振りして、「ごめんね、ゆうたくん。でもどうか……負けずに生きて欲しい」鈴の音は、キャンプ場に漂う“魔”を被いながら、少年の脳裏に焼き付いた惨劇を消し去るのだった。

フブキが明日夢に向かって歩いてくる。

あの雪山で聞いた鈴の音は、明日夢の内に眠る扉の鍵を開けてしまった。そして今日、彼はありったけの勇気で、その扉を押し開けたのだ。

「僕……僕も鬼になりたい！ 僕は、鬼の弟子になります！」

く九之巻「進めぬ道」につづく

## 八之巻「響く声」(三)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

この回はちよっといつもより長いかも…。

ヒーローはピンチを乗り切ってナンボだと思っので、結構毎回ピンチです(苦笑)

まあ、弟子になるのも、弟子を持つのも一苦労、というのをやってもらおうかな、と。

弟子にはしますからね、原作の二の舞を踏むことはしませんので「安心下さい(^^)ノ

次回、九之巻「進めぬ道」：弟子入り宣言した明日夢の前に師匠候補が？フブキ・戸田山の悩みも深くなり…。魔化魍はオリジナルで、初回に名前だけ出て来た「オニクマ」です。巨大・凶暴な熊を想像してやって下さい(笑)

では、また来週。皆さまのお越しをお待ちしておりますm(\_\_\_\_\_)m

## 九之巻「進めぬ道」(一)

甘味処『たちばな』の地下に明日夢はいた。

店に出入りするようになって約二ヶ月、まさか、甘味処の地下にこんなスペースがあるなんて、誰も思わないだろう。

階段を下りてすぐ、明日夢の予想より広い部屋があった。窓がないせいか、かなり薄暗く感じる。壁際にはパソコンがあり、そつちを見ると日菜佳がニコツと笑って手を振った。

その部屋の中央に黒い大きなテーブルが置かれていて、明日夢の前に座るのは関東支部に所属する三人の鬼。向かって左から、ダンキ・エイキ・シヨウウキである。

『僕は、鬼の弟子になります!』

その言葉はフブキを通じて勢地郎に伝えられ、明日夢の採用内定が決まったのだった。

そして三月末……明日夢は呼び出され、勢地郎から聞かされた言葉に、ただ呆然とする。

「いやあ、明日夢くん、よく決断してくれたね。君なら立派な鬼になれる! ええと、ね 彼らが、君の師匠候補だ」

ダンキ・エイキは“太鼓の鬼”、シヨウウキは“管の鬼”だと説明を受ける。皆二十代半ば、フブキと同世代だ。鬼のキャリアも五、七年と似たようなものである。

実はこの四人は非常に仲が良かった。同じ時期に弟子として過ごしたこともあって、吉野で行われる鬼候補生の勉強会にも共に参加した。苦勞を分かち合った同期のノリである。

一本気なダンキと我が道を行くタイプのエイキはぶつかることも

多い。そんな時は、穏やかで人の好いシヨウキが取り成すことになっている。口数は少ないが、そんな彼らのまとめ役……中和剤となるのがフブキであった。

だが、そのフブキがここにはいない。

その理由は、明日夢以外の全員は知っていることであった。

「あの……えっと」

どうしてココにフブキさんがいないんですか？ と聞きたいが、突然複数の鬼を目の前にして、上手く言葉が出て来ない。

「えっと、フブ」

「だから、俺に弟子なんか無理だって。おやつさんもわかってんでしょ？」

そう言ったのがダンキだ。

それに同意するように、隣に座ったエイキも明らかに拒絶を口にした。

「俺も無理。だってさ、サポーターも付いて来ない男だよ。弟子なんか絶対に無理だって」

「シヨウキがいいよ。な、お前弟子取れよ」

「そうそう、俺らの中で一番年長なんだしさ」

などと言い、二人はシヨウキに押し付けようとする。

「いや、でも、僕がキャリアが一番浅いから……」

「でもお前のほうがいいって！」

「そうだよ。でなきゃダンキだな。お前が一番鬼になるのは早かったんだからさ」

「ちよー待て」

弟子取りを擦り合う鬼三人に、勢地郎の怒りが爆発しかけた、その時だ。

「あのっ！ ……僕、皆さんに迷惑を掛けてるんでしょうか？」

「……」

突如上がった明日夢の声に、三人とも口を噤んだ。地下室は一転シーンとした気配が漂う。

そんな中、勢地郎が咳払いをして立ち上がった。

「いやあ、すまないねえ、明日夢くん。実は、この連中は一度も弟子を持ったことがないんだ。それで、どうも腰が引けてるらしい。全くもって情けない！ 鬼がこんなことでどうするんだ！」

支部長の叱責に三人は揃って首をすくめ、これ以上ないくらい縮こまったのだった。

くわくわくわくわく

柴又からバイクで約三十分、さほど遠くない山中にフブキはいた。出勤ではなく、インターバルに入ったのでトレーニングにやって来たのだ。

今年の一月までは、出勤と待機を三週間、その後三週間のインターバル……訓練兼休暇を取る、というタイムテーブルであった。ところが、そのインターバルだけ一週間に縮められたのである。

フブキら若手の鬼はともかく、ベテラン鬼たちの体には相当な負担であった。特に“弦の鬼”の班はきつい。ザンキが未だ入院中で、復帰は早くて四月の終わりだという。そのため、フブキはフル稼働となり、実に七週間ぶりの休暇であった。

卯月間近、西日本から順に桜の開花前線が北上中とはいえ、花冷えのこの時期。フブキの目前にも桜の木があり、ピンクの蕾は固く閉じていた。



その桜を見据え、フブキは掛け声と共に、諸手もろて左上段に構えた竹刀を一気に振り下ろす。

背中せなかの中心辺りで、一つに結んだ漆黒の髪が揺れる。数本の後れ毛おくれが柔肌なげに張り付き、いつもとは違う仄ほのかな色気を漂わせていた。白の剣道着と藍染の剣道袴。足元は裸足だ。

三尺九寸、一二〇センチ弱の竹刀を、足先下段に構え直し、送り足で一步引く。刹那、まるで何者かに斬り掛かられたように、フブキは竹刀を振り上げた。中段で止め、平正眼ひらせいがんから踏み込み、仮想敵すいげつの水月を突く。

竹刀の中心にはびつしりと鉛が詰められており、重さは約十キロ程度。それでも氷輪の重量よりは軽い。

それを振り切り、ピタツと止める力は鬼ならではの、か。一種、神々しさすら感じる。だが……。

「いかななあ……中心がずれとるぞ」

フブキの背後から声を掛けたのは、同じ山にある小さな寺の和尚おしょうだ。年齢よわい八十は超えているというが、正確なところは判らない。本人も知らないかも知れない。

「やっぱり、判りますか？」

「わからんのか」

和尚はカッカッカッ、と声を立てて笑う。この和尚も“猛士”の協力者だ。

「朝方訪ねて来た、イブキらのせいだけじゃなさそうじゃな」

「はあ……」

今朝早く、イブキがあきらを伴い、山中に籠もるフブキを訪ねてきた。

「どうしてですか？ これじゃまるで逃げてるみたいですよ。どうして、彼にハッキリ告げないんですか？」

顔を見るなり、あきらがフブキに噛み付いた。

「あきら　フブキさんに失礼だ。止めなさい」

「いいえっ！ 私には言う資格があると思います。そうでしょう！  
？　フブキさんっ」

二年前まで、あきらはフブキのことを尊敬し、信奉していた。弟子になるならフブキ以外にはいない、と断っていたくらいだ。だが、あきらの両親が亡くなり、吉野が特例を認めようとした矢先、フブキのほうから断わったのである。

「わたしは、あきらを弟子にするつもりはない」

泣いて縋るあきらをフブキは振り切った。無論、フブキにはフブキの考えがあつてのことだつたが……。

それでも、あきらは鬼が諦めきれず、イブキの弟子になつたのだつた。

「今のフブキさんは“鈴の鬼”に相応しくありません」

燃えるような目であきらはフブキを睨む。だがその中に、未だ諦めきれぬ憧憬の念が見え隠れしていた。

「よいよい。もっともつと迷うがよい。人生は長い。お前さんはまだ若い」

和尚は晴れやかに笑つと、邪魔してすまん、と去って行った。

「人生は……長い、か」

心配そうに周囲を跳ね回るDAハシヨクヒヨウにウインクをして、  
「さあ、もうひと頑張りしよっか」

冷え込む山の空気を竹刀で一閃するフブキであつた。



九之巻「進めぬ道」(一)(後書き)

お待たせしましたm( ) m

九之巻は全三話です。

エイキさんのダジャレが思いつかない…orz

(二)は今夜にも、(三)は少々お待ち下さいませ。

## 九之巻「進めぬ道」(二)

明日夢は『たちばな』を後にし、俯き加減で商店街を歩いていた。ボンヤリと勢地郎の言葉が頭に浮かぶ。

「じゃあ、そうだな。とりあえず、ダンキくと一緒に回ってみてくれないか？ お試し期間みたいなものかな。属性や音撃武器の適性も確認しなきゃならないし、ね。いいかな？」

そう言われて、断られる明日夢ではない。そのまま押し切られ、四月からダンキ付いて行くことになってしまった。

明日夢は結局、フブキの弟子になりたい、と言えず仕舞いだった。今ひとつピンと来ないが、『お試し』と言っし、おそらくはフブキの番も回って来るのだろう。

そんな風に、強引に自分を納得させる明日夢だった。

帰り道、明日夢は商店街の書店に立ち寄る。

自分は鬼になるのだ。どんな修行か判らないが、基礎体力は高いほうが良いに決まっている。明日からでも何か始めなければ……。そう思い、基礎トレーニングの教本を探しに来たのであった。

一步、店内に踏み入れた時であった。正面に明日夢と同じ年頃の少年少女がいた。そして、数冊の雑誌をそれぞれのカバンに滑り込ませたではないか。咄嗟ひょいとの出来事に明日夢は驚く。

しかも、笑って顔を上げた二人と目が合ってしまった。少年がもの凄い目で睨んでいる。明日夢は怖くなって目を逸らしてしま…。

二人はそんな明日夢を笑いながら、そそくさと店から出ようとした。その時だ。

「君たち、カバンの中を見せて貰えないか？」

店員の一言に少年は脱兎だつとの如く駆け出した。

その時、明日夢の脳裏にフブキの言葉が浮かぶ

『鬼は何があっても、どんな時も、逃げられないんだよ』

『心は負けない』

「ま、万引きは、よくない、と思う……あの

「うっせえ、どけっ！」

少年は明日夢を突き飛ばして逃げるが、少女がそんな明日夢に引っ掛かって転んだのだ。

その直後、追いついた店員に少女は捕まったのだった。

くくくくくくくく

「フブキさーん！」

和尚と入れ替わるように戸田山がフブキの元に駆けて来た。

「そこで和尚さんに会って、フブキさんはここだって聞いて来たっス！」

相変わらず元気一杯に見える。だが、それが空からげんき元気であることにフブキは気づいていた。

フブキは戸田山に優しく微笑み返すと、

「どうやら、インターバル返上みたいだね」

と先に言う。

「す、すみません……あの

「あなたが謝ることじゃないでしょ？ 『たちばな』に一旦戻る？  
それとも」

「あ、詳しい場所と魔化魍情報は一応ここに……」

そう言って戸田山が取り出したのは、雪山にでる魔化魍「オニクマ」であった。

「何？ またオニクマが出たの？ 桜が咲こうって時期なのに……」

「はあ、すみません」

「いやだから……」

フブキは苦笑した。

場所は群馬県の白根山。草津温泉の近くだ。四月中旬まで春スキーが可能な場所で、その辺りのスキー客を狙ってくる。

「クマなんだから冬眠すりゃいいのになあ」

戸田山がボソツと呟いた。

確かにそうだが、この「オニクマ」は逆で、雪山に好んで出て来て夏場はおとなくなるといふ魔化魍であった。

「ま、冬山の魔化魍はそろそろ打ち止めだろうね。「オニクマ」の経験は……ないよね？」

「はい。見たこともありません」

まあ、そうだろう。本来は“太鼓の鬼”のほうが適当ではなからうか。気温の問題でフブキが専門のようになっていたが、重量的には直接音を叩き込む方が倒し易い相手ではあった。おそらくは、ザンキも戦ったことはないだろう。

「あの……自分が一緒でお役に立てるんでしょうか？」

戸田山は奥武蔵以降、一度も変身出来ずにいた。師匠と一緒になければ変身出来ない、と言うのであれば、変身出来ないのと同じである。近い将来、必ず独りになるのだ。そのための修行であった。

「役に、か……立たないかもね」

「フ、フブキさあん」

「戸田山、役に立てるかどうかわからない。役に立つんだ」

そのフブキの言葉に戸田山は納得出来ないようだ。

「フブキさんは気にならないんですか？」

「何が？」

答えながら、フブキは竹刀から鍔つばと鍔止めを外し、竹刀袋に仕舞った。桜の木の側に置いてあったタオルで汗を拭い、靴下とスニーカーを履く。

「ですから、この間のキャンプ場の家族連れです！ 最初にフブキさんがオオムカデを倒したら、そしたら殺されずに……」

フブキの手首から金剛の鈴の音が聞こえた。そして、周囲を駆けていたDAシヨクとルリオオカミが、ディスク状に姿を戻したのだ。

くくくくくくくくくく

「いやあ、ありがとね。君のおかげで現行犯で捕まえられたよ」

万引き少女は常習犯だったらしく、明日夢は本屋の店主に感謝された。生まれて初めて人の役に立ったことに、明日夢はほんの少しだが強くなった気がして……。この次、フブキに会ったときに伝えよう、そんなことを考えていた。

「オイッ！」

突然後ろから呼び止められ、肩を掴まれ路地裏に引っ張り込まれる。

(え？ え？ 何が起こったんだ？)



ダンッ！ と地面に突き倒され……見上げた明日夢の目に映ったのは、さっきの万引き少年であった。

「てめえ、よくもやってくれたな」

「い、いや、僕は」

「てめえのせいでカノジョが捕まったんだよ」

少年はどうやら高校生のようだ。明日夢より身長は十センチ、体重は十キロ以上ありそうだった。

「どう責任とつてくれんだよ！」

「せ、せきにんって」

「慰謝料払えよな。それが出来ねえんなら、腕へし折るぜ」

僅かに上向いた心は、再び下に叩き落とされた。明日夢は怖くて逃げることも言い返すことも出来ない。

「オイッ！ 何とか言えよ。このクソガキ！」

万引き少年が明日夢に一步踏み出し、腕を振り上げた。その時だ。

誰かが少年の腕を掴んだ。明日夢の位置からは少年の影になって何も見えない。

「う……うわぁっ」

なんと、少年は見事に空中を一転して、背中からコンクリートに叩き付けられる。

少年の影から姿を現したのは、明日夢より小柄な少女。天美あきらであった。

自分より遙かに小さく、年下の少女にやられたのが悔しかったのか、少年は懲りずにあきらに掴みかかろうとした。しかし、逆に腕を取られ、振り解くことすら出来ない。腕がダメなら足で、と思っただらう。あきらを蹴ろうとした瞬間、今度はうつ伏せで地面に押さえ込まれる。

極められた肘が痛いのか、少年は悲鳴を上げる。あきらは仕方なさそうに腕を放してやった。

ジーンズの膝から砂を払いながら、あきらは万引き少年に声を掛ける。

「まだ、やりますか？」

「く、くそつ……てめえ、覚えてるよ！」

少年はお決まりの捨て台詞を残し、去って行くのだった。

「あ、あのっ！ どうもありがとう。あの、僕と会ったことあったっけ？」

明日夢の目の前で妊婦を助け、携帯電話を突き返して去って行った少女が、このあきらなのだが……。しかも、イブキの言っていた『明日夢と同じ歳の女の子』が同一人物だとも思っていない。

一方、あきらは明日夢の顔も略歴も知っている。

もちろん、鬼の適性があることも。“猛士”の報告書に目を通したからだ。この見るからに軟弱そうで、鬼とは程遠い位置にいる少年がフブキを悩ませている。

そう思うと、どうにも黙っておられず……。

「あ、良かったら名前を」

「あなたには誰も守れない」

「え？」

「自分すら守れない人間が誰かを守ろうなんて……それを思い上がりと言うんです！ 失礼します」

助けてくれた相手からなぜか一喝いっかつされ……。

明日夢が気付いた時、あきらの姿は消えていたのだった。

### 九之巻「進めぬ道」(三)

雪山ではベースキャンプは設営せずロッジに泊まるのが通例だ。フブキは戸田山を連れ、白根山でいつも利用するロッジにチエツクインした。

「あら双葉さん。珍しいですね。お連れさんなんて」

「ああ……戸田山くんです。彼も“猛士”のメンバーなんですよ」  
大体においてロッジの経営者が従業員に“猛士”の協力者がいる。ここは前者だ。ロッジの経営者は六十代の夫婦で、妻が接客を、夫は奥で料理を作っている。一般客の手前、こういった場所では藤倉双葉の名前を使っていた。

「お部屋……いつもので良かったかしら。今日は他は空いてないんだけど」

「え？ ええ、いいですよ。十畳もあるんだから、充分です」

「でも……」

思わせぶりの口調で経営者夫人は戸田山を見上げた。その目は何か言いたげだ。

「あの、自分に何か？」

「い、いえ、ね。まあ、双葉さんだから心配はしてませんが」

「????」

「本当に大丈夫ですから。荷物を置いたらすぐに出ます」

フブキは鍵を受け取るとそのまま階段を上がって行く。『いつもこの部屋』と言うからには、場所は判っているようだ。訝しげに戸田山を見る経営者夫人に一礼して、彼はその後を追いかけた。

そこは二階の一番奥であった。部屋に入ってすぐ、二畳ほどの板の間があり正面に洗面台がある。どうやら、バス・トイレは室内に



サマースポーツは得意だが、ウィンタースポーツは苦手、と言うが……。どうやら道具を使うものは得意では無さそうだ。魔化魍が「オニクマ」であるなら、捕食に動くのは日が沈んでからになる。それまで、スキーの特訓を言い渡して、フブキは戸田山から離れたのであった。

彼はフブキに同行してから変身が出来ずに悩んでいる。

それは先輩であるフブキが年下の、それも女性であることが原因だろうと彼女は察していた。戸田山の“鈴の鬼”吹雪鬼に対する憧憬と尊敬は本物であろう。だが、人間体で目の前に立つのは、二十五才のうら若き女性であった。

確かに、フブキ自身に自覚はない。だが、彼女は世間一般に照らし合わせても、魅力的過ぎる女性であった。

鍛えているせいかスタイルは申し分ない。特に、世の男性が顔を埋めたくなくなるほどの谷間が、戸田山の目の前をちらつく。

当のフブキは「変身するのだから必要ない」と常にノーメイクである。……にも関わらず、すれ違う男の三人に二人は振り返るほどの毅然とした美しさがあった。整い過ぎて、逆に印象に残り難い顔立ちではある。しかし、魔化魍を見据えた時の眼力は凜々しく、戸田山の目にはフブキの全身から後光が射して見えたほどだ。

あの日菜佳にすら振り回されている戸田山である。彼はフブキを身近に感じ、ひたすら戸惑っていたのだった。

くくくくくくくくく

東京近郊、標高はさほどない山の奥　そこは密かに“猛士”が所有する敷地であった。

以前は研究施設を置いていたが、数十年前に引き上げ、残るのは朽ち果てた建物だけだ。そこに威吹鬼が烈風を持ち、構えている。

現在、飛行タイプのDAはアカネタカだけだが、軽量のアカネは録音のみで時間も短い。アカネをベースに改良を加えたのが新型DA・アサギワシ（浅葱鷲）だ。同じく、攻撃力も高くスピードもあるDA・ルリオオカミに防弾性を加え、更に攻撃力をUPさせたのがこちららも新型DA・キアカシシ（黄赤獅子）であった。

同じ弟子でも、あきらのDAを扱う技術は戸田山以上である。

あきらが音笛おんてきを鳴らし、新型DA二体を動かした。すると、キアカシシとアサギワシは、猛烈に威吹鬼目掛けて攻撃を開始する。

威吹鬼は襲い掛かる二体に、烈風で鬼石を撃ち込んだ。なんと、二体とも見事に音撃管の攻撃を弾き返しながら突進してくる。

いよいよ威吹鬼に噛み付こうかと言う時、あきらは再び笛を鳴らし、二体は急停止。すぐさま、ディスク状に姿を変えた。

フェイスオフのイブキは、強靱なDAを手に満足げな笑顔だ。

「さすがみどりさんだね、手堅い仕事をしているよ」

「すぐにも実戦に使えるそうですね。でも、今回の最終チェックはみどりさん抜きで良かったんですか？」

あきらは手にデータファイルとチェックリストを抱え、イブキに質問する。

「うん。到着が一日遅れると連絡があったんだ。でも吉野は最終チェックの報告を今日中に、ってね」

吉野と関わりの深い彼らには、こういった任務も与えられていたのであった。

くくくくくくく

その頃、山の天候が一変した。雪が激しくなりスキーヤー達も慌ててロッジに戻る。

周囲が暗くなり、途端に現れる黒い影……「オニクマ」の姫と童子である。俊敏な動きとは言い難いが、木にもたれてひと休みするスキーヤーに襲い掛かった。

怪力で森の中に引きずり込み、首をへし折ろうとする。だが一瞬の隙について、DAシヨクが飛び掛かった。童子の手が離れ、雪の上をスキーヤーは転がる。這いずって逃げようとするスキーヤーに再び襲い掛かる童子。だが、目の前で掠めるように、フブキはスキーヤー抱え上げ、急斜面を滑り降りた。

少し下には戸田山が待機していた。

「戸田山っ！ スキーヤーを頼む」

「はい！」

それだけ言うとフブキは再び上を目指す。山はその名の通り、吹雪と化していた。

「……シヨク！」

次にフブキが目にしたのは、DAシヨクが「オニクマ」の怪童子によって握り潰される瞬間だった。

怪童子は胸を叩き咆哮を上げる。気配はするが、妖姫の姿は吹雪に隠れ、視界に捉えられない。フブキは深呼吸して右手首の金剛を鳴らした。

吹雪は猛吹雪と呼ぶに相応しくなり、轟音に鈴の音がかき消されそうになる。

だが、その横殴りの雪を払い、姿を見せたのは銀色に輝く鬼吹雪鬼であった。

変身直後の隙を狙い、真横から妖姫が襲い掛かった。その怪力で吹雪鬼の首を締め上げる。吹雪鬼は瞬時に鬼爪を出し、妖姫の腹に突きたてた。筋肉の厚さか、氷点下の気温に慣れてるせいか、中々吹雪鬼の冷気では妖姫の動きを止めることが出来ない。吹雪鬼は鬼爪を引っ込め、妖姫の両腕を掴んだ。

「うおおおおおっ！！」

臍下丹田せいかたんでんに気を籠め、渾身の力で妖姫の腕を引き剥がす。それは諸もろに力比べであった。体に隙間が出来た瞬間、妖姫の脛すねを狙い蹴りを連続で入れた。吹雪鬼より頭一つ大きい「オニクマ」の妖姫はその場に膝をつく。そこを狙って今度は側頭骨……こめかみに回し蹴りを叩き込んだのだ。吹雪鬼の本気の蹴りは約三十五トンものパワーがある。

妖姫が吹き飛ぶと同時に、吹雪鬼に襲い掛かったのが怪童子であった。

怪童子の攻撃をかわしつつ、素早く腰から氷輪を抜き、吹雪鬼は正眼に構える。その瞬間、雪山を巨体で揺るがせ、小山ほどもある魔化魍「オニクマ」が姿を見せたのだった。

「十之巻「開く秘密」につづく」



九之巻「進めぬ道」(三)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

よかった、週末に更新出来た(苦笑)

さて、戸田山は何を考えているのか…(^^;) (いや、妙なコトにはなりません)

イブキ&あきらの師弟はかなりシビアというか辛辣というか…戦う師弟です。

名前だけ出て来たみどりさん、来週に登場です。

次回、十之巻「開く秘密」…対オニクマ戦の決着です。そして、ついに“鈴の鬼”の秘密が明らかに。明日夢はあきらと『たちばな』で再会するが…。戸田山は鬼に変身出来るのでしょうか？

では、また来週。皆さまのお越しをお待ちしておりますm( )m

## 十之卷「開く秘密」(一)

古来、ひぐま「オニクマ」と呼ぶ地域もあったという。

だが今、吹雪鬼の前に立つ「オニクマ」は、まるで白熊のような白銀の毛並みをしていた。

そして、「オニクマ」とは別の方向から雄叫びが聞こえた。

怪童子だ。ハツとした瞬間、吹雪鬼は怪童子に後ろを取られてしまう。

妖姫より一回りも大きいのだ。そんな奴に押さえ込まれては、今度は力づくでどうしようもなくなる。吹雪鬼は咄嗟に屈み、怪童子の手から逃れながら、氷輪で反撃に出た。

その瞬間、目の端に戸田山が映った。

他の鬼と共闘することはある。威吹鬼ともよく組むほうだ。だが、彼らとは対等な立場である。

戦闘現場にまで、サポーターが付いてくることもある。吹雪鬼の場合、香須実だが……。彼女は守るべき存在だ。だが、戸田山は違う。どちらかと言えば、弟子に近い存在。鬼として 守り、育て、自分の全てを受け継がせる相手 それはやはり“鬼”であり“弟子”なのだ。

自分は斬鬼の弟子でありながら、烈雷を受け継ぐことが出来なかった。“音伽”で変身することすら出来ない。斬鬼を師匠と呼び、全てを教わりながら……吹雪鬼自身は弟子の務めが果たせなかったのだ。それは吹雪鬼の心残りであり、後悔でもある。そして、それらを受け継ぐことの出来る戸田山への嫉妬もあった。

その時、吹雪鬼の心に明日夢が浮かぶ。

『“鈴の鬼”は弟子を取れない』

それは吉野から最初に言い渡されたことであった。他にも色々あ

るが、彼女の役目は次代に引き継ぐことではないからだ。

何も受け継げず、何も残せない。

“鈴の鬼”ではなく“吹雪鬼”の想いが、繋ぐ相手のいない氷輪を鈍らせた。

ハツとした瞬間、魔化魍「オニクマ」の白く太い腕が吹雪鬼を横殴りにした。いや、殴られそうになったのを、横っ飛びに逃げたと  
言うべきか。

しかし、その先には雪の壁があり、吹雪鬼は激突する。

全身が雪に埋もれ……雪を押し退け出て来た時には、「オニクマ」も怪童子もいなくなっていたのだった。

く\*く\*く\*く\*

万引きに遭遇した翌日……明日夢はその書店の前を通り掛かる。  
助けてもらったのは事実だ。しかし、

『あなたには誰も守れない』

(なんであそこまで言われなきゃならないんだよ!)

あの時は呆気にとられ、一言も言い返せないままだったが……どうも納得が行かない。しかし、仮にあの少女が目の前に現れても、明日夢は文句を言うことも出来ないだろう。それが判るだけに、一層悔しい。

思い出したくない記憶を振り切るように、明日夢は走って通り抜

けようとした。

と、その時。

明日夢の視界に何か飛び込んでくる。アツと思ったとき、明日夢は女性とぶつかった。

「うわあっ」

「きゃっ！」

たちまち、路上に大量の荷物が散らばる。

「イタタタ……」

明日夢はどうにか転ばずに踏み止まったが、女性は派手に転んだらしい。

「だ、だいじょうぶですか？」

「あ、うん。大丈夫。ごめんね、もう、そそっかしくて」

そう言っただけで謝る女性は、ロングヘアで髪が緩く内巻きになった可愛らしい女の人であった。女性の年齢は十五歳の少年にはよく判らないものだが、フブキより上のような印象だ。

「すみません！ 僕の方こそ、慌ててたから」

明日夢も屈み込み、一緒になって散乱した品物を広い集めた。だが……スナック菓子にチョコレート・キャラメル・クッキー・ビスケット等々。見事にお菓子ばかりである。とても目の前の、折れそうに細い女性が一人で平らげる量とは思えない。代表で買出しにでも来たのだろうと、明日夢は勝手に納得しつつ……。

頭の中ではフブキのことを思い出していた。

フブキは、この女性ほど細くはない。背も明日夢より十センチは高いだろう。筋肉の付き方が鍛えられた体そのもので、全身から醸し出す生命力のようなものが桁外れだ。

でも、奥武蔵の山中で大怪我をしたフブキに触れた時、やはり身体は女性のものだった。

肌の柔らかさも、肩や腰の丸みも、間違はなく女性で……。  
なのに、何度振り払っても、昨夜一晚悩み続けても、師匠の姿で  
思い浮かべるのは“吹雪鬼”しかないのだ。

「ごめんねえ。ね？ 大丈夫？」

ハッと気付くと、女性が明日夢の顔を覗きこんでいる。どうやら、  
チョコビスケットの箱を握り締めたまま、物思いに耽<sup>ふけ</sup>っていたらしく。  
慌てて謝る明日夢であった。

く\*く\*く\*く\*

「……ですか？」

「そう、……」

明日夢の目の前に、なんと甘味処『たちばな』がある。  
ぶつかったお詫びに、と明日夢は荷物持ちを申し出た。女性は徒  
歩であったし、そう遠くはないと思ったからだ。だがそれは、遠く  
ないどころか……。

「運んでくれたお礼にお茶でもどう？ お団子でよかったですら奢<sup>おご</sup>るわ  
よ。さ、行く！」

「あ、いや、あの……」  
どう答えるべきか悩む明日夢の前で、ガラスと店の玄関が開いた。  
そこから顔を出したのは日菜佳である。

「あ、みどりさん、お帰りなさい！ え？ あれ？」  
「ただいま！ 日菜佳ちゃん」

（「おかえり」に「ただいま」って、この人はいつたい？ まさか、鬼なんてことは）

突飛な想像に混乱する明日夢であった。

くくくくくくくく

「そっかーフブキが見つけた少年って言うのが、キミね」  
なるほどなるほど、と明日夢がぶつかった女性……滝澤みどりは  
一人納得している。

今、明日夢が通されているのは、地下の広いテーブルがある部屋  
の下。奥の壁は一箇所が回転式の隠し扉になっており、「たちはな」  
にはなんと、地下二階があったのだ。

しかもそこは、テレビや写真で見る、秘密組織の研究室といった  
雰囲気……。ある意味、それは正解だろう。だが、それが「たち  
はな」の地下というのは、やはり驚きだ。

このみどりと呼ばれた女性も、やはり、“猛士”の一員であった。  
だが明日夢が想像したような“鬼”ではなく、研究員という立場  
の人だ。明日夢が鬼弟子候補生と聞き、みどりは自分の研究室に招  
き入れてくれたのである。

そこは、壁一面に各種変身具・ディスクアニマル・音撃武器が展  
示された部屋だった。

明日夢はそれらを真剣な表情で見入っている。

音撃武器のコーナーでは氷輪と同じ形状のものが掛けてあり、明  
日夢はそれにそっつと手で触れた。そして弓柄ゆづかの部分をグッと握り

締める。全身に緊張が走り、心臓がトクンと音を立てた。

「それは“氷輪”に似てるけど、一回り小型で“十六夜”って言うのよ。その真下にあるのが十六夜の“音撃震・月光”」

吹雪鬼が最後に魔化魍を倒す時、ベルトのバックルから外してセツトするヤツである。触れてみたかったが、そっちはケースに入っていてダメだった。

そして、明日夢が変身具のコーナーを見ていた時、一つのこと気がついた。

「あの……滝澤さん」

「みどりでいいわよ。何？」

「みどり、さん。あの、フブキさんが腕に嵌めてる、鈴が見当たらないんですが……」

「ああ、アレはね、スペアはないの」

「ない？ 今作ってるのか？」

当然、そう思うであろう。だが、みどりの答えは違った。

「フブキは“鈴の鬼”だから……」

明日夢は、同じ言葉を戸田山から聞いていた。

みどりは、少し切なく、困ったような表情をしたが、明日夢にその真意が判るはずはなく。そして彼は尋ねた。

「“鈴の鬼”って何ですか？」

十之巻「開く秘密」(一)(後書き)

長らくお待たせ致しました。

十之巻は全三話です。

(一)(二)はサクサクとUPします。(三)はちょっと待って下さいね。

では、今年も吹雪鬼をよろしくお願い致しますm——) m



## 十之卷「開く秘密」(二)

千年以上昔から、様々な呼ばれ方をして“魔化魍”は存在した。それと同じように、“鬼”と呼ばれる彼らも存在したのである。古来、鬼は徒党を組むことはなく、ある者は人里離れた山奥でひっそりと、ある者は金や食料と引き替えに魔物を退治したり、またある者は、鬼に変化する体を隠して普通の人間として生活していたという。

鬼はそれぞれに変身し易い音があり、その音を自発的に出して変身していた。当然、今のような変身具はなく、変身を自在に操れるものは少なかったであろう。

そして、ある時代、魔化魍が大量発生したのだ。奴らは列を成し、里を襲い始めた。

その窮地を救ったのが、鈴の音で変身する一人の鬼であった。

「その辺りは伝説なのよ。猛士は三百年以上続く組織なんだけど、それ以前は鬼を支援する組織ってなかったから……。各地で昔語りって感じで残ってるだけなの。でも、その後、魔化魍が大量発生するたびに“鈴の鬼”が現れて人を助けてるのよねえ。ちょうど、猛士が出来た頃にも“鈴の鬼”が現れて人々を救ったって記述があったね……」

そうしてみどりが明日夢に差し出した古びた巻物には、確かに鈴を手首に巻いた鬼の絵が書かれてあった。

だが、明日夢がジーツと見つめると、鈴は二個のような気がする。フブキの持っている鈴は四個付いていたような……。明日夢はそれをみどりに尋ねた。

「ああ、うん、そうなの。増えてるみたいね。どうやら、最強の魔

化魍がいて、それを倒すと増えてるみたいなの。封印してるって説もあるんだけど。でも、仕組みは現代科学では解明出来なかったわ」

“金剛”と呼ばれる鈴の付いた腕輪は、<sup>ブレスレット</sup>皮製であった。キュツと引くと締まるようになっていて、鈴の部分はカバーで覆われている。それをずらすと鈴が現れ、振ると澄んだ音色を響かせるのだ。もちろん、限られた人間にしか聞こえない音ではあるが。

この“金剛”の出す音域はそれほど異常なものではないという。他の変身具に比べて特別変わった音ではないのだ、と。器用な鬼は、全ての変身具で変身出来るらしい。しかし、そういった鬼が試しても、誰も“金剛”では鬼に変身出来ないのだ。そのため、『鈴が鬼を選ぶ』と言われていた。

「“金剛”は別名“清めの鈴”って呼ばれてるの。鈴だけでも充分に音撃が放てるくらい強力なのよ。だから、鈴に選ばれた鬼は、鈴の特殊な力を自在に操れて、現役最強って言われるの。逆に言えば、それだけの器がないと鈴も選ばないってことね」

「す、すごいですね。じゃ、フブキさんて本当に凄いな……」  
明日夢は話の壮大さに、呆然としていた。

「ただ、ね。ほら、言ったでしょ？ 『魔化魍が大量発生するたびに“鈴の鬼”が現れる』って。それは逆に言うと、“鈴の鬼”が出て来たってことは、近い将来、魔化魍が大量発生するってことなのよねえ」

みどりは深いため息と共に話を続けた。

「現に、去年の後半からドンドン増えてきてるし……。今回の規模がどういったものかまでは判らないんだけど。これから吹雪鬼は大変になって行くと思うわ」

「そうなんですか……あの、フブキさんに弟子とかは」

昨日、あの席にフブキがないのが不思議だった。色々考え、既

に弟子がいるんじゃないか、と明日夢は思ったのだ。しかし、みどりの答えは明日夢の嫌な予感を上回るものであった。

「うーん、とね。“鈴の鬼”って突然発生するって感じてしょ？その力って弟子を取っても伝えられるものじゃないのね。だから、戦闘に専念してもらってことで　フブキが弟子を取ることは認められてないんだよね」

吹雪鬼の弟子にはなれない。

それは明日夢にとって受け入れがたい現実であった。

くくくくくくくく

一方、戦闘中に別のことに気を取られ、魔化魍と童子を逃がしたフブキだが……。

彼女は自分の不安定さを悟り、なんと、戸田山に山を下りるように話したのである。

「それは……自分にはフブキさんのフォローは無理ってことっスカ？」

これ以上ないほど戸田山は俯き、ボソツと呟いた。

「いや、そうじゃない。あんたのせいじゃないよ。見たでしょう？わたし自身に問題がある。あんたを巻き込むわけにはいかない。

鬼は、弟子やサポーターの命を守る責任があるからね。おやっさんには連絡しておくから、今日中に山を下りなさい」

「でもっ」

「これは命令だよ。ザンキさんの元に戻るんだ。判ったね」

それだけ言うと、フブキはロツジの部屋を後にした。戸田山は、がらんとした十畳の部屋に一人取り残されたのであった。

この時、戸田山の中に小さな不満が生まれる。

師匠の命令は絶対であるはずだ。今は、フブキは戸田山にとって師匠の代わりである。今日中に山を下り、ザンキの元に戻らなければならぬ。だが……。

フブキも所詮女なのだ。奥武蔵の一件も、フブキが最初に「オオムカデ」を倒していたら、あの家族は誰も死なずに済んだのである。もし、もし、あれが師匠のザンキであれば。

ひよっとしたら、“鈴の鬼”はただの伝説に過ぎないのかも知れない。

自分であれば、自分が変身さえ出来れば……それが危険な考えであることに、戸田山は気付いてなかったのだった。

くくくくくくくくく

「フブキはさあ、すつごく優秀だったのに、全然変身できなくてね。もう諦めようかって時に、あの“金剛”を試すことになったんだよ。ねえ」

「あ、そうそう！ あの子も明日夢くんと同じ中学三年の終わりにザンキさんに弟子入りしたんだよ。あたしはまだ高校生でね。でも、親の関係でもう猛士のメンバーだったなあ」

みどりは、途端に元気がなくなった明日夢を励まそうと、努めて明るく話し続ける。だが、明日夢の耳には右から左に流れて行くのだった。

明日夢がみどりの研究室から地下一階に上がった時、そこには勢地郎がいた。

「どうだった？ 色んなものがあつたらう。君がどれを持つことになるか……今はまだ判らないけどね」

勢地郎は明日夢の様子に気付かず、次々と話を進める。

「ああ、そうだ。ダンキくんの件だけだね。四月からってことに決まったよ。彼はちょっと口は悪いが腕は太鼓の鬼の中でピカ一だ！ きつと楽しくやれるんじゃないかなあ。正式に決まれば」

「あつ！」

明日夢は勢地郎の言葉を遮り、勇気を出して言ったのだ。

「あの……僕、フブキさんの弟子になりたいんです。お願いします！」

そう言って明日夢は頭を下げる。

「ああ、そうかい。いや、そうだろうね。うん、そうしてやりたいのは山々なんだが」

「聞きました。みどりさんから……でも、それでも、僕は」

その時、明日夢の勇気を一刀両断にするような声が背後から響いた。

「“鈴の鬼”は弟子を取りません！」

明日夢は聞き覚えのある声にハツとして振り返る。そこにいたのは、明日夢を助けてくれた例の少女……。

「あきら！ ごめんね、明日夢くん。あきら、まずは挨拶が先だろ  
う」

そう言ったのはイブキである。彼女の後ろにイブキは立っていた。「ほら、前に話しただろ？ 君と同一年の僕の弟子、天美あきら

だ。君と同じ城南に受かったんだ。一緒の高校に通うことになる。仲良くしてやってくれよ」

イブキは相変わらず穏やかに微笑む。だが弟子は師匠の表情とは対照的に明日夢を睨み、尚も言い放った。

「あなたに鬼の適性はあっても、鬼になる資格はない。自分を守れない人間には誰も守れない。あなたに鬼は無理です！」

それはあきらから明日夢への、挑戦状にも等しく……。

## 十之卷「開く秘密」(三)

吉野 さんかくれいじょう 山岳霊場のひとつで、しゅげんどう 修験道の山伏などが存在する吉野

山の一角に、猛士の里はあった。

四十戸ほどの古い家が並び、最近では空き家も多くなっている。

その里の中央に大きな寺があった。見習い鬼たちの修行場にも使われる寺だ。見た目とは違い、地下には広大な研究施設や訓練スペースを兼ね備えていた。

猛士の吉野本部である。

あの日、鬼になりたてのフブキは多数の猛士幹部に囲まれていた。

「鈴の鬼”は弟子を取らない決まりだ」

「はあ……」

金剛で変身したとき、フブキは吉野に呼び出され、様々な決め事を聞かされたのだった。

「家族と会ってもいけない。親しい友人付き合いも避けるように。

他の鬼たちとも、出来る限り一線を引いて接するほうが良いである  
う」

家族は母と姉がいた。だが、鬼を志した時、向こうから娘ではないと縁を切られている。

「それから、当然だが恋愛も禁止だ。君はこれから“鈴の鬼”としての使命を全うするまで、戦いのためだけに全精力を注ぐのだ。それは伝説の鬼として鈴に選ばれた君の宿命である」

「……」

「鈴の鬼」が現れた以上、魔化魍の数は次第に増えていくだろう。大した被害でないといいが。君はそれを食い止めるために存在するのだ。良いか吹雪鬼、余計なことは一切考えるな。君は身命を賭して戦わなければならない」

くくくくくくくく

頬を切る冷たい風が止まった。

それは、滑っていたつもりが、いつの間にか止まっていたせいだ。言われるまま、余計なことは一切考えず戦ってきたのだ。だが、今の自分は本当に強いと言えるのだろうか？ そんな疑問がフブキの胸に浮かぶ。

その時、フブキの足元にDAハシヨクヒヨウが姿を見せた。グルグルと甘えたような声で鳴き、跳ね回っている。長い付き合いのシヨクには魂が宿っていた。フブキは砕けたDAの残骸から、新しいDAにシヨクの魂を移し替えた。どうやら、シヨクは新しい器が気に入ったようだ。

「オニクマが見つからなかったみたいだね」

フブキがそう尋ねると、シヨクは意気消沈したように動きを止めた。フブキは微笑み、

「気にしなくていいよ。アカネとルリを撒いてるから、今夜中にはカタをつける」

そう言うつと手を差し伸べた。その手に、シヨクはディスク状に姿を戻しながら飛び乗る。

フブキは再びゴーグルを嵌め、迷いを振り切るように、スノーボードで滑り降りて行くのだった。



くわくわくわくわく

夕闇の中、D A・アカネタカが戸田山の元へ舞い降りた。

山を下りるように言われ、荷物を纏めてロッジを後にした戸田山だったが……。何と彼は単独でD Aを放ち、魔化魍を探索していたのだ。彼はセイジガエル・アカネタカ・リヨクオオザルの三枚を所有していた。セイジは雪山ではほぼ役に立たない。戸田山はアカネとリヨクの二枚を起動させたのだった。

ディスク状に戻ったD Aは、音錠により音を再生できる。それを聞き取るのが鬼の役目だ。戸田山はアカネから当たりの報告を受け、目を輝かせた。

彼は烈雷を握る手に力を籠める。そして、なんとフブキに無断で出撃したのだった。

ちょうどその頃、フブキの放ったD A・アカネタカも彼女の元に戻っていた。

雪山の中空で舞うアカネタカは甲高い鳴き声を上げた。それはフブキに魔化魍の出現を教えていた。フブキは、変身具を使わずとも、鳴き声だけでD Aの情報を読み取れる。他にも、ベテラン鬼たちの中には可能な者もいるが、フブキの能力は桁違いに高い。

フブキはロッジの窓から身を乗り出し、アカネの報告を聞く。

直後、室内に引き返し、フブキは氷輪を腰にセットした。そして、玄関に向かおうとした時、窓の下で騒ぐD Aの気配を読み取ったのだ。

そこにいたのは戸田山のD A・リヨクオオザル。

「何？　なんであんたがここに……」

リヨクから伝わる気配に、フブキは息を飲む。

DAの中で、最も知能が高いと言われるリヨクオオザル。自ら判断し、戸田山の出撃をフブキに報告したのであった。

くくくくくくくく

慣れぬ雪山で迷いつつ、DAが伝えた位置までやって来た戸田山。ふいに飛び掛る童子を、戸田山は烈雷で薙ぎ払った。

「オニクマの童子だなっ！」

戸田山はそう言うと、烈雷を雪に刺し、変身鬼弦・音錠を鳴らす。夜の帳が白銀の森に下りつつあった。その隙間を縫うように、小さな弦の音に雪が震える。

戸田山は左手を額に翳し、一気に天を衝いた。

雷鳴が轟き、落雷が戸田山を直撃する。

衝撃を振り払い姿を現したのは、グリーンメタリックに輝く鬼。鬼名の付いていない弟子の一時期、彼らは“変身体”と呼ばれる。変身前と区別するためだが、さしずめ『戸田山変身体』であった。

「やった……やったぞ！　やりましたよ、ザンキさんっ！」

変身出来たのが余程嬉しかったのだろう。戸田山は喜びのあまり、師匠の名を呼びガッツポーズをしている。だが……。

そこを、こちらも変身した怪童子の一撃を喰らい、雪の中に投げ飛ばされた。「オニクマ」の怪童子は戸田山変身体を相手に、容赦ない攻撃だ。慣れない雪に足場が定まらず、三撃目をまともに喰らった瞬間、大木に叩き付けられた。意識が落ちそうになり、戸田山の変身は一気に解ける。雪の中、全裸で倒れ込む戸田山。

見習いだからと言って、怪童子が見逃すはずはない。

その時だ、戸田山に止めを刺そうとする怪童子の眼前を、黒い影が覆った。フブキである。

スノーボードのまままでフブキは飛び込んだ。だが、怪童子の破壊力は凄まじく、ボードを二つに叩き折る。フブキは空中で一回転すると雪の上に着地し、戸田山にスポーツバッグを投げつけた。

「あのね、戸田山。ここは真夏のビーチじゃない。準備しとかないと、酷い目に遭うんだよ。判った？」

「は、は……ひ。しゃむいれず。フブキはん。ほれは、ほれは……はれ？」

「話は後だ！ 下がってる！」

「はひい！」

雪の上、慣れた脚捌きで怪童子の攻撃を避ける。

一瞬の隙をつき、鈴の音が響き渡った。猛吹雪のカーテンを突き破り、吹雪鬼は一気に怪童子を攻め立てる。

「出でよつ！ 氷刃！」

叫びながら吹雪鬼は怪童子に正面から斬りかかる。右上段に氷輪を構え、息を止め、ありつたけの冷気を氷の刃に籠めた。外気温も後押しして、刃は通常の五割り増しの長さ太さになる。それを一気に怪童子の脳天に叩き込む！

反撃の隙も与えず、吹雪鬼は怪童子を撃破する。

服を着てホツとする戸田山の真横で、突如、雪山が動き出した。

魔化魍「オニクマ」は最初からそこにいたのだ。全く気付かず慌てふためく戸田山とは違い、吹雪鬼は静かに氷輪を構えなおした。

白銀に輝く吹雪鬼は、平正眼に氷刃を持ち、神々しいばかりに輝いている。

雪原せつげんに佇たえずみ、獲物を狙う雪豹の如く……過酷な環境も、孤独をも撥ね退け、戦い続けた鬼がそこにいた。

「オニクマ」は一際ひととき体を大きく見せると、吹雪鬼を捕まえようとする。

しかし、吹雪鬼はその足元に転がり込み両足を斬り付けた。戸田山にはあの程度で「オニクマ」を倒せるとは到底思えない。案の定「オニクマ」はバランスを崩しただけで……。なんと、吹雪鬼の上に倒れ込むではないか。

地面が揺れ、木々の枝から雪が大量に落ちる。遠くでは雪崩の起こる音もした。

「吹雪鬼さんっ！」

ようやく落ち着き、声が出るようになった戸田山が叫んだ。

「オニクマ」は吹雪鬼の上に倒れこんだまま、まるで自身の体重でプレスするように吹雪鬼を押し潰している。

「吹雪鬼さん、吹雪鬼さん……ふぶき」

(まさか……やられた？ “鈴の鬼”が……そんな、馬鹿な)

その時、急に「オニクマ」が悶え苦しみ出したのだ。

瞬く間に、魔化魍の全身に霜が走る。「オニクマ」は急速冷凍され 刹那、粉微塵に吹き飛んだ。

鬼とはいえ、まともに組み合つては勝てる訳がない。相手の重量と数メートルの積雪を利用した見事な攻撃。吹雪鬼は雪の中から音撃を放っていたのだった。

フェイスオフと同時に軽く全身の雪を払い、フブキは戸田山に近づいた。

戸田山は奥歯を噛み締め、叱責・怒声を覚悟した。だが……。

「怪我は？」

「……大丈夫っス」

「そう、良かった。お疲れ」

ポンと肩を叩き、戸田山の横をすれ違う。

「あ、あのっ！ 自分は無断で」

「戸田山。わたしは鬼だけど人間だから、悩みもすれば迷いもする。魔化魍に襲われる全員を助けたいけど、無理なことも判ってる。ただ……百人殺されるところが九十九人になればいいと思う。目の前にいるたった一人を助けるために、全力を尽くす。……それじゃ、ダメかな？」

戸田山は俯き首を振る。

鬼になれば、強くなれると思っていた。“鈴の鬼”に選ばれたフブキは、もつと強いはずだと考えていたのだ。

でも、鬼に変身しても、怪童子相手ですら勝負にならなかった自分がいる。

このとき戸田山は、鬼になることが強くなることではないと知った。そして、たったひとり生き残った少年すら守れず、フブキに助けられた自分を恥じたのだ。

それは、自分が一人の鬼である、と自覚した瞬間だった。守られて当然の師匠の下では学べないこと……。

「フブキさんっ！ すんませんでしたっ！」

戸田山が顔を上げた時、フブキは肩越しに軽く手を翳した。その背中に見たのは師匠の後姿であった。

十一之巻「呼び合う師弟」につづく



十之巻「開く秘密」(三)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

戸田山くん、今回は変身していただきました。まだトドロキじゃありません(笑)

雷撃で変身って一番かっこいいですよね？

どうやって弟子にすんねんっ!?!と云われそうですが…(^^;)今回、明日夢とフブキは会ってもいないし(苦笑)

次回、十一之巻「呼び合う師弟」…武者童子と鎧姫の登場です。弾鬼と明日夢の組み合わせで出動!?!フブキは答えが出せたのか?彈鬼の変身シーンも)

ということ、また来週。皆さまのお越しをお待ちしておりますm

~~~~~)m

(今週は?って突っ込まないでね(汗))

## 十一之巻「呼び合う師弟」(一)

「明日夢〜。ちょっと明日夢！ 今日入学式よ、早くしなさい」

気が重い……明日夢はベッドから起き上がり、真新しい制服に身を包んだ。それでも全身がだるく、やる気も沸いてこない。

「おはよー！ お父さんに明日夢も高校生になりました！ って報告したからね。ほら、あんたも挨拶して来なさい」

幼い頃に亡くなった父の思い出はほとんどない。顔も声も覚えてはいない。明日夢の覚えている父はいつも微笑んでいる。高さ五十センチほどの、小さな仏壇の脇に立てられた写真の中で。

母に言われた通り手を合わせ、高校入学を報告する。

「母さんは入学式は出られないけど……」

「いいよ、恥ずかしい」

朝食をいつもの三分の一ほどで済ませ、明日夢は新しい鞆を手にとった。

「じゃ、行つて来る」

「頑張つてくるのよ〜」

ベランダから手を振る母に見送られ、明日夢は恥ずかしくて駆け出した。

自転車通学だった中学と違い、高校は徒歩圏内だ。

「おはよー」

高校の正門近く、美しく咲き誇る満開の桜の下で持田ひとみが手を振っている。彼女の笑顔に少しは心と体が軽くなり、明日夢も手を振り返した。

明日夢はこの日、高校生として……鬼の弟子として、一歩を踏み



出した。

くわくわくわくわく

『たちばな』では、勢地郎を先頭に古い資料を引っ張り出している最中だった。

パソコンに登録されていない、もっと古いデータまで引っ張り出し、魔化魍対策に役立てようと考えたのである。情報は多ければ多いほど良い。せめて、出現する魔化魍の予測くらいは確率を上げないと、鬼たちばかりに負担を掛けるわけにはいかないのだ。

そこに姿を現したのがフブキとダンキである。

「おやつさん、出勤ですか？」

ダンキが古い資料をパラパラ捲りながら尋ねた。すると、横からみどりにペシツと手を叩かれた。

「ちよつとお！　ダンキくん、ふるゝい、きちよくな資料なんだからね。丁寧に扱って頂戴！」

「はい。すみません」

ダンキはみどりには弱い。途端に借りてきた猫状態だ。

苦笑しつつ、今度はフブキが質問した。

「場所はどこですか？　それと……ダンキと組むんですか？」

「なんだよ、そのイヤそうな声」

「そうじゃないよ……ただ」

フブキの懸念を悟ったのか、勢地郎が口を挟む。

「明日夢くん、かあ。そうだな……ちよつどいいか、出勤を掛けて、彼も同行してみてくれ。まさか……ダンキくんほどの鬼が、まだビビってるなんてことは、ないだろうね？」

「ビ、ビビってませんよ。そんな、弟子の一人や二人」  
あはははは、とダンキは乾いた声で笑った。

「場所は栃木県の日光だ。男体山なんたいざんを挟んで中禅寺湖側と大真名子山おおまなござん側にはベースキャンプを設置して欲しいんだ。実は……魔化魍の特定が出来てないんだよ。移動スピードは結構速いようだ。又リカベかヤマビコ辺りだと踏んでるんだがね」

「又リカベ」も「ヤマビコ」も太鼓の鬼の専門である。どうやら外した時のフォローにフブキも呼ばれたらしかった。

「ねえ、日菜佳。他に気になることはある？」

「えつとですねえ。なーんか心配がおかしいです。出たり出なかつたり、安定してないと言うか……。なんか条件がまずくて、ちゃんと育たなかったのかな？ とか思ったりもしてたんですが」

魔化魍にもイレギュラーはある。生育条件がわずかに外れ、そのせいで充分成長出来なかった個体もいるのだ。それが放置されたまま、姫と童子が新たな固体を育て始めたり……。今回はそういった特殊なケースかも知れない。

「判りました。じゃ、出動します」

「ああ、知つての通りサポーターの数が少なくてね。香須実かすみに二人分のキャンプを用意させるから……」

サポーターは大変だ。あらためてそう思うフブキであった。

『「たちばな」を出した時、フブキのバイクが停めてあるのを見てダンキが尋ねる。』

「フブキ！ お前“銀”しづめで先行するの？」

「うん。そのつもりだけど」

「じゃ、俺は弟子候補を拾ってから向かうよ。なんか伝言は？」

「……いや」

フブキは短く答える。そして、オフロード仕様のバイク“銀”に乗り、走り去るのだった。

くくくくくくくくく

突如、明日夢の携帯は鳴った。

慌てて出るとダンキで、『入学早々悪いんだけど、出勤出来るかな？』と聞かれる。体調は今ひとつだ。でも、便秘くらいで体調不良だなんて言いたくない。

明日夢は、

『はい！ 行けます！』

そう答えたのだった。

入学式を終え、クラス分けも決まり……無事、ひとみと同じクラスになれてホツとする。だが、その視線の先にいたのは、天美あきらであった。なんと、あきらまで同じクラスなのだ。

「あの、よろしく」

小さい声で話しかけたら完璧に無視され、もう二度と話しかけるもんか、と心に決める明日夢だった。

入学式の日は割りとすぐに終る。

予定通りの時間に、明日夢は裏門の近くに立っていた。母には夜までに戻ると連絡を入れてある。仮採用の段階なので、母にはまだ話を通ってはいなかった。鬼の弟子に本採用となると、最初にフブキが名乗った オリエンテーリング団体『猛士』に所属するレスキューメンバー、という肩書きが貰えるようだ。

「レスキュー候補生として訓練する、という名目で、お母さんから許可を頂くからね」

勢地郎がそう言っていた。

「よう明日夢！ 悪いな、待たせたか？」

「いえ……あの、よろしくお願いします」

「こつちこそ、よろしくなっ」

ダンキはフブキより二歳年上らしい。でも鬼を志したのは同じ時期だという。

「俺はさ、天才肌でソツコーで変身出来ただけどさ。でも、細かいことが苦手なんだよなあ。DA起動させたり、変身も中々コントロール出来なくて……結局、独立まで二年掛かっちゃってさ」

明日夢はダンキにフブキのことを聞いた。奥武蔵の一件以来、一度も会っていないのだ。『たちばな』に出入りする回数は増えたのに、おかしな話である。

どう考えても、フブキに避けられている、としか思いようがない。明日夢はそれをダンキに尋ねた。

「うーん。“鈴の鬼”ってのは厄介だからなあ。難しいことは俺には判らんが……。あ、そうだ。今から俺らが向かうのが、中禅寺湖畔だろ。フブキも結構近くなんだ。山の反対側にベースキャンプを張ることになってる。時間見つけて連れて行ってやるからさ、直接聞いてみるよ」

ダンキはそんな風に言ってくれた。

「構わないんですか？」

「あいつさ、今ひとつ不調みたいだから……。明日夢のことが関係してるかどうかは判らないけどな。あ、おやつさんには内緒な」

そう言つとダンキは大きな口を開けて笑う。屈託ない人懐こい笑顔が、出逢つた時のフブキやイブキ、戸田山を思わせる。

もちろん、イブキの女性受けしそうなルックスとは逆で、ダンキは男臭いタイプだ。だが、鬼になる人は皆似てるんだな、そんな感想を抱きつつ……。

明日夢は心の中にあきらを思い浮かべ、ため息をついたのであった。

十一之巻「呼び合う師弟」(一)(後書き)

2ヶ月以上もお待たせ致しました(平伏)

十一之巻は全三話です。

出来る限りサクサクとUPします。

よろしければ、ご覧下さいませm( )m

## 十一之巻「呼び合う師弟」(二)

山間に広がる畑のあぜ道を、一人の農夫が歩いていた。

籠を背負い、手に鋤くわを持っている。そんな農夫の前方に一人の男が現れた。どうにも田舎の畑仕事には似合わない、妙な姿をしている。

【うちのこのために、あなたの命もらうから】

女の声で恐ろしい宣言をされ、農夫は二、三步後ずさった。

【もしかしていやなのか】

今度は背後から怪しげな男の声が……それは女の姿をしている。

農夫は声もなく、立ち尽くすだけだ。その瞬間。

【よーい】

【どろ】

掛け声と共に男女が突っ込んでくる。数秒後、農夫の体に人がぶつかったとは思えない衝撃が走った。そうまるで十トンのダンプが衝突して壁に挟まれたような衝撃……。

姫と童子は農夫を殺害し、餌を手に入れたのである。

薄暗い山中、巨大な口が開き、その中に農夫は投げ込まれた。

姫と童子は目の前に広がる壁を、愛しい我が子を見つめるように眺めている。闇が覆いつつある森に、魔化魍が餌を噛み砕く、背筋の凍るような音が広がった。

その時だ。姫と童子の前に黒装束に身を包んだ謎の男が姿を見せる。奇妙な杖を持ち、目だけが異様な光を放つ。二体はゆっくりと歩み寄ると、男の前に跪いた。

【ありがたく、ちょうだいいたします】

声を揃え、二体は男に頭を下げる。

すると、男はピンポン玉大の黒い塊を取り出した。その直後、姫の口が裂けんばかりに開き、男は黒い塊を喉の奥……内臓に届くほど押し込んだ。

同じ怪しげな儀式を童子も行い……二体に眼球は赤く不気味に光ったのだった。

く\*く\*く\*く\*

栃木県の日光、男体山の麓から少し奥にはいった場所が、いつものベースキャンプ地だ。

おそらく、一時間もすれば香須実が“雪花”で到着するはずである。フブキはバイクをそこに置き、DAを取り出した。いつものハシヨクヒヨウと、他の二枚は新型のアサギワシとキアカシシだ。つい先日、イブキとあきらで最終チェックをしていたDAであった。

フブキは鈴の音でDAを起動させ、山中に放つ。

そのまま、自身も山の中に足を踏み入れたのだった。

四月、花冷えの時期である。

もうそろそろ、冬の魔化魍は出現しなくなり、気温が上がることにフブキの力も落ちるのが通常だ。極端に弱くなるということではないが、やはり、凍らせるためには外気温の後押しも重要なのである。



る。

DA・ハシヨクヒヨウの後を追い、山頂間近まで登ってしまった。さすがにこれ以上はと思い、フブキが引き返そうとした瞬間、辺りに声が響く。

【鬼さんこちら。手の鳴るほうへ】

ハツとして身構えたフブキの左右から、姫と童子が突っ込んできた。

ギリギリまでその場に止まり、プレスされる寸前　フブキは地面を転がり奴らの攻撃から逃れる。

「ったく。荒っぽい連中だな。お前たち、又リカベの姫と童子だな」

起き上がると同時に、フブキは鈴を鳴らした。変身鬼鈴“金剛”をフブキは額に鬩し……彼女は、凍えそうな白く冷たいカーテンに包まれる。数秒後、それを振り切って現れたのは　吹雪鬼であった。

しかし、ほぼ同時に彼らも怪童子、妖姫へと変身している。だが……それだけではなかった。

二体はさらに、体をくねらせ始めたではないか。奴らの黒っぽい体が、その色を変えつつ、一回り大きくなる。それはまるで、灰色の甲冑かっせうを身に着けたみたいだ。

「なっ……何？」

二段階の変身をした二体の手から、鋭い剣が飛び出した。そのまま、二体は一気に吹雪鬼との間合いを詰める。

「出でよつ！ 氷刃！」

一瞬、啞然とした吹雪だが、のんびりと驚いている暇はない。すぐさま氷輪を取り出し、氷の刃を構えた。だが、二段階で変身した二体の体は、恐ろしく頑丈であった。

連中の剣をかわし、体に氷刃を叩き込んでもかすり傷一つ付かない。

鎧化した妖姫を蹴り飛ばし、同じく鎧化した怪童子が振り下ろす剣を氷刃で押さえた。そこにわずかな隙を見つける。吹雪鬼は渾身の力を籠め、右手の鬼爪を怪童子の腹に突き立てた。

だが……。

なんと、鬼爪が折れたのだ！

「クツ！ 痛つう！」

それは鬼となって六年、初めての経験であった。

吹雪鬼は驚き、慌てて鎧化した怪童子から飛び退いた。しかし、吹雪鬼の動揺を覚ったのか、二体は恐ろしいスピードで吹雪鬼を攻め立てる。

今まで、姫と童子相手の戦闘でこれほどまでの苦戦を強いられたことはなかった。

「出でよつ！ 氷壁！」

次々と攻撃を仕掛ける二体を、氷壁で防御する。だが、氷壁は一面、一方向のみの防御壁だ。前後左右から挟まれると効果がなくなる。

「チツ！」

三十六計逃げるに如かず……あまり好きな戦法ではないが。この際、せいたく警沢は言っておられない。

逃げる隙を作るためDAを放とうとするが……。その隙すら見つけれられない。二歩、三歩と吹雪鬼は後退を余儀なくされる。致命的な一撃を喰らうまいと、吹雪鬼はひたすら急所を庇った。

さらに一歩……二歩と退いた瞬間、吹雪鬼の左足は地面を踏み外す。

(しまった！)

気づかぬうちに崖っぷちに追い込まれていたのだ。体を捻り横に逃げようとした。そこを、鎧化した怪童子の鋭い剣が切り裂く。

吹雪鬼の右のわき腹に、焼け付く痛みが走った。避ける間もなく妖姫の剣を視界に捉え。吹雪鬼は覚悟を決め、崖下に滑り落ちて行くのだった。

くくくくくくくく

「痛つつう」

中々痛みの治まらない腹を抱えつつ、明日夢はダンキの手伝いをしていた。痛みは腹の真ん中から右下に移った感じだ。

だが、腹痛くらいで出動を断われれば、あきらみに馬鹿にされるのは目に見えている。それが悔しくて、やせ我慢を続ける明日夢であった。

「悪いな、明日夢。ホントならサポーターが付いてくれるんだよなあ。フブキのほうが終わったら、香須実ちゃんがこっちに来てくれる予定だから」

「両方なんて、大変なんですネサポーターって」

「鬼もそうだが、サポーターも少ないからな。地味で目立たない、それでいて命懸けの“人助け”なんて、モテない商売だしな」

明日夢はふと思いついて聞いてみる。

「あの……仕事ってことは、お金がもらえるってことですか？」

「一応な。俺らも食っていかないとならないだろ？ 非公式……いや、未公表、だっけか。猛士は国の機関らしいからさ」

その金額を聞いて明日夢は複雑な気分だった。

公務員から賞与を引いた程度の金額だ。まあ、福利厚生はきっちりしていて、猛士専用の病院もあるし、車両も支給で住居も確保してもらえる。光熱費も猛士持ちだ。

それから、なんと弟子にも出勤に応じて手当てが貰えると言っただ。……微々たるものではあるが。

「ただ服代がなあ。支給品もあるけど、自前を一瞬でパーにしたときはシヨックだな……うん」

そう言えば、変身のたびにフブキも服が消えていた。テントの中で解除したら全裸だと言われて明日夢はひっくり返るほど驚いたことを思い出す。

「はあ。それは大変ですよね」

将来のことを考えつつ、しみじみと呟く明日夢であった。

## 十一之巻「呼び合う師弟」(三)

「こんにちは」

一旦家に帰り、私服になった持田ひとみが、甘味処『たちばな』にやって来た。ひとりである。

「あ、いらっしやいませえ」

暖簾をくぐり、日菜佳がにっこりと微笑んだ。

だが、今ひとつ、ひとみに元気がない。日菜佳はお茶をテーブルに置きながら、心配そうに声を掛けた。

「どうしました？ 今日入学式だったんですよね？ あっ！ 担任とかクラスメートとか……気に入らなかった、とか？」

「いえ、そうじゃないんです。安達くんが」

「明日夢くん？ えつと彼は」

「聞いてます。高校に入ったら、オリエンテーリングのレスキューになるために訓練を始めるって。まだ、お母さんには言ってないみたいだけど。それってココが窓口なんですよね？」

少し批難めいたひとみの口調に、日菜佳はぐつと息を飲む。

迂闊なことを言ったら、また父や姉に大目玉だ。

「えつとお」

「だからブラバンには入らないって。せっかくチアに入って、運動部の応援とか一緒に行けると思ったのに……」

「……はあ」

「あ、いえ、そうじゃないんです。それは仕方ないし……ただ、友達くん、今日はあまり元気がなくて。朝からお腹の調子が悪いって言ってたから。それなのに、家にいないからちよつと心配で……ココにもいないんですよね？」

初めて聞いた明日夢の体調不良に、嫌な予感を覚える日菜佳であった。

くくくくくくくく

「うん。じゃあフブキは無事なんだね。それは良かった」

ひとみが帰った後、日菜佳は明日夢の件を勢地郎に報告しようと地下に下りて行った。

すると、そこにはみどりもいて、勢地郎は電話で話している。相手はどうやら香須実らしい。しかし、父の顔はかなり深刻そうだ。地下室の空気は恐ろしく張り詰めていた。

日菜佳はこそっとみどりに質問してみる。

「フブキさんに何かあったんですか？」

「うん。鎧姫と武者童子が出たらしいの」

「よろいひめ？ なんですかソレ」

珍しくみどりの声も緊張している。だが、日菜佳には初耳であった。

みどりは、檜材の一枚板で作られたテーブルに古文書を広げる。

その中に描かれていたのは、ごつい鎧を身に着けたような姫と童子の姿だった。

「これが鎧姫と武者童子。突然変異か、何か特別な条件下の二段変身か……まだ判明してないんだけど。第一、これまで架空だと思われていたのよ、二段変身なんて」

香須実がベースキャンプ予定地に到着し、作業を終えかけた時、フブキが戻ってきた。

その鎧姫たちに襲われ、フブキは崖下に飛び降りて逃れたという。フブキの氷刃も鬼爪も歯が立たなかったと聞き、日菜佳も驚きを隠せない。

「うん。うん。判った。ダンキくんにはこっちから連絡しよう。うん、対策が出来次第連絡する。無茶はしないように。はい、じゃ、よろしく」

「あつ！ ちょっと待って下さいまし」

日菜佳は慌てて電話に向かって言った。

「フブキさんに伝えてください。明日夢くんなんですけど、どうも体調が悪いみたいで……出来れば早めに引き上げたほうが。何と言っても初陣ですし……」

『……判った。こっちの段取りが終り次第、香須実にダンキのほうに回って貰うから。それも伝えておいてくれる？』

少し間があつて、フブキが返事をしたのだった。

くくくくくくくく

右手の拳に裂けたような傷跡があった。

ほとんどの傷は自力で治すが、鬼爪の傷は再び使えるのに丸一日はかかる。その証拠にわき腹の傷はすでに塞がっていた。

香須実に薬を塗ってもらいながら、フブキは考え込んでいた。

氷輪では敵わない。だが、仕切り直せば勝機はある。問題は、この異変が突発的なものか、今後も続くものか、だ。鎧姫と武者童子、

この二体を一人の鬼で倒すのは厳しいだろう。対策はおやつさんとみどりが古文書をひっくり返して探してくれる、としても……。

明日夢の件も気になった。ダンキはアバウトで気の利かない男だ。弟子の不調に気づいてくれるだろうか？

(……無理だろうな)

フブキが頭を抱えた時、香須実の携帯が鳴った。

「え？ 連絡が取れないって……うん……うん」

慌てた香須実の声にフブキも立ち上がる。

「ダンキさんが、鎧化の情報を受ける前に明日夢を同行して出撃したってことね？ フブキ、どうすれば……え？ フブキッ！」

香須実は電話口を押さえたまま話す。そして、彼女が振り返った時、フブキは氷輪を手に駆け出した後であった。

く\*く\*く\*く\*

探索のためのD Aが戻ってすぐ、ダンキらは出動した。

明日夢のことは迷ったが、D Aの情報では魔化魍は「ヌリカベ」。太鼓の鬼であるダンキの専門だ。慣れた相手なら、と、ダンキは明日夢を同行したのだった。

ちょうど目標の地点に差し掛かった時。

【鬼さんこちら。手の鳴るほうへ】



瞬時にダンキの中に緊張が走った。

「おいっ、明日夢、木の影に隠れて見てるんだ。絶対に出て来るな  
よ」

「は、はいっ」

明日夢を下がらせ、ダンキは腰から変身音叉おんさ“音角おんかく”を取り出した。太鼓の鬼共通の変身具である。

二つ折りの音叉を手首のスナップで真っ直ぐに伸ばす。手近な木を掠るように叩き、高域の音を鳴らし、額に翳した。一瞬で青い炎がダンキを包む。

炎を振り払い、姿を見せたのは一本角の青い鬼。弾鬼であった。ところが、弾鬼の目の前で童子たちも二段変身で鎧化する。

「な、なんだ、こいつら」

鎧姫と武者童子は容赦なく弾鬼に襲い掛かった。

接近戦は苦手ではない。弾鬼は両手に音撃棒おんげきぼう“那智黒なちくろ”を構え、交戦した。だが、その予想外の強さに驚く弾鬼。

自分独りなら何とでもする。だが、彼は今まで弟子を抱えたことがなかった。いつも通り、と思つてやって来たのがそもそも間違っていたのだ。

弟子やサポーターの安全確保は鬼の役目である。それは、彼自身の師匠に嫌と言うほど叩き込まれていた。

鎧化した二体は、普通の妖姫や怪童子とは比べ物にならないパワーで弾鬼を攻め立てる。

(これは……ヤバイぜ)

弾鬼は明日夢の身に危険を感じた。

「おいっ！ 明日夢、逃げろっ」

チラチラ振り返るが、明日夢の動く気配がない。

「明日夢っ！ さっさと逃げねえか！」

弾鬼の声に明日夢は木にもたれ掛かり、フラフラと立ち上がった。だが、数歩で蹲ひずくまつてしまふ。

この時、明日夢の体を急激な腹痛が襲っていた。

痛みと嘔吐感そして眩暈まで感じ、立つことも出来ない。

その時だ。弾鬼の那智黒をすり抜け、鎧姫が明日夢に向かった。そして追いつくなり、鋼のような剣を明日夢の背中に振り下ろす！ 弾鬼は必死になって鎧姫に飛びつく。だが、背中を見せた隙に、武者童子に剣が弾鬼の肩口から背中を切り裂いた。

「グウツ！」

弾鬼は息が詰まる痛みを感じ、喉の奥から呻き声が漏れた。

「あ、すむ……」

渾身の力で鎧姫を放した瞬間、蹴りを入れた。続けざま、那智黒に気を籠め、烈火弾を二体に叩き込む。二本の音撃棒から炎の玉が鎧姫と武者童子に炸裂した。

赤い炎と立ち上る煙に……

（やったか？）

だが、弾鬼の期待は虚しく砕かれた。まるで埃でも払うような仕事で、鎧姫と武者童子は同じ場所に立っている。

刹那 弾鬼は明日夢を抱え身を翻した！

「フブキ……さん」

明日夢は薄れゆく意識の中、フブキの名を呼んだ。立ちたいのに立ち上がれない。こんな経験は初めてで……ふと目を開けたとき、明日夢は弾鬼の肩に担がれていた。

そして、明日夢の手に真っ赤なものがベツトリと付いている。それは弾鬼の血であった。自分のせいだ、なんて役立たずだ。そう思うと悔しくて堪らない。

「ダンキさん……僕を置いて行って……ください」

明日夢がそう言ったとき、弾鬼は苦しそうな息で答えた。

「いいから黙ってる。……弟子を置いて逃げる鬼なんざ……鬼じゃねえ」

そう答えた直後、弾鬼は止まった。

武者童子が先回りして弾鬼の前に立ちはだかったからだ。後ろには鎧姫も追いついている。

弾鬼は明日夢を地面に下ろし、那智黒を構えなおした

直後、DAアサギワシがアカネタカの小队を引き連れ、鎧姫に飛び掛かった。

そして、武者童子を背後から斬りかかったのは吹雪鬼である。

「お前の相手は私だ！ 弾鬼、こっちは任せて傷を塞げ」

「あ、ああ……すまん」

武者童子と睨み合い、吹雪鬼は明日夢を守るべくゆっくりと動いた。

傷を塞いだ弾鬼の前には、DAを払い落とした鎧姫が立ち上がり

……。

十二之卷「預ける命」につづく

十一之巻「呼び合う師弟」(三)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

すみません、弾鬼が好きなもんでかなり鼻屑してカッコイイかも(苦笑)

ふと気が付けば桜の時期に追いついてしまいそうですね…orz

あきら怖いですか？なんか、明日夢もあきらにびびってそうです(^^:)

でも、元々あきらのポジションは「明日夢のライバル」だと思うんですよ。

あきらが本来の役目を果たさなくなってしまったので、後に京介というキャラが出てくることになったのだと思うのですが…どうでしょう？

(本作では京介は出て来ません。)

次回、十二之巻「預ける命」…武者童子と鎧姫戦決着です。(一応、ヌリカベも)ザンキさん、本編初登場!!またまた落ち込む明日夢ですが。ようやくフブキも決心します。

ということとで、また…いつの日か(こらっ)…出来るだけ早くうちに更新します。どうか見捨てないで下さいm( )m

## 十二之巻「預ける命」(一)

明日夢は都内の病院に運ばれた。

そこは一般の患者もいるが、院長が猛士の協力者という病院だ。医師も猛士関係者が多く、鬼の体を熟知している。明日夢は鬼ではないし、現在は弟子候補生という微妙な立場だ。しかし、彼に鬼の適性があることは疑いようのない事実で、しかも出勤中のアクシデントである。勢地郎の判断で、明日夢は急遽この病院に運ばれたのだった。

ストレッチャーに乗せられ手術室に入る明日夢をフブキは見送った。

診断の結果は……急性虫垂炎。それもかなり我慢していたため、腹膜炎の一步手前で緊急手術が必要だという。

春とはいえ独り佇む病院の廊下は肌寒い。

あの直後、武者童子と鎧姫は身をくねらせ始め……なんと吹雪鬼らの前から撤退したのである。明日夢のこともあり、吹雪鬼は深追いは止めて、弾鬼と共にベースキャンプまで戻った。

ダンキの傷は鬼の力で塞いだものの、出血が多かったせいかわ彼の顔は真っ青になっていた。フブキは半ば強引にダンキも病院まで引っ張ってきたのである。結局、大事には至らなかったが……。

廊下を走る音が聞こえた。フブキが椅子に座ったまま顔を上げると、看護師の控え目な叱責に大袈裟なほど謝る女性の声が続く。手術室の前に近づく女性の影は……明日夢の母・郁子であった。フブキはサツと立ち上がり、頭を下げる。

「今回は私が付いていながら、本当に申し訳ありませんでした」  
本来ならダンキの役目であろう。だが、自分が待つと言って彼を先に山に戻させたのはフブキだ。ダンキは多くは語らず「頼む」と一言だけ口にした。

「いえ、とんでもありません。お仕事の邪魔をしちゃって。こちらこそ申し訳なくて。もう二度と……」

「いえっ！ 明日夢くんは私たちの仕事に興味を持って見に来てくれたんです。それを、気配りが足りませんでした。本当にすみません」

お互いにしばらく「いえいえ、こちらこそ」と謝り合っていたが……。明日夢の手術が無事終わり、今夜一晩集中治療室に入ることになる。付き添うという郁子にフブキは仕事があるので、と断わり、ICUの前から立ち去ったのだった。

）＊）＊）＊）＊）

なぜだろう？

あきらから弟子にして欲しいと頼まれた時、こんな感覚はなかった。“鈴の鬼”というだけでなく、様々な理由からあきらを拒絶したが、後悔したことは一度もない。

だが……明日夢は別だ。自分にも他人にも上手く説明できず、彼女は困惑の只中にいた。

フブキはかなり長い間病院の玄関を逡巡し……。やがて身を翻すと外科病棟へ向かう。そして、一つの病室に吸い込まれて行くのだった。

窓際のベッドに独りの男性が横たわっていた。

ベッドヘッドのネームプレートには『財津原』の文字が……フブキの師匠ザンキである。時刻は既に〇時。とうの昔に就寝時間は過ぎていた。出直そう、とフブキがため息を吐いた時

「フブキか？ どうした？」

「あ、すみません。起こしてしまいましたね」  
「いや……」

窓の外に桜が見えた。

自然の中で過ごすことが多かったせいだろうか。ザンキはコントロールされた空調から出る風は好きではないようだ。フブキもそうで、鬼たちもほとんどがそうである。今夜も、窓を開けたまま寝ていたらしく……風に煽られた数枚の桜の花びらが掛け布団の上で踊っていた。

ザンキは口数の少ない男だ。フブキも黙り込むせいか、この二人が一緒にいる時は、会話が長く続かないのが常である。ここに弟子子の戸田山がいれば、独りで煩く騒いだらう。

もう一枚、風に誘われピンクの花びらが舞い込んできた。フブキはスツと手を伸ばし、それを人差し指と中指で捉えた。

「一つ、聞きたいことがあります」

「なんだ？」

「私を弟子にされたこと、後悔していませんか？」

フブキは音伽で変身は出来ず、雷撃を受け継ぐことも出来なかった。変身後のスタイルもそうだ。脳裏に刻んだ鬼の姿……ようするに、師匠と瓜二つになるのが弟子の特徴だ。そのため、師匠の名を聞かずとも、鬼の姿を見ただけで誰に師事しているかベテランには



判るという。

吹雪鬼は斬鬼に形は似ていても、色は全く違う。そして、変身した戸田山を遠目に見たときの衝撃。あれこそが弟子のあるべき姿であろう。フブキは三年以上もザンキに無駄な時間を過ごさせたのではないか？ そんな思いに囚われていた。

それと同時にフブキの中に芽生えた思い。

自分の心と形を誰かに伝えたい。“鈴の鬼”ではなく、吹雪鬼として闘う自分を、誰かに覚えていて欲しいのだ。だが……果たして自分にその資格があるのだろうか？

「お前はなんで俺の弟子になったんだ？」

「……それは、兄と父を失って」

「それは鬼の弟子になった理由だろう？ 俺の弟子になった理由だよ」

「えっと、それは……ザンキさんに、会った……からかな？」

答えながら、自分も戸田山と変わらない、とフブキはポリポリ頭を掻いた。

すると、ザンキは軽く笑って言ったのだ。

「そんなもんだ。会った瞬間に師匠は判る。弟子もそうだ。理屈じやない。フブキ、お前が俺を師匠にしてくれたんだ。後悔したことは一度もない」

ザンキは目を閉じ静かな口調で言った。

窓の近くでフブキが離れた花びらは、風に乗りひらひら舞いながら桜色の中に消えた。

「……師匠、ありがとございます」

小さな声で呟き、病室を後にするフブキだった。

くくくくくくく

「サポーターを独り残して行くなんて！ フブキさんらしくありません！」

それはイブキの弟子、天美あきらであった。

フブキがザンキの許を訪れていた頃、栃木の中禅寺湖畔ではイブキとあきらが香須実と合流していた。鬼にとつて、弟子とサポーターの安全確保は義務である。それを、魔化魍の出現が確認されている現場にサポーターを置いて鬼がいなくなるなど、論外であった。

「そうカリカリしないの。フブキだって判ってるからイブキくんたち連絡したんじゃない」

「でもっ！ もしすぐに来れる場所にいなかったら？ 独りきりの間に香須実さんが襲われて……万ーのことがあったら」

香須実も諭そうとするのだが……。両親を亡くしたあきらにとって、フブキの存在が如何に大きいか、香須実にもよく判る。そして、天才少女と呼ばれながら、最後の段階で鬼に変身出来ない苦惱も。

加えて、いつもは飄々としているイブキが、この弟子にだけは手を焼いているのが見て取れ……。イブキと共に口を閉じる香須実であった。

十二之巻「預ける命」(一)(後書き)

3ヶ月以上もお待たせ致しました：待ってない？失礼致しました(平伏)

十二之巻は全三話です。

(二)は明日中に、(三)は今週中になるべく早くUPします。  
よろしければ、ご覧下さいませ m ( ) m

## 十二之巻「預ける命」(二)

いよいよ明け方近くに、フブキは香須実らの待つベースキャンプに戻って来た。当然、サポーターを残して戦線離脱したことを詫びる。

フブキを見た途端、噛み付くように責めようとするあきらをイブキが諫めるが……。

「どうしてイブキさんはフブキさんに頭が上がらないんですか？」

“鈴の鬼”は凄いかも知れませんが、イブキさんは宗家の鬼です。こういった場合はきちんとイブキさんから注意すべきだと思います！」

そんな弟子の言葉に、珍しくイブキも感情を露にする。

「フブキさんにはフブキさんの考えがあるんだ。それに……師匠や先輩に対する口に利き方に気をつけなさい。鬼に変身出来ないのは能力じゃない。あきらのもういった心構えに、問題があるんじゃないのか？」

「イブキく……」

香須実は睨み合う師弟の間に入ろうとした。だが、それをフブキが止める。

こんな風に言ってもあきらが傷つくだけで伝わらない。そう香須実の目は言っていた。それはフブキも同意だ。しかし、あきらが師匠はイブキなのだ。

そして今のフブキには、あきらが鬼に変身出来ない理由にも見当がついていた。

フブキはイブキらに向き直ると、

「インターバル中に呼び出して悪かった。二度と、こんなことがないように気をつけます。すみませんでしたっ！」  
体育会系のノリで姿勢を正して一気に頭を下げる。そんなフブキの様子にイブキとあきはお互いから視線を逸らし、バツが悪そうに俯くのだった。

フブキが変わった？

香須実はこの時、フブキを取り巻く空気の変化に気づき始めていた。

くくくくくくくく

明日夢は全身に強い光を感じる。

(え？ 朝？ ……いや、ひよつとして昼？)

重い<sup>まぶた</sup>瞼を懸命に押し開け、目を開くと……そこにはなぜか戸田山の顔が。

「あ！ 明日夢くん、気が付きましたか？ 明日夢くんが目え覚ましたっス」

戸田山は相変わらず大きな声だ。明日夢も一瞬、ここが病院で自分が出勤中に倒れたことを忘れそうになる。戸田山から、明日夢の母はさつきまで付き添っていたが、仕事があるので引き上げた、と聞かされた。そして、朝の登校前に持田ひとみが見舞いに来てくれたことも。

「いやあ、偶然だな。ひとみと明日夢くんが友達なんて」

と、戸田山はひとみを呼び捨てでかなり親しげな口調だ。理由を

尋ねると……何とひとみと戸田山は従兄妹だというのだ。  
そんな明日夢が一番気になったのがダンキのことであった。

「あの……ダンキさんは大丈夫でしょうか？ 僕を庇って童子に斬られたんです」

「ダンキさんっすか？ 全然オツケーっす！ 一応診察して貰って、夜のうちに仕事に戻ったって言っていました」

その言葉に明日夢は心底ホツとする。

そして、あの時フブキの声を聞いたのは幻ではなかったと聞かされた。フブキが助けに来てくれなければ、明日夢もダンキも危うかった、と。

それを聞き、明日夢は悔しさと情けなさで涙が浮かんできた。

あなたに鬼の適性はあっても、鬼になる資格はない。自分を守れない人間には誰も守れない。あなたに鬼は無理です！

あきらのキツイ言葉が、耳の奥でガンガン響いている。

フブキと出会い、吹雪鬼の闘いを見て、明日夢の中の何かが変わった気がした。でも、“気がした”だけなのかも知れない。頭もスポーツも十人並の自分が、体を鍛えて変身する、誰かを助ける為に闘う……なんて、結局は無理だったのだ。

固く目を瞑り、歯を食い縛る明日夢も前に、ピンクの小さな花びらがひらりと舞い降りた。だが、今の明日夢にはそんな花びらなど目に映るはずがなく……。

「人生に無駄なことはない」

凜とした声が、あきらの台詞と明日夢の中の迷いを一瞬で打ち消

した。

隣のベッドとのカーテンが開かれたままだったらしい。

明日夢は咄嗟に、今の話を聞かれても良かったのだろうか？と考えたが「あ、ここは猛士専用の病室っすよ」と戸田山が付け足してくれた。

……と、いうことは。

戸田山やダンキより年上の男性がベッドに体を起こして座っている。穏やかな笑みを湛えた顔は、明日夢の胸の奥まで見透かすようで、彼は滔々と言葉を続けた。

「何事も 始める時と終りが近い時は焦るものだ。でも、考える時間が出来たと思えばいい」

名前を聞く前に、この人は鬼に違いない、そう確信する明日夢であつた。

く\*く\*く\*く\*

『たちばな』の地下では勢地郎にみどり、日菜佳が勢揃いしていた。テーブルの上は古い文献で埋め尽くされている。その一つを片手に、勢地郎が電話の最中であつた。

勢地郎が手にした巻物には鎧化した童子たちの絵が……。だが、巻物を広げていくうちに、どんどん鎧が剥がれて行くように見える。

『そう、そうなんだ。少しずつ剥がれているというか……溶けているというか……。とにかく、何かの参考にならないだろうか？』

電話の向こうでは携帯電話を片手に、フブキが考え込んでいた。

「ねえ、ダンキ。そっちは武者童子たちとどれくらい闘った？」

「えっ？ そうだなあ……」

ダンキは夜中のうちに戻ったものの、完全に童子や魔化魍の気配を見失い、フブキに合流していた。フブキの質問に、ダンキは指を折りながら何かを数えている。

「十分くらいかな？ それはどうした？」

「私の時は……十分もなかったと思う。もし、そうだとしたら……」

「そうだとしたら？ なんだよフブキ？ ……おい」

『あれ？ フブキくん？ おかしいな、切れたのかな？』

電話の向こうでは勢地郎も同じようにフブキの名を呼んでいる。

『あ、お父さん。香須実です。なんか……フブキに考えがあるみたいで……』

答えようとしないフブキに代わり、香須実が携帯を掴んで話そうとした。だが、横からサツとフブキが取り返し。

『おやつさん！ なんかいけそうです！ こっちは任せて下さい』  
妙に明るい声で返事をするフブキだった。

それから二時間も経たず、DARIヨクオオザルとルリオオカミが魔化魍を察知して戻って来る。

「童子らも近くにいますよね」

地図で里の近くまで下りていることを確認し、イブキが不安そうに口にした。

「そうだろうね。ダンキ、ヌリカベをお願いします。童子と姫は私が引き受ける」

「独りでか？」

「危険です。僕も応援に……」



驚くダンキと心配そうに共闘を申し出るイブキに向かって、フブキは足枷あしかせが外れたような、すっきりとした笑顔を見せて言った。

「大丈夫！」

スルスルと右手の包帯を外し、二・三回手を握り締める。最後にギョツと拳を固め「うん、大丈夫」もう一度言って、氷輪を手に出動したのだった。

## 十二之巻「預ける命」(三)

「あの……あの」

明日夢は隣のベッドの男性に、何と云って話し掛けたらいいのかわからない。すると、助け舟を出してくれたのは戸田山であった。

「あ！ そう言えば、明日夢くんは初めてでしたね」

そう云って紹介してくれた男性が、フブキと戸田山の師匠ザンキであった。

「は、はじめましてっ！ 安達明日夢、痛てっ……です」  
不意に体を起こすと、右の下腹部がピリツと痛んだ。

ザンキは軽く「ああ、よろしくな」と答えた後は、ひたすら戸田山が話し続けている。それによると……戸田山は以前警察官で、その頃、魔化魍に襲われたらしい。同僚の警察官が殺され、戸田山も食われそうになった時、斬鬼が彼を救った。戸田山に鬼の適性があると判ったのはその時だという。彼は既に二十六歳であった。

「じゃ、戸田山さんて警察を辞めて鬼の弟子になったんですか？」

「はいっ！ そうっす」

「あの……迷ったりしませんでしたか？」

「自分はこの時、初めて射撃場以外で発砲しました。でも、魔化魍にはまるで利がなかつたっす。こんな奴らが存在して、俺に倒す力があるんなら……鬼になるのは義務だつて。それに、斬鬼さんの姿が胸の真ん中にドンと居座つて、消えないんすよ。この人なら命を預けられる　そう思いました！」

戸田山の言葉は明日夢の心を貫いた。

明日夢の胸にも消えない鬼の姿がある。たとえ駄目だと言われても、資格がないと言われても、それでも師匠と呼びたいのは銀色に輝く鬼、唯ひとり。

明日夢は思い切ってザンキに尋ねた。

「あの、ザンキさんっ！ フブキさんの弟子には、絶対になれないんでしょうか？」

縋るような瞳で明日夢はフブキの師匠を見つめる。そんな明日夢にザンキの返した言葉は、

「明日夢くんだったな。俺に“なれない”と言われたら、君は諦めるのか？」

その答えは。

くくくくくくくくくく

「ダンキ！」

鬼二人はD A ルリオオカミの後を追ひ、山中を疾走した。そしてフブキはダンキの名を呼びながら急制動を掛ける。彼らの目の前に現れたのは魔化魍又リカベ。傍らに童子と姫を連れていた。

又リカベは既に成体、身の丈八メートルは超えている。軟体生物さながら足を器用に動かし、低木をなぎ倒すように、一直線に里に向かっていた。

「独りでいけるか？ と聞きたいトコだが……又リカベもほっとけねえな」

「うん、大丈夫だよ。十分粘れば勝機はある！ と思う」

「……おいおい」

気の抜けた様子だが、長い付き合いで気心の知れた二人だ。

変身しながら近づいてくる童子と姫を見据えつつ、フブキが軽く声を掛けた。

「さて、行きますか」

「よっしゃ」

ダンキの返事と共に、二人は同時に変身具を取り出した。フブキは金剛を、ダンキは音角を鳴らし……それぞれ額に翳した。そして吹雪と炎を振り払い、二人の鬼は一気に二段変身した武者童子らに突っ込んだ。

「出でよっ！ 氷刃！」

掛け声と共に、吹雪鬼が氷刃で武者童子らの剣を薙ぎ払う。その横を通り抜け、弾鬼は又リカベに突撃した。弾鬼を追おうとする鎧姫を、吹雪鬼が後ろから攻め立てる。しかし、二体の挟み撃ちにあつては吹雪鬼も見る間に追い詰められ。

吹雪鬼は隙を見つけて地面を転がり、二体と間合いを取った。そして、素早く鈴を鳴らし、みどりに渡されたばかりの新作DA・キアカシシとアサギワシを起動させる。キアカシシはルリオオカミの、アサギワシはアカネタカの連隊を率いて、なんと武者童子と鎧姫を攻撃し始めたのだ。お任せ機能が付いたのが、新作DAの特徴であった。

林の中で闘う吹雪鬼と違い、又リカベを追って崖を一気に滑り降りた弾鬼は、集落の手前で戦闘態勢に入った。

又リカベがローラー状になった体の前部を開き、そこに弾鬼を取り込もうとする。人間なら数秒で粉々に、鬼でも数分で碎かれるだ

ろう。

弾鬼はいつも通り音撃棒“那智黒”を両手に持ち、又リカベの足を狙った。触手のような足を片っ端から叩き落とし、又リカベの死角に音撃鼓“御影盤”をセツトする。

「いくぜっ！ 音撃打！ 破碎細石！」

弾鬼は腰を落とし、威勢をつけると怒涛のように音撃鼓を連打する。直接叩き込まれる音に又リカベは動きを止め、巨体の隅々まで清めの音が響き渡った瞬間 那智黒を揃えて、弾鬼は最後の一打を叩き付けた。

直後、又リカベは木っ端微塵に吹き飛んだ。

「もう……そろそろかな？」

吹雪鬼が口にした瞬間、DAを叩き落とし武者童子が彼女に突進して来た。

武者童子の剣を氷刃で受け、後方に蹴り飛ばす。だが今度は真横から鎧姫が斬り掛かって来たのだ。吹雪鬼が鎧姫の剣を避けたその場所に、武者童子の剣が投げつけられた。

鈍色に光る剣が吹雪鬼の左肩を貫き、その勢いのまま木に突き刺さる。白銀色の煌く体躯が裂け、鮮血が滴り落ちた。

「クウっ！」

そこをすかさず、鎧姫が身動きの取れない吹雪鬼に襲い掛かる。自由になる右手で鎧姫の剣を受け止めるものの……。間髪入れず、武者童子も狙ってきた。

（読みが甘かったか？ それとも時間が足りないのか……）

吹雪鬼が武者童子の攻撃に耐えようと腹を括った。その時だ、ようやく二体に異変が現れた。彼らもそれに気づいたらしく、慌てて吹雪鬼の前から引き上げようとする。時間切れで怪童子、妖姫に戻ったと同時に、吹雪鬼に刺さった剣は砂のように崩れて消えた。

「逃すか！」

吹雪鬼は体を撓<sup>しな</sup>らせ、氷刃を出したまま怪童子目掛けて矢のように投げた。氷刃は怪童子の背中に突き刺さり、ものの数秒で砕け散った。そして、一瞬立ち止まった妖姫に足刀蹴りを叩き込んだ後、右の鬼爪で腹部を刺し、一気に冷却。妖姫も粉碎したのであった。

気合を籠め、左肩の傷を塞いだ後、フェイスオフになる。

崖下に視線をやると、ダンキもヌリカベを倒し、フェイスオフで見上げていた。フブキが氷輪で軽く敬礼をすると、ダンキも撥を二回叩き、引き上げたのである。

くわくわくわくわく

五日後、明日夢は病院の屋上にいた。

ザンキは二日前に退院してしまい、病室は今、明日夢ひとりだ。

入院の翌日、ダンキが病院を訪れた。明日夢の不調に気付けなかった自分のミスだ、と頭を下げられ、明日夢は恐縮するしかない。だが、戦闘において全ての責任は鬼にある、とダンキは言う。

鬼というものの責任と義務。それらを思うと今までの明日夢なら

……自分にはなれない、と諦めてしまふところだ。でも今は違う。明日夢は心に決めていた。退院したらフブキに会いに行き、弟子入りを志願しよう、と。

(何度断わられても、諦めるもんか！)

その決意を、明日夢は思わず口にしていった。

「絶対、フブキさんの弟子にしてもらうんだ！」

「いいよ」

耳に飛び込んで来たフブキの声に、明日夢は驚いて振り返った。そこには、初めて会った時の人懐こい笑顔でフブキが立っている。そして、明日夢に向かって右手を差し出したのだ。

「私の弟子になる？」

その瞬間、戸田山が口にした「この人になら命を預けられる」その意味が明日夢にも判った。

「はい！」

明日夢はこの日、生涯に渡る師匠の手を取り、吹雪鬼の弟子となった。

く十三之巻「鈍る雷」につづく

十二之巻「預ける命」(三)(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

何か吹っ切れたようなフブキと明日夢です。一皮剥けた？(笑)

吉野の説得はこれからなんですが…まあ、どうにかするでしょう。  
本編と何が違うかって、風師弟が一触即発ですね(^^;)

次回、十三之巻「鈍る雷」…この辺りはほぼ本編と同じ斬鬼引退、  
轟鬼デビュー話です。本放送を思い出してお楽しみ下さい。  
ということ、また3ヶ月後……う、嘘です。

音撃斬を食らいそうなので、出来る限り早く頑張ります…orz



番外編「吉野の雪 前編」(前書き)

\*フブキが初めて変身する辺りの番外編、エイキを絡めて書いてます。

「なんか……ヤバイ気がするな」

三日前師匠から独立したばかりの鬼、鋭鬼が言った。

彼とは背中合わせに立っている。私たちの右手に怪童子が、左手に妖姫が立つ。そして、鋭鬼の正面にいるのは 全身真っ白で巨大な八本の足を動かす、まかもつ魔化魍・ユキグモ。

「それはさつき私が言った！ だから結界から出たらヤバイって！」

「エー気のせいってヤツで……」

「ダジャレ言ってる場合かっ！」

ぶん殴ってやるうか、と思っただけど止めた。一応、コイツは鬼だし……どうせ私は変身出来ないし。左手首に付けた皮製のブレスレットをギュツと握り、唇を噛み締める。

次の瞬間 怪童子が私に向かって飛び掛ってきた！

くくくくくくくく

そもそも何でこんな事態になっているか、と言えば……。

それもこれも全部、おつちよこちよいで楽天家のエイキこと、江え藤と瑛えい太のせいだった。

瑛太は私・藤倉双葉ふたばと同じ十八歳。彼は二年前、先代エイキさんの弟子になった。先代エイキさんは鬼の中では最高齢の四十代後半。この瑛太に会った瞬間、何か感じるものがあつたという。「鋭鬼」の名前を譲るべく最後の弟子を取った、と私の師匠ザンキさんから聞いた。

でも、ザンキさんや立花のおやつさんが「エイキも歳を取ったなあ」としみじみ言っていた意味が何となく判ったような気がする……いや、まあ、人のことは言えないけど。  
ちなみにこの瑛太、ごくごく普通の家庭で生まれ育ったヤツである。

「俺ってなんかガキの頃から妙なバケモンに好かれちゃってよあ」  
それが魔化魍だと知ったのは、先代エイキさんに出会ってからと言うんだから怖い。

「運がいいんだよ。まあ、任せとけ！俺が鬼になるからには、魔化魍なんざ左手一本さ！」

と高笑いしつつ弟子入りした五日目、又リカべの下敷きになり左手を骨折したというのだから笑える。……いや、笑えないのか？  
まあいい、とにかくそういうヤツだ。

今回、私がザンキさんと一緒に吉野に来たのは滝澤みどりさんに呼ばれてのこと。

みどりさんはたまに関東支部まで出て来るけど、ほとんど猛士の吉野本部で働いている研究員だ。私より少し年上で、ふわふわの長い髪をして、甘いマシユマロを口に含んだような声をしている。

彼女に比べて私は、いっつもジーンズにTシャツ、それかジャージ。生傷は絶えないし、口紅の一本も持ってない。身長も体格も標準以上、鍛えてるせいかなバストと言うより、厚い胸板だし……う、もうやめとこう。

でも、一番気になるのは、師匠が「みどり」と呼び捨てにする声だ。だから何って訳じゃないんだけど、みどりさんに会うと私はいつもイライラしてしまう。

もちろんこれは彼女のせいじゃない。みどりさんは良い人だし、今回だって私の為に色々調べてくれたのだ。それを、ひよっとしたらザンキさんの為？なんて思うのは失礼極まりない。

でも……ひよつとしたらザンキさんの為かも。

「はい、これが例の清めの鈴？金剛？よ」

そう言ってみどりさんは、私たちの前に白木の箱を差し出した。里の中央にある寺の本堂。ストーブはあるものの、冷たい風があちこちから吹き込んで全然役に立ってない。百畳くらいある畳の間に正座して、私はその箱を開けた。

中には黒い皮製の腕輪が一つ、手に取り、目隠しになってる部分をスライドさせると、そこには銀色の鈴が四個。チイリーンと儂く懐かしい音が本堂の空気を震わせた。

私はハツとして顔を上げる。すると師匠もこっちを見ていて、

「清んだ音だな……」

師匠はいつもの抑制を利かせた低い声でポツリと言う。

「とつても綺麗な音でしょ？ 私にも聞き取れる周波なのよねえ」  
みどりさんは耳が良い。というのが正しいかどうかは判らないけど、成長して一部の変身具の音が聞き取れるようになったという。もちろん、変身とかは全然出来ないらしい。彼女はその特性を生かして、変身具や音撃武器、ディスクアニマルの研究をしている。

もし、このまま行くと……私はみどりさんの弟子になっちゃうかも知れない。研究員に弟子制度はないから、部下？ 補助？ どちらにしても最前線からは遥かに遠い。

「？鈴の鬼？に関する噂は色々あって、私にもよく判らないところもあるんだけど。でも、双葉ちゃんがどうしても鬼になりたい、って言うなら……試してみる価値はあると思うの」

どうしても鬼になりたい。私は一縷の望みを託すように、その？金剛？を左手首に巻いた。

だからって、さあ変身しろって言われてもね……。

手本がないから、どうやって鳴らしたらいいわけ？ それに、どんなエネルギーを集めたらいいのかも判らないんだって。

一応、？音伽？の使い方は師匠から習った。鬼に変身する自分を思い描きながら、額……第三の目と呼ばれる場所に全身のエネルギーを集めるのだ。すると、目の辺りが熱くなるというか、痛くなるで、？音伽？を下に引くと弦が見え、それを指で弾いて音を出す。このさじ加減がまた微妙。自分が集めたエネルギーとピッタリ同調する音、って言われたんだけど……んなもの理屈じゃわかんないって！

同調した瞬間に力が増幅されて、それぞれが持つ属性の自然のエネルギーが集まるんだそう。それが人間の力を超えた時、体の変化を遂げて鬼になる。だから、普通の人間が間違っってそんな力を集めたら……死んでしまうらしい。

属性は基本的に鬼の適性と一緒。生まれた時から決まってる。同じ属性の師匠に惹かれるってことだから、私は雷属性なんだと思う……多分。

いざ変身！ って思った時、額の辺りはチクチクするんだよね。

脳ミソが爆発するんじゃないか、ってくらい熱くなって……。でも、急激に冷えて行く。

「俺がいたらやり難いだろう。里付近の森は結界が張ってあつて魔化魍は出て来ない。気が済むまで体を動かして、納得できたら試してみる」

師匠はそんな風に言ってくれた。

「……すみません。いざとなったら、なんだかザンキさんを裏切るような気がして」

「俺のことは気にするな。だが、双葉 もし変身出来た時、お前は？鈴の鬼？になる。生半可な覚悟じゃ務まらない役目を背負うこ

とになるんだ。だから、少しでも迷いがあるなら……？金剛？は使  
うな」  
「はい」

師匠は難しそうな顔で私を見ていた。

この時の私は？鈴の鬼？の重さも判らず、ただ、弟子なのに？音  
伽？で変身出来ないのが申し訳なくて……。  
使うのを躊躇っていたところに、やって来たのがエイキになった  
ばかりの瑛太だった。

番外編「吉野の雪 前編」(後書き)

半年以上放置の挙げ句、いきなり番外編ですみませんm(´▽`)m

羽 衣石 様のリクエスト、「御堂の書くエイキが見たい」と言う  
ことで…

きゃーごめんなさい。

エイキは後半に一杯出てきます(^^;) )

今週中に後半も更新しますので、もうちょっとお待ち下さい。

ここまで読んでくれた方、本当にありがとうございました！

「身長一六〇センチもないチビ」

瑛太はダンキこと段田大輔だんだいすけにからかわれて、二人はしょっちゅう取っ組み合いの喧嘩をしていた。そこに止めに入るのが、私より二歳年上の柴原省吾しばらうしやうご。

二年前の基礎訓練で、私たち四人は吉野の里に泊り込みの合宿をしたことがある。そのせいか、他の鬼たちに比べたら気心は知れる方だろう。四人の中で一番最後に弟子入りした省吾も、つい先日変身したと聞き……。その焦りから、私は？金剛？を試してみる決断をしたのだった。

「双葉、お前何やってんの？」

私は瑛太に声を掛けられ、周囲を見回してビックリした。  
ちよつと散歩するつもりが、かなり上の方まで登ってきている。  
自然の匂いと澄んだ空気があまりにも心地良かったせいだろう。

「あんだこそ、こんなとこで何してんの？」

「お言葉だな。決まってるだろ、鋭鬼襲名のご挨拶ってやつだ。吉野のお偉いさんに報告に来たんだよ」

「エイキさんも一緒に？」

「ああ、まあな……って、師匠は引退して江守さんに戻ったの！今のエイキさんはこの俺だって」

もちろん聞こえてたけど聞こえない振りで、

「そっかー。じゃ、エイキさんに挨拶しておかなきゃね。どこにいるの？」



「ああ、里の師匠の実家に……って、だからエイキさんは俺っ！」  
私は瑛太に背を向け、里に下りようと歩き始めた。

「あんたの師匠は里に実家があるんだっけ。便利なような、不便なような……。でも、頑張ったよね、おたくの師匠……」

「あたぼっよ！ エイキさんは最高の鬼だぜっ」

「……あんたがエイキじゃなかったの？」

「……」

こんな感じでおちよくり甲斐のある男だから、皆にいじられていく。私もついつい、日頃の鬱憤をこの瑛太で晴らしていると云っても……まあ、褒められた話じゃないけど。

里の近くはそうでもないが、隣の山を見ると綺麗に雪化粧している。ウインタースポーツはスキーもスケートも大好きだ。雪と氷の気配に引き寄せられそうになり、私は左手首の冷たい気配にビクツとした。

「瑛太、里に戻ろうよ」

私が声を掛けても瑛太は別の方向を見ている。

からかい過ぎて、機嫌を損ねたらしい。それが、エイキと呼ばないことに反抗してるのかも。瑛太は、なんとかってアニメやマンガの大好きなヤツだと聞いている。ほんと、ガキなんだから……私はブツブツ唱えながら、

「はいはい、エイキさん、里に帰りますよ」

わざとらしく、呼んでやった。

「……なあ、アレって、人じゃないか？」

隣の山に繋がる道をジッと見ていた瑛太がポツリと言った。

くくくくくくく

魔化魍に襲われ、命からがら逃げて来た人を保護して、私は里に戻ろうとしたのだ。

なのに、

「他にも襲われてる人がいるって言うじゃないか。俺は行くぜ！」

「ちょー待った！ 魔化魍が何かも判らないのに、勝手に行くのはマズイよ。里にはうちの師匠がいる。とにかく、戻って報告を」

「馬鹿野郎！ そんな呑気なこと言ってられるかよっ！ お前の師匠がどれほどのもんか知らないが、このエイキ様がチンピラ魔化魍の一匹や二匹、音撃でぶっ倒してやるぜ！」

だったら好きにしろよ、と言ってやりたい。

全く、コイツのこの自信は何処から来るんだ！？

「でも結界の外に出るのは……」

「ああ、お前はいいよ。師匠に無断で出勤したらヤバイんだろ？」

俺はホラ、一人前の鬼だからさ」

その台詞にカチンときて、

「判ったわよ！ 行ってやるうじゃない。でも、あんたが鬼なんだからね。私は襲われてる人たちを助けるだけ。ちゃんと連中を倒してよねっ」

とは言ったものの。

飛び込んできた獲物を、童子や姫がスルーしてくれる訳がない。

魔化魍もこつちを美味しそうに見ているような……気のせいだろう、うん。

飛び掛ってきた怪童子の攻撃を避け、私は雪の上を転がった。

起き上がり、体勢を整える前に怪童子の二撃目が 両腕で衝撃

を受け止めようとした瞬間、飛び込んできた鋭鬼が音撃棒？ろくしやう緑青？で反撃した。

黒っぽい色合いの鬼が多い中、この鋭鬼はブロンズ色のボディ  
新品の十円玉の色をしていた。二つの角は猫耳のようで……日菜  
佳は可愛いと言っていたが、鬼が可愛くていいんだらうか？ 普段  
が小柄なせいか、変身しても私より少し大きいくらいだ。  
それでも、鬼として戦える鋭鬼が、私には眩しかった。

「逃げろっ、双葉」

鋭鬼は背中を向けたまま叫ぶ。

「バカッ！ 仲間を置いて逃げられる訳ないだろっ」

素手で戦うのは限界がある。私にはDAを目くらましに放つぐら  
いしか出来ない。その間に鋭鬼が怪童子か妖姫でも倒してくれたら  
……。

そう祈りつつ振り向いた瞬間、鋭鬼はユキグモの足に蹴り飛ばさ  
れた！

「う、うわっ！ あ〜れ〜」

「ちょ、瑛太」

飛ばされたかと思っただ鋭鬼は高い杉の木に激突し、幹を滑り落ち  
るように根元まで下りてくる。

「うおーっ」

下まで来た時にはすっかり変身は解け……見たくもない素っ裸の  
瑛太を見る羽目に。

「みるなーっ！」

「んなもの、見せるなーっ！」

襲われていた人たちは結界の張った山の方に逃がした。  
ここに残ってるのは瑛太と私だけだ。

「やっぱマズイよ、逃げよう。あんたD A使ってなかったよね？  
私に貸してよ」

私のD Aは匣に使ってる。瑛太のD Aで里の師匠に連絡を取ろう  
と思ったのだ。

ところがっ！

「それは違う。使ってなかったんじゃないんだ。実は……忘れちゃ  
ってさあゝ。いやあ、参った参った」

私は思い切りグーで瑛太の後頭部を殴った。

こんなアホを信用して結界から出て来た私がバカだった。いくら  
D Aを使っても、鬼にもなれないのに。

七歳のとき、双子に兄が魔化魍に殺された。藤倉史矢ふじくらふみや 兄は生  
まれた時から強力な波動を持ち、凄い鬼の素質を持つ子供が誕生し  
た、と吉野でも騒がれたという。自分に鬼の適性がないことを悔や  
んでいた父は、史矢の誕生を喜び、誇りにしていた。

一緒に生まれた私のことは、グ コのオマケ程度だったけど。  
そんな兄が幼いながら私を庇い……。父は怒りの矛先を私に向け  
た。

「どうしてお前が生き残ってるんだ！」

何度も言われたその言葉は、今も私の胸に刺さっている。イザっ

て時に、どうせ自分なんか、って気持ちが前に出て、勇気が萎んでいく。

どうせ食われるなら、今度こそ自分が食われよう。こんなアホでも瑛太は鬼になれるんだ。私みたいな役立たずが、何度も生き残るべきじゃない。

「……瑛太、何とか立ち上がってよ」  
「あたぼうよ！ こちとら鬼だぜ」

瑛太は音撃棒を支えに立ち上がった。寒いし、痛いだろうに、何も泣き言を言わないのはさすがだろう。ちよっとだけカッコいいよ  
うな気もする……フルンでさえなければ。

太鼓の鬼は音叉を使うから、それを吊るしたベルトだけは残るんだ、と妙なことに感心しつつ……。

私が囿になってる間に、うちの師匠を呼んできて。そう言おうと思っただけだった。

「さて、もう一回行って来るぜ！」  
「え？ いや、もう……」

あんたには無理だつてば！

そう叫ぶ間もなく、瑛太は音叉を額に翳した。見る見る間に、彼の体はブロンズ色の炎に包まれる。炎を切り裂き、鋭鬼が姿を現した。

「双葉、お前は下がってるよ」  
「瑛太……無事に、帰ってきて」  
「任せとけて！」

力強く叫ぶと、鋭鬼は再び魔化魍たちに向かって突っ込んで行った。

「鋭鬼ーっ！」

私がそう叫んだ三十秒後

「あ〜〜れ〜〜」

鋭鬼はユキグモの一撃で吹き飛ばされ、同じ木に引っ掛かって落ちて来る。

「あ、あれ？」

「……お早いお帰りで」

私はもう一回グーを作った。

番外編「吉野の雪 中編」(後書き)

す、すみません。

前後編のつもりが…とても納まり切らなくなりまして…(^^^;) )

次でラストです…多分。

なるべく早く上げますので、良かったらご覧下さい(^^)ノ

「じゃ、もう一丁行って来るか！」

私が唾然としていると、瑛太は立ち上がり、再び音叉を翳した。炎が立ち上がるものの……弱々しくて、どんどん強くなる雪と風に消されてしまう。

鬼といつても人間なのだ。力には限界があり、そうそう何度も連続で変身出来るものじゃない。ましてや、瑛太は独立したばかりのド新人。要領も悪く、ロスも大きい。とにかく、奴の足元はふらふらだった。

「もう、無理だよ。私が気を引くから、その間に……」

「仲間は見捨てないって、お前が言ったんだろぅが」

「こんな時に揚げ足を取るんじゃないっ！」

「私は鬼にはなれない。だったら、あんたが助かった方がいいに決まってるじゃない」

「お前……ばか？」

DAを忘れるアホに言われたくないと思う。

私が黙っていると瑛太は、

「変身出来なくても、ここまで人助けに来て、生身で怪童子たちとやりあってさ。DAだって認めてんのに、何で自分のことが信じらんねーわけ？俺はハッキリ言って信念はない！けど、自分を信じてるぜ。絶対変身するし、ユキグモなんかに食われてやるもんか、つてな！」

そう言つと、瑛太は三度変身を遂げ、みたび魔化魍たちに向かったのだ。



理屈じゃなく、瑛太は凄いと思った。何の根拠もなく、そこまで信じられる。そして実現して行くのだから……だから、鬼になれるのだ、と。

どう見ても劣勢の鋭鬼に加勢したいけど、この体じゃ足を引つ張るだけになる。

チリン

清んだ鈴の音が左手から聞こえた。気のせいだ、だって、鈴は隠したままなのだから……私はそつとスライドさせ、四個の鈴を確認する。

その時、冷たい風が舞った。氷のような雪が肌に、髪に纏わり付き、それを振り払うように左手を閃かせたのだ。

チリーーン

さつきより大きな音で、はつきりと鈴の音色が雪山に広がった。左手首がドライアイスに突っ込んだような冷たさだ。私はごく自然な動作で、？金剛？を額に翳した。

刹那！ はじめは視界が、そしてあつという間に全身が猛吹雪に包み込まれる。冷たいというより痛い。はつきり言つと、メチャクチャ痛い。雪崩に巻き込まれたんじゃないかと本気で慌てふためいた。そして、思い切り腕を振り切った瞬間、目の前に怪童子が居たのである！

私は怪童子の攻撃を手刀で薙ぎ払い、反動をつけて胴回し回転蹴りを喰らわせた。一発必中、やけくその技とも言う。

雪の上に転がり、慌てて起き上がった時、怪童子は四散したのだ。な、なんで？ どうして？ 今まで蹴りくらいじゃビクともしなか

ったのにつ！？

「ふっ、ふたばっ！？ お前、何なんだ、その色はっ」

色？

そう思って自分の手足を見た瞬間、ひっくり返りそうになった。

銀色？ 私って変身したの？ でも、なんでこんな色の鬼い？？？

眩暈を覚えていたら、そんなことはお構いなしに妖姫が掛かってきた。今度は手に槍を持っている。斬られたらただじゃ済まない。いや、鬼の体だから対して傷つかないのか？ でも、ホイホイと試してみる気にはならない。

いきなりの変身で、私は武器の一個も持つておらず……。相棒のDAハシヨクヒヨウも、気が付けばその辺にはいなかった。やられたんだろうか？ それとも、見捨てられた！？ 妖姫の攻撃をかわしながら、周囲に目を凝らす……。シヨクの影も形もない。

こうなったら、斬られるのを覚悟で懐に飛び込んでやる！

私が腹を決めたその時

「双葉ーっ！ コイツを使えーっ！」

師匠の声が聞こえたと同時に、舞い散る雪を裂くように、音撃弦？ 烈雷？ が飛んできた。

私は？ 烈雷？ を掴むと、ふっと身を屈め、突っ込んできた妖姫を逆袈裟に斬り上げた。妖姫の体は真っ二つになり、掻き消えるように雪に見えなくなったのである。

師匠の顔を見た途端、ホツとして……私はそのまま雪の上に座り込む。

「あの……ザンキさん」

「よくやった」

ザンキさんは複雑な表情でこっちを見ている。

でもふつと顔を逸らせ、コートを脱ぐと私の体に掛けてくれた。

「とりあえず、一日も早く？フェイスオフ顔だけ変身解除？を覚えてくれ」

「はい……？」

我が師匠の顔がらしくもなく赤くなっている。最初は弟子の変身に喜んでくれたんだ、と思っただけ……。次の瞬間、寒さと恥ずかしさに全身鳥肌が立った！

雪山に私の絶叫がこだましたのは言うまでもない。

く\*く\*く\*く\*

「というように、初変身はとにかく慎重にね」

初めて出来た弟子に向かって、私は真面目くさった顔で話した。明日夢は顔を赤らめたり、青褪めたりしながら聞いている。

「まあ、一番気の毒なのはエイキくんだけどね」

隣で聞いていたみどりさんが口を挟んだ。

彼女もあのとき里にいて、一部始終を知ってる人である。

「エイキさんがどうかしたんですか？」

「うーん、私も自分のことで一杯一杯で、さ。結局、ザンキさんに背負われて里に下りただけ……」

ホントに一切の悪気じゃなく、二人ともエイキのことをうっかり忘れていた。

でも、さすが一人前の鬼！ 魔化魍に専念したエイキは一気にユキグモを粉碎したらしい。で、そのまま里まで下りてくればいいのに、何とその場で変身を解除したと言うのだ。そこに、雪山の麓から地元警察がやって来てしまい……。

「じゃあ、エイキさんも恥ずかしかったでしょうね」

明日夢は気の毒そうに呟くが……いやいやそんなもんじゃない。

「雪山に出現した変質者とか言われちゃって。公然わいせつで現行犯逮捕されてね。結局、先代エイキさんが引き受けに行ったのよね」

みどりさんの説明に明日夢は開いた口が塞がってない。まあ、そうだろう。私もちょっとは悪かったかな、と思ってる。

今となれば エイキの言葉に私は？ 自信？ の意味を知ったんだと思う。相変わらず、二十五にもなってアニメキャラのコスプレをしてくれと煩い奴だけど。

まあ、あの日を境に、私は瑛太のことをエイキを呼ぶようになった。



番外編「吉野の雪 後編」(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

まあ、なんというか…随分ハイテンションの番外編になってしまいました(^^;)」

「エイキの音撃棒はどうだった？」

「緑青だけに錆びてたかも！ 使用頻度が少なすぎるんじゃない？」

なんて、大人の台詞を組み込もうかと思いましたが…(笑)(よい子はスルーしてね いないって！)

エイキとシヨウキ、それと先代エイキさんとか、名前はオリジナルです。

エイキの「緑青」は設定にあったと思うんですが…

ということ、本編もがんばって進めます( 気持ちはある！)

羽衣石さまのリクエストでお届けしました(^^) /  
ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3806i/>

---

僕たちにはヒーローがいる ~仮面ライダー吹雪鬼~

2011年3月21日10時19分発行